

---

**【IS】一夏を男の娘にし、かつ中学まで蘭と同じ学校に通わせるようになった。**

うりー先輩

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

【IS】一夏を男の娘にし、かつ中学まで蘭と同じ学校に通わせるところになった。

### 【Nコード】

N1982W

### 【作者名】

うりー先輩

### 【あらすじ】

一夏「さあ、蘭ちゃん30秒であらすじ紹介しちゃってくださいさ  
い！」

蘭「ええ！？一夏さん突然過ぎますって！番外編のテンションじゃないですか！！」

一夏「あと26秒」

蘭「えええ、え〜っと、一夏さんの性格が変わってて、その一夏さんと関わった人すべての過去もまんべんなく変化してて、篝さんす

ごくかつこよくて」

一夏「15秒」

蘭「9/26の現在では対セシリア戦が大変で、えーっと、えーつと！」

一夏「最後一言！」

蘭「えええ、え〜っと！一夏さん大好き〜！！！」

一夏「」

蘭「え、え」

織斑一夏君によるジャグリング道具紹介With蘭さん(前書き)

本編8話くらいまでを読んでからこれを読むことをお勧めします

## 織斑一夏君によるジャグリング道具紹介 with 蘭さん

一夏「織斑一夏によるジャグリング道具紹介、いえ〜い」

蘭「い、いえ〜い?」

一夏「じゃ、さっそく始めてくね、このボールなんだけど」

蘭「つて!ちよつと待ってください!何なんですか?!この謎コーナー!?!」

一夏「謎コーナーつて・・・っあ!そつかまらずはジャグリングとは何かつていう所から説明しなきゃね!」

蘭「そうですね、大体ジャグリングつて何なんですか、、、つてストップ!ストローップ!そういうことじゃなくてですねっ!このコーナーの存在意義を私は問うているんですっ!?!」

一夏「存在意義は『物語を1、1倍楽しむための』だよ。上に書いてあるじゃないもつっ。」

蘭「1、1倍ですか・・・そもそもなんでジャグリング?」

一夏「え?知らなかったの?僕ジャグラーだよ、本編の第6話でも『趣味はジャグリングだぜ』っ言ってたでしょ。」

蘭「そ、それはそうですけど、、、突然過ぎて頭がついていけないというか、、、なんか腑に落ちないというか・・・」

一夏「よおし！蘭ちゃんの了承を経たからさっそく紹介していくよー！」

蘭「ええっ！？無視！？私の意見はっ！？」

一夏「まず、なんでこんなコーナーが存在するかというと」

蘭「これ、はじめのくだり必要だったのかな・・・」

一夏「本作の一夏君はジャグラーです。となると必然的に僕がジャグってる時の他のキャラクターとからむ時が出てきます。」

蘭「なるほど、なるほど。」

一夏「そんな時、いきなり『ハイトスからエクスカリバーまでおよそ僕が1ディアで出来る全ての技を終え、デヴィルステックへと道具を変えた。』とかいう文章が出てきたら意味わからないよね。」

蘭「たしかにつ！それは意味がわからない！エクスカリバーってなんですか！？」

一夏「でしょ。だからこのコーナーは必要なわけです。まあ単純に読者の人にジャグリングに興味を持ってほしいっていう心もあるけどね。」

蘭「へー、一夏さんにしては真面目な心構え。」

一夏「失敬な。僕はいつだって真剣だよ。」

蘭「あはは、すみません。ところで一夏さんがさっきさりげなく言った『ジャグってる』っていうのは、『ジャグリングをしている』という意味でオツケーですか？」

一夏「そう『ジャグる』は『ジャグリングをする』の略語だね、というかこんなもん日常会話でも使うから誰でも知ってるでしょ。」

蘭「……（使わねーよ。）」

一夏「はい、というわけで場所を移動しましたー。」

蘭「何の変哲もない公園ですね。（今まではどこで話してたんだろう……。）」

一夏「そう公園です、どんなジャグリングをするにしても広いに越したことはないんだぜ。」

蘭「なるほどー、一夏さんもいつも公園で練習してましたもんね、初めて見たときは何モンだあいつって思いました。」

一夏「僕と蘭ちゃんの出会いが公園から始まるってネタバレしちゃったね。」

蘭「・・・シマツタ、、さあ始めていきましよう！最初の道具はなんですかー！？オラわくわくするぞー！！」

一夏「テンションで押し流したな。

まあいいや、最初の道具はこれです。ジャジャーン」

@第「なお、作者の文章力では、道具の形状、使い方、魅力、等すべてを説明しきれませんので、お手数をおかけしますが、出てきた単語を随時、ググる、ヤフる、などして脳内補完をお願いいたします。動画サイトを利用しますとさらに理解が深まると思われれます。

作者

代理篠ノ之第より」

蘭「おお！手のひらサイズに収まる低反発なボールですね！なんと落としても転がりません！」

一夏「説明ありがとう、蘭ちゃん。そう、言わずと知れたジャグリングの王道『ボール』です。『ボール』と言ってもそのジャグスタイルはいろいろありまして、もっとも一般的な複数のボールを空中になげる『トスジャグリング』、体の上を転がしたりして不思議な動きを演出する『コンタクトジャグリング』などなど。」

蘭「へえ〜・・・つあ！もしかしてコンタクトジャグリングってあれですかっ！最近テレビでよくやってる水晶玉みたいな物が浮いてるように見えるやつですかっ？」



一夏「その通りです。それがコンタクトジャグリングの代表的なものです。」

ちなみに、トスジャグリングにしてもコンタクトジャグリングにしても何もボールだけとは限りません。クラブ（ボールリングのピンミたいなやつ）を投げる人もいるし、リングでコンタクトする人もいます、やかんを投げる人もいます。」

蘭「なるほど、では『ボール』の『トスジャグリング』ではなく、『トスジャグリング』の『ボール』と言った方が適切ですね。」

一夏「覚えが早くてよろしい。ちなみに僕が練習してるのはトスジャグリングの方ね。普通にボール投げるよ。」

蘭「やって〜、ボール5個で回して〜。」

一夏「はい、できましたー。ジャグ練習中に友達に出会った時の典型的な友達の反応ーその1〜。ボール5個でやって〜とか言っちゃうー。」

蘭「ええっ!?! いけなかつたですか?」

一夏「・・・いいや全然悪くないんだ。悪くないんだ・・・けどこれだけは覚えておいてほしい。トスジャグリングはボールの数が全てではないということ。ああ、もちろん数が多いというのはすごい。迫力があるし、難しいし、、、でも数が少ないのがショボいという訳ではないんだ。3つでもコンタクト要素を絡めたり、体の後ろ側を使ったりいろんなことが出来る。」

それと、、、ジャグラがみんなボール5個を回せるとは思わない

でくれ、、、後輩。」

蘭「す、すみません先輩、、、（何か悪いこと言っちゃったな・・・」

一夏「ああ、次の道具へ移ろう。次紹介するのはこれです！ジャジャーン」

蘭「ああ！それ知ってます。中国ゴマですよ、大道芸人がやってたの見たことあります。」

一夏「そう、これも有名だね。中国ゴマです、一般的に『ディアボロ』といいます。

二本のハンドスティックにつながれた紐で、ディアボロの中央狭くなった部分に摩擦を与え回転させます。技の種類が豊富で迫力もあるから、多くのジャグラーに好かれているよ。きつと、誰もが一度は見たことのある道具ではないかと思えます。」

蘭「投げて〜、めっちゃ高く投げて〜。」

一夏「はい、できましたー。ジャグ練習中に友達に出会った時の典型的な友達の反応ーその2〜。

ディアボロを全力で投げてとか言っちゃう〜。」

蘭「ええっ！？またダメでしたか！？」

一夏「いや、今回はそれで正解。蘭ちゃんがやってと言った、ディ

アボロを投げ上げてキャッチする技、それをハイトスつて言うのだけど、この技はめっちゃくちゃ簡単です。センスがいいとディアボロをはじめて1週間くらいで習得できます。よほど、ディアボロの練習を始めたばかりではない限りの誰もが出来る技です。」

蘭「そうなんですか、難しい技だと思ってました。」

一夏「そう、だからディアボロを練習している友達を見つけたら『投げて〜めっちゃ高く投げて〜』と言いましょ。大概の場合は投げてくれると思う。そして成功した時には『すげ〜マジすげ〜』などと大きにリアクションをすること。そうしてくれると、ジャグラーとしてはすごくすごく嬉しいら。」

蘭「了解です。今度からそうします。」

一夏「そしてディアボロは何も1つですとは限りません。2つ、3つ、すごい人は4つで回したりもします。一般に1つでするディアボロを『1ディア』、2つは『2ディア』、3つでは『3ディア』と言つよ。」

蘭「ということは、1つのディアボロで出来る技の中に『エクスカリバー』というものがあるんですね。」

一夏「そゆこと。じゃ、実際にエクスカリバーを実演してみるよ。ちよつと離れててね。」

蘭「はい。」

一夏「まずは、ウィップで加速して」

蘭「早速、わからない言葉出てきちゃったけど面倒なので飛ばしま  
す。」

一夏「そしてチャイニーズアクセラレーションの変形から・・・」

蘭「おお！なんかすごいことになってまいります！！ディアポロの  
回転の向きがおかしいです！！」

一夏「エクス・・・カリバーーーーーー  
！！！！（サン ターン ジェノサイド）」

蘭「す、すごい、、一瞬、片方のハンドスティックが一夏さんの  
手から離れました。一夏さんの半径2メートル以内に重力は働い  
ていないのか・・・。」

一夏「と、まあこんな感じですよ。実はエクスカリバーっていうのは  
技名じゃなくて、ディアポロの回転軸を傾け、縦回転で行うスタイ  
ルことを指します。ホライゾンやバーティカルとも言います。」

蘭「いや、すごかったですよ。エクスカリバーという名前が付く  
のも納得です。」

ところで、一夏さんが出来るということは、私たちの中の人も出来  
ると考えていいんでしょうか？」

一夏「どうなのかな@篝さん？」

@篝「真相は作者のブログからどうぞ。下のアドレスから・・・」

<http://jaguringsyoukounn.blog.fc2.com/>

蘭「いい感じに宣伝をしつつ、逃げましたね。」

一夏「ブログまだ作ったばかりだけどね。」

一夏「はい、次の道具はコチラ！じゃじゃーん！」

蘭「タネも仕掛けもなさそうな棒が3本ありますー！1本は70センチくらいで、太さは五百円玉の直径くらい、中心に行くにつれ段々細くなっていますね。もう2本はセンチと前者より短めの45センチほど、太さも平坦でドクターグリップのシャーペンほどしかありません。3本とも表面がゴムっぽくて摩擦が強くなっていますねー。」

一夏「説明ありがとうー。これを『デヴィルスティック』といいます。」

蘭「また、大それた名前ですねー。」

一夏「みんなそう言っています。言葉で説明するのは難しいので実演しまーす。」

蘭「いえーい！」

一夏「まず短い方のスティック2本を左右の手で一本ずつ持ちます。短い方のスティックを『ハンドスティック』といいます。」

蘭「ほうほう。」

一夏「そして、長い方の棒、これを『センタースティック』というのですが、地面に立てたセンタースティックを左右からハンドスティックでコンコンと交互に叩きます。すると……。」

蘭「すると……。」

一夏「ハンドスティックにコンコンと叩かれたまま、センタースティックが空中に浮きます。」

蘭「おおー！！すごいです浮いてます！まるでメトロノームの針のようです！！」

一夏「この状態をアイドリングと言います。アイドリングを基本に様々な技が存在するよ。」

蘭「へえー、不思議な動きですねー。このスティックたちの名前に『デヴィル』が付くのもわかります。」

一夏「でしょでしょ。」

蘭「でも、アイドリング状態なら私だって出来ま」

一夏「はい！出ましたー！ジャグ練習中に友達と出会った時の典型的な友達の反応ーその3ー！

デヴィルスティックのアイドリング状態出来るとか言っちゃっ！」

蘭「まだ言い切ってなかったのっ！？しかも今回は妙に気合が入

っている!」

一夏「いいですよ、出来るって言うならやってもいいですよ。」

蘭「むむー!その挑戦受けて立ちましよう、やってみせますよ!」

一夏「どござ、どござ。」

コン、コン、コン、ポテッ センタースティックが落ちた音

コン、ココン、ポテッ

コン、コン、ココン、ポテッ

コン、コン、コン、コン、ポテッ

蘭「なん……だ。」

一夏「つと、まあ簡単そうに見えて難しいんですよ。デヴィルステイックは。」

蘭「くそう、、ちきしょう、、腰が痛いぜ。。。」

一夏「みなさんもデヴィルスティックを練習している友達がいたら、挑戦させてもらいましょう。多分、蘭ちゃんと同じようにできません。長時間すると腰が痛くなるのでご注意ください。」

蘭「むうー。くーやーしいー。」

一夏「ちなみに、センタースティックにあたる棒は『デヴィルステイック』でなくても可能です。センターにデッキブラシを立ててコンコンとしても持ち上がりまし、モップやコーンでも持ち上がります。およそ細長いものであればなんでもセンタースティックになると言っても過言ではありません。」

コン、コン、ポテツ　まだやってる

3分くらいして

一夏「よし！これで最後の道具だよー！ジャジャーン！」

蘭「腰が、、、腰が、、、痛い、、、。」

一夏「はいはい、シャキツとして。もう一回やるよ。」

蘭「は、はいい。」

一夏「これで最後の道具だよー！ジャジャーン！」

蘭「おお！なんですかこれ、見たことありません！そして形も説明しづらいです！今回はかりはググってもらっしか・・・」

一夏「じゃあ、ググってるといふ前提で話をします。」

蘭「こころ優しい読者のみなさん、やほーでもGoogleでもいいので検索してください。お願いします・・・」



@ 第「作者のブログに来てもらえば画像が・・・下のURLから・・・」

```
http://jagurinnusyoukougunn.bb1  
og.fc2.com/blog-entry-4.html#m  
ore
```

蘭「また、いい感じに宣伝をいれてくれますね〜。」

一夏「もう最初っからブログの宣伝をしてればいいのに・・・」

一夏「気を取り直して、これが僕の本職『ポイ』です。ローマ字表記にすることもあります。」

蘭「ポイですか？どうみてもこれでは金魚はすくえない気がするんですけど・・・」

一夏「そっちのポイではなくてですね、」

蘭「あははーすみません。」

一夏「もうっ、実演するよ。この紐の先端についたハンドルに指を通してですね、」

蘭「通して・・・」

一夏「このように、振り回します。」

蘭「おおっ！すごい！テール部分が綺麗な軌道を描いています！文章ではそれくらいしか伝えることが出来ない！動画サイトで確認してとしか言えない！！」

一夏「だよー。僕が知っている中で紹介するとニコニコ動画の方に一人、すっごーく上手い方がいるよ。作者ではないです。興味があったら探してみてください。その際、動画が荒れる原因となるようなコメントはしないこと。」

蘭「〴〵から来た」っていうやつですよね。」

一夏「その通り。ではポイの話に戻ります、ポイにもいろいろな種類がありまして、テールのついた『インフィニットポイ』、『ウルトラポイ』、テールのない『ベーシックポイ』、『ソックスポイ』、『フラッフィーポイ』、そして『ライトアップポイ』に『ファイアーポイ』などなど。」

蘭「へえー、大体名前から想像がつかますね。一夏さんがさっき実演したのは？」

一夏「インフィニットポイだね。個人的にはストラトスポイとも呼んでるけど。ちなみに、さっき紹介した人は、ウルトラポイ、ライトアップポイを中心に動画を投稿している人だね。」

蘭「ほほう、ファイアーポイっていうのは文字通り……？」

一夏「そう、文字通り火をつけて振り回すポイのことだね。某動画サイトにもその映像がたくさんアップされているよ。」

蘭「ふえー。いろいろあるもんですねー。」

@第「練習する際に注意することおおおおおおおおお！！  
！そのいちいいいいいいいいいい！！」

一夏「うわっ！いきなり変なテンションで出てこないでよっ！」

蘭「び、びつくりです、ゝ、ゝ」

@第「メガネは外すことおおおおおおお！！さも  
なくばあああああつあ！！貴様のメガネのサイズが一回り大き  
くなつちまうぞおおおおおおお！！  
！！」

蘭「どういうことですか？一夏さん。」

一夏「ああーあるある。ポイの先端はテニスボールで出来てあるこ  
とが多いんだけど、回してる最中にメガネに激突してメガネが吹っ  
飛ぶんだ。僕はメガネはかけてないけどそういう人を何人も見たこ  
とあるから。」

蘭「なるほど。」

@第「そのにいいいいいいいい！！みぞおちには気  
を付けることおおおおおおお！！」

蘭「あたる部位がみぞおちであると？」



一夏「はい！これにて第一回織斑一夏によるジャグリング道具紹介  
はおしまい！」

蘭「おつかれさまでしたー。」

一夏「まだまだ紹介してないジャグリング道具もあるけど、これは  
一夏君が嗜んでいるジャグリング道具っていう設定だから、問題な  
し。」

蘭「それにしても、いろいろありましたねー。興味が湧いた人は『  
ナランハ』で検索。」

一夏「ポイの練習は@箒さんが言ったことを十分に注意すること！」

蘭「本編の方もよろしくお願いしますねー。」

一夏「僕とセシリアが姉さんに決闘を申し込んだってところだね！」

蘭・一夏「」ではさよーならー」「」

**織斑一夏君によるジャグリング道具紹介With蘭さん(後書き)**

割り込み投稿は時間が反映されません

だからこんな位置に非本編があります

すみません

## 1話だぜ

目を開けるとそこには、見慣れた天井があった。規則正しく並べられた木製の板。

いつもながらすごくリアルだ

首を傾けると、そこには愛用の目覚まし時計があつて、

まるで現実みたい

さらにその先にある窓からは隣の家の屋根瓦が見える

どね

いや、まあこれは僕がよく見る夢なんだけ

朝の音が聞こえる。小鳥のさえずり、僕よりはるかにはやく起きるチビッコたちの楽しげな笑い声

死んだからかな、

なんで夢ってわかるかっていうと、さっき

あともう慣れたから

体を動かそうとするけど、思うようには動かない

ああ、はーやーくーおーきーたーいー

動けー僕のカラダー

ようやく起き上がる、視界が追いついてこない、頭がククラクラする

って、今日蘭ちゃんと出かけるんじゃない、  
たけ？

ヤバイ早く起きないとっ！

そう考えた瞬間、世界の空気が変わった。不穏な空気に世界が満たされる。コワイ

背中を一本の鉄パイプがつかぬく、そんな感覚が。コワイコワイ、  
タスケテ、シヌ、コロサレル

どこから出てくるのか、何が出てくるのか、どうすれば逃げられるのか。コワイコワイコワイ、コロサレル、タスケテ

耳鳴り、頭が割れそうになるくらいの、おさまらない。コワイコワイコワイコワイコワイ、コロサレル、シヌ、コロサレル、シヌ、コロサレル

腹痛、鋭いもので横腹よこばらをエグられるような。コワイコワイコワイコワイコワイ、コロサレルコロサレルコロサレルタスケテタ



スケテタスケテタスケテ

コワイコワイコワイコワイ、コロサレルコロサレルコロサレル  
ルタスケテタスケテタスケテコワイコワイコワイコワイコ  
ワイ、コロサレルコロサレルコロサレルタスケテタスケテ  
タスケテ

イヤダ シニタクナイ タスケテイヤダ シニタクナイ タスケテ  
イヤダ シニタクナイ タスケテワイコワイコワイコワイ、  
コロサレルコロサレルコロサレルタスケテタスケテタスケテ  
シヌシヌシヌシヌシヌシヌシヌシヌシヌシヌシヌシヌシヌ  
レルシヌコロサレルシヌシヌシヌコロサレル殺サレルシヌシヌ  
死ヌイヤダイヤダ嫌ダコロサレルシヌタスケテタスケテ

コワイコワイコワイコワイ、コロサレルコロサレルコロサレ  
ルタスケテタスケテタスケテコワイコワイコワイコワイコ  
ワイ、コロサレルコロサレルコロサレルタスケテタスケテ  
タスケテ

イヤダ シニタクナイ タスケテイヤダ シニタクナイ タスケテ  
イヤダ シニタクナイ タスケテワイコワイコワイコワイ、  
コロサレルコロサレルコロサレルタスケテタスケテタスケテ  
シヌシヌシヌシヌシヌシヌシヌシヌシヌシヌシヌシヌシヌ  
レルシヌコロサレルシヌシヌシヌコロサレル殺サレルシヌシヌ  
死ヌイヤダイヤダ嫌ダコロサレルシヌタスケテタスケテ

声が聴こえる

小鳥のさえずりの中に、チビッコの笑い声中に、ナニカこえがきこえる

その声はなんといつているのか

聞いてはいけない聞いてはいけない聞いてはいけない聞いてはいけない

聞いてはいけない聞いてはいけない聞いてはいけない聞いてはいけない聞いてはいけない

理解してはいけない理解してはいけない理解してはいけない理解してはいけない

その声は俺になんといっているのか

理解してはいけない理解してはいけない理解してはいけない理解してはいけない

聞いてはいけない聞いてはいけない聞いてはいけない聞いてはいけない聞いてはいけない

聞いてはいけない聞いてはいけない聞いてはいけない聞いてはいけない聞いてはいけない

そのこえはおれにナンといっているルノカ

聞いてはいけない聞いてはいけない聞いてはいけない聞いてはいけない聞いてはいけない

聞いてはいけない聞いてはいけない聞いてはいけない聞いてはいけない聞いてはいけない

聞いてはいけない聞いてはいけない聞いてはいけない聞いてはいけない聞いてはいけない

ソノコエハオリムライチカニナントイツテイルノカ

理解なんてしていない理解なんてしていないリカイなんてしていない  
いりかいナンテしていない

リカイナンテシテイナイリカイナンテシテイナイりかいナンテシテ  
イないりかいなんてしていない

りかいなんてしていないリカイなんてシテいないりかいなんてして  
いないりかいなんてしていない

コロサレル殺される殺されるコロサレル殺されるコロサレル殺され  
るころされるころされるコロサレルころされる

リカイナンテシテイナイリカイナンテシテイナイりかいナンテシテ  
イないりかいなんてしていない

りかいなんてしていないリカイなんてシテいないりかいなんてして  
いないりかいなんてしていない

その声は僕に『死ね』と言っていた

次の瞬間には僕は死んでいた。

「.....やっと起きた」

目を覚ますとそこには見慣れた天井があった。うん、今度は夢じゃないね

目覚まし時計に目をやる。チビッコたちの笑い声なんて聞こえない。

「まだ6時50分じゃない。」

心臓の早鐘はまだ止まらない。汗はダラダラ。

今日はなかなかすごい死に方をした、「声」のパターンはなかなか冷静を保ちにくいからね、今度から気をつけよう。

「・・・ハアあ、シャワー浴びよ」

こうして織斑一夏はその日の朝を迎えた。

## 1話だぜ(後書き)

今回は夢回です。

自分が死んでしまう夢or殺されてしまう夢というのは、「今の自分ではダメだ、変わりたい」という願望があるから見てしまうらしいです。

ー夏君はそんな夢を毎日のようにみているのですから、よほど今の自分に不満らしいですね。

次回からふつうにいきます。

## 2話ツス

「今日は人集まらんぞ。」

そう呟いた少年こそ、織斑一夏である。

土曜日の真冬の夕暮れ、その駅前の特徴である現在は枯れた噴水を背にして、彼はギターを片付け始める。

彼の路上演奏はもうお終いらしい。惜しむ者もいなければ、喜ぶ者もまたいない。

吐く息は白く、六本の弦を弾く五本の指は冷たい。押さえるほうの五本の指に至ってはもう釘が打てそうなほど力チ力チだ。

織斑一夏は中学三年である。本来なら、高校受験という人生の第一試験とでもいうべきイベントに忙くあるべき年齢だが、彼にはそのイベントに参加する必要がなかった。何故なら、彼の通う中学は、

小、中、高、大学一貫の超エリート学校だからだ。彼の人生の第一試練は中学受験という名のもとに既に行われてしまったらしい。

彼がギターとアンプをつなぐコードを束ね始めた時、不意に白い女の手が伸びてきた。

「つえ?」

「ぶいぞ。」

見ると女の手には、長方形の白い紙切れが二枚ある。どうやらそれはお金ではないらしい。

「明日、この近くで開催されるIS博覧会のチケットよ。ほんとは彼と行くつもりだったんだけど、ついさっき電話で逃げられちゃってね。だからもういいの、あなたにあげるわ。」

チケットを受けとる。

「いいんですか？」

彼は女の存在を知っていた。彼が演奏をはじめるとより前からその噴水の前にいて、何かソワソワして辺りをキョロキョロしている、誰がみても彼氏を待っているようにしか見えない女。その様子に変化が訪れたのは彼が演奏を始めて二十分ぐらいの時、携帯電話から耳を離れた彼女はただ茫然としていた。

「あなたの演奏はそれに値するものよ。彼氏とでもデートがてら行ってきなさい。」

フフッと笑って、女は織斑一夏に背を向け歩き出した。

「……いや、僕男だし。」

機材一式を詰め込んだエナメルバッグと勿論ギターの入ったギターケースを重たそうに背負った彼は自宅に帰るべく女と同じ駅方向へと歩みを進め……ようとしてやめた。





## 2話ツス(後書き)

ー夏君のやっているギターはソロギターです、とだけ言うておく。

### 3話でゲス

「ISの博覧会ですか。」

と携帯電話の向こうからお誘いをかけてくれるのは一夏さん、  
もとい私と同じ中学の先輩で、その、私のす、好きな人。

『そうそう、いや、何か変な女の人にいきなりチケットもらっちゃってね、彼氏と行って来いって。』

「へえ、って！？いきなり変な女の人からチケットもらってどんな状況なんですか！？それに彼氏じゃなくて、彼女ですよね！？」

っは！ 言うてから気付いたけど、『彼氏じゃなくて、彼女ですよね』って、私が一夏さんの彼女だって言うてるようなものなんじゃ、気付かれたらどうしよう・・・

『おお、さすが五反田家伝統のツッコミ芸は違うなあー。』

・・・まあ、あの一夏さんだもんね、こんな簡単に私の気持ち悟ら

れてたらもう今頃、、、今頃、ゴニョゴニョ

「・・・はあ、伝統じゃありません。」

キレイのないツッコミ。

『ええっ!?じゃあ、蘭ちゃんのツッコミ芸って蘭ちゃん自身が開拓したものだっただの!?!』

「違いますっ!開拓なんてしてませんっ!大体、私がツッコムのなんて一夏さんしかいませんっ!」

つつは!また言ってから気付いてしまった、『私がツッコムのは一夏さんしかいない』って私が一夏さんに対して特別な感情を抱いているようにしか聞こえないセリフっ!今度こそ気付かれるっ、、、

『へえー、ということは蘭ちゃんって普段はボケなんだ。 89へえ〜。』

・・・いや、まあ、わかっちゃいたんだけどね。この程度で一夏さんが乙女心に気付くハズなんてないって、もう一夏さんと付き合っ  
て、この場合の『付き合っ』は知り合っの意味の方ね、2年  
は経つんだからこのくらい分かって当然だっの。それにしても  
89へえ〜か意外とたか

『っあ、今気づいたけど』私がツツコムのは一夏さんしかいませ  
ん『って何か卑猥に聞こえる。』

「っなっつっ！！！！！？？？？？」

ひ、卑猥っていったの！？い、一夏さんが！？『ツツコム』が！？  
『ツツコム』って一体私は何を一夏さんにツツコムのだろう  
いや、むしろ私が一夏さんにツツコまれる側なのでは？

あああ！何を考えているのっ！？私はっ！？

いや、私が一夏さんにツッコムのもありか・・・  
違う違う違う違う!!何を想像している私っ!!

『おい、蘭ちゃん、どしたのー?』

「い、一夏さんの変態――――――!!.....!!」

『え、ええ――――――?!』

ツ、ツ、ツ、ツ。

「っつして私は一夏さんとデートっ?することになった。



#### 4話だから

「え、この度は先日の電話において、青少年に不適切と思われる表現の発言があったこと深くお詫び申し上げます。」

初手謝罪安定。

日曜日の朝10時ごろ、デート（仮）の待ち合わせ場所、、もと  
い五反田家の家の前で開口一番に謝罪の言葉を口にした。

もちろん、五反田蘭にむかって。

「もう、そのことはいいです。フンッ」

・・・うう、なんか怒ってらっしゃる。

このまえ、弾君（蘭ちゃんの兄貴）の部屋にあったえっちな漫画  
読んで、



なんとなくそれっぽいなと思って、言ってみただけなのに。

なにか、なにかあ、ご機嫌取りをしなければあ。

「それより一夏さん、なにか私に言うことはないんですか？」

「っえ？」

蘭ちゃんご機嫌回復作戦を練る作業は一時中断。

い、言うこと？、蘭ちゃんに言うこと？

とりあえず蘭ちゃんを上から下までまじまじと見てみる。

まじまじ、まじまじ

「そ、そんなにジロジロ見ないでください／＼／」

目を背けて顔を赤くする蘭ちゃん・・・

ジロジロ、まじまじ、ジロジロ、マジマジ

「じゅう」

・・・うん、わかった。

「蘭ちゃんは可愛い。」

「っな!!??」

頭から湯気をだす蘭ちゃん。すごく可愛い。

服のことはよく分かるので、抽象的な表現しか使えないけど、全

体的に落ち着いた雰囲気で、それでいて地味ではないかんじ。ホントに抽象的だなオイ

それはすごくセンスのいい配色とか着こなしなのだと思います。

「あれでしょ、前言ってたデートで待ち合わせした時は、まず相手のことを褒めろってやつでしょ。」

よく思い出した、僕えらい。

「っそ、それはそうなんですけど・・・」

??、なんか間違ってたかな？ うゝむ、わからん。

「まいいや、むごつで姉さん車で待たせてるから早くいっしょ。」

蘭ちゃんの手を取って歩き出す。

「はう・・・」

「じゃ姉さん、送迎よろしく。」

車の後部座席に二人で乗り込む。

「ふんっ、朝っぱらからイチャイチャしおって。」

姉さんもちよっと機嫌悪いのかな？

そりゃあ、せつかくの休日なのにガキンチョの足になんなきやいけないとかなったら嫌だよな。

あとでちゃんとお礼を言っておこう。

「す、すいません・・・。」

ようやくいつもの白に戻り始めた蘭ちゃんの顔がまたちょっと赤くなる。

「別にイチヤイチャなんてしてなっイタツツ。」

座ったままでも蘭ちゃんのかかと落としの威力はここまでであるのか・・・

「そなた何故、足を踏む？」

「自業自得ですっ!」

え〜

side change

車に揺られること20分、何回目になるのか私は一夏さんの顔を盗み見た。

・・・寝てるし、

さっきから急に静かになったから、もしやとは思っていたけど本当に寝ているとは・・・

それに寝るならこっちに寄りかかってくれたらいいのに、何故窓ガラスの方へ寄りかかる？

さっきから車の振動で頭とガラスの間がゴンゴン鳴ってますよ。痛くないんですかね。

それにしても一夏さんの寝顔は珍しい。なんというか・・・かわいい。

私より可愛いんじゃないかなと、少し女としての自信を失う。

とつか一夏さんは本当に男なのだろうか？いや、男であるはずがない。きつと一夏さんは女なんだ。

これは、確かめるしかない、一夏さんの真の性別

を！！

・・・ツフツフ、偶然にも一夏さんは現在おねむ中、確認するに好機な状況この上あらず。

る

いぞ、尋常にっ！

思い立ったが吉であ

そう思い立った私は、一夏さんの下半身部入手をのばし

「おい、五反田。」

「っわっひゃあー！！??？」

っは！私は一体なにをっ！！??千冬さんいたのか!???

というかバレテないだろうか、一夏さんの性別を確かめるために下半身のモノを触ろうとしたなんて、あの千冬さんに知られたら・・・

殺される、もしくは社会的に抹殺されるう、、、やばい、やばい  
どうしよう、助けて一夏さん

「なんだ？いきなり奇声をあげて？」

「…………ふう、よかつたどうやら私の未遂行為はばれていないようだ。」

あれだ、まだ思考がよく働いていなかったんだ。

夜は下ネタで攻められて、朝にはいきなり『可愛い』とか言われちゃって、、えへへ、この文章だけ見ると私と一夏さんがすごく幸せな関係にあるみたい、、えへへ

そんなこんなで正常な思考に戻ってなかったんだよねー。

「そう、つまり普通の私なら、本当の性別を確認するために一夏さんの下半身のモノに触ろうなんてありえないってこと。」

「ほお、お前一夏にそんなことしようとしたのか？」



し、しまった――――！！！！

声に出してしまった――――！！！！

終わりだ――――！！！！この世の終わりだ――――

――！！！！

「たしかに、一夏の言動、思考は常識とズレているところが少なからずあるが、お前も大概だと思っぞ。」

「すみませんすみませんもうしません許してお願いしますこのブラコン野郎すみませんすみません許してください」

「今回の件と、今さりげなく私を罵倒したことはさて置いて、ほれ」

えっ？ 運転席の千冬さんからデジタルカメラを渡される。

「一夏の貴重な寝顔だ、記録しないわけにはいかないだろう。」

「は、はあ。」

写真か、その発想はなかったな。後で私の携帯でも撮っておこう。

「一夏が人前で寝るのは珍しい。いや、人前に限らず寝ること自体珍しい。私も一応一夏の寝顔写真は120枚程度所持している、しかしそのほとんどは幼少期で夜の睡眠時に撮ったものだ。中学に上がってからの写真は5枚とない。しかもその五枚も朝方わたしが3時半起きで一夏の部屋に侵入し秘密裏に撮影したものだ。部屋が暗かった故にあまり顔がきれいに映っていない。つまりこれは奇跡とでも呼ぶべき超レアな状況だ。いや奇跡などという範疇にはおさめてしまつては一夏の寝顔に失礼だな。神秘だ。神秘なのだ、比喻表現ではなく単純な純粋な神秘なのだ。この神秘に免じてお前の先ほどの未遂行為および私をブロンと呼びわりのことは見逃してやる。だがな、忘れるな、お前は今神秘に触れているということ。本来ならお前のような一夏とちょーと仲が良くて、ちょーと一夏に懐かれてて、ちょーと一夏がお世話になっているだけのムシケラがこの神秘の写真を撮ろうとなど絶対にありえないことなのだからな。撮れよ、ちゃんと撮れよ、300枚は撮れよ、360度あらゆる角度から撮れよ、わかったな？わかったな？こんなことはありえないと思うが、貴様まさか自分の携帯でも神秘を記録しようとか思っていないだろうな？だろっうな？あああんっ！？ほう、そうかそうかさすがの貴様もそこまで落ちぶれてはいなかった。安心したぞ。では、撮影作業を開始しろ。」

「は、はいーーーーー、私めにお任せをーーーーー」。

こわい、ブラコンこわい。

一夏さんの寝顔をセンターに入れてシャッター。パシヤ 一夏さん  
の寝顔をセンターに入れてシャッター。パシヤ  
一夏さんの寝顔をセンターに入れてシャッター。パシヤ 一夏さん  
の・・・

パシヤ カシヤ パシヤ パシヤ パシヤ パシヤ カシヤ パシヤ  
ヤ パシヤ カシヤ パシヤ パシヤ パシヤ パシヤ カシヤ  
パシヤ

パシヤ カシヤ パシヤ パシヤ トツタノカヨ パシヤ カシ  
ヤ パシヤ パシヤ カシヤ パシヤ パシヤ パシヤ パシヤ  
カシヤ パシヤ

パシヤ カシヤ パシヤ パシヤ パシヤ パシヤ カシヤ パシ  
ヤ パシヤ カシヤ パシヤ パシヤ パシヤ パシヤ カシヤ  
パシヤ

パシヤ カシヤ パシヤ パシヤ パシヤ パシヤ カシヤ パシ  
ヤ パシヤ カシヤ パシヤ パシヤ パシヤ パシヤ カシヤ  
パシヤ

「五反田。」

「は、はい。なんでございますか？」

いきなり名前を呼ばれてびっくりしたけど、写真撮影は継続しながら応答。　パシャ　パシャ　パシャッ

「いや、写真はもういい。いくら私でも300枚もいらぬ。70枚程度で十分だ。」

それでも多いわっ。心の中でツッコミをいれておく。

ともあれ、撮った枚数がちょうど70枚程度だったので撮影作業を終了し、デジカメを千冬さんに返却。

「一夏は、その、学校ではどうなんだ？」

「えっ。」

予想外だったので驚く。

「ほら、友達とか、一夏は学校のこと全然話さない。少し不安でな、あいつが学校関連の話をする時、お前か鳳の名前しか聞いたことがないからな。」

ああ、そっか。千冬さんは一夏さんのことが心配なんだ。なんだかんだいって姉弟で家族だもんね。

きつと千冬さんは普段から一夏さんに学校の話とか聞きたくて堪らないんだろっけど、

恥ずかしくて聞けないのだろう、一夏さんにその気持ちを悟られるのが嫌で。

ブラコンなのに何故かそういう所だけは不器用なんだよねー、千冬さんは。

「大丈夫ですよ、千冬さん。一夏さんは今はもう学校でも明るいですし、人間関係も良好です。」

一夏さん本人はどう思ってるかは知りませんが、一夏さんを友達だと思っている人はたくさんいます。一夏さんにとって『友達』の

ハードルがすごく高いからその人達の話はしなくて、私や鈴さんはそのハードルをちよつと頑張つて飛び越えただけです。

学校生活の一夏さんで千冬さんに心配を与えるような要素はありませんよ。」

「・・・そうか。悪かつたな変なことを聞いて。」

「いえいえ、全然変なことじゃありません。・・・あ、それと私も一夏さんが学校以外の話をする時、千冬さん以外の名前を聞いたことがありませんよ。」

「・・・・・・・・」

何も言わない千冬さんだけど、その様子から心境は伝わる。

誰が見てもわかるほど、千冬さんはあきらかに

照れていた。



そんなこんなで、女2人男1人の車旅を終え目的地に着いた。

車から降りた瞬間すごい勢いで千冬さんが襲いかかってきたけど、そこは一夏さんに何とかなだめてもらって私は事なきを得る。

実は、あの発言をしてから、運転席からのすごい怒気にビクビクしていたのだけれど、千冬さんの意外な一面がみれたのでよしとする。

それにしても、一夏さんが千冬さんから私を守る姿と言ったら、かっこよかった。



#### 4話だから（後書き）

キャラ崩壊なんてしていない。

## 5話だだだだ

「うん、どこどこ？」

状況を確認しようか。

場所は、IS博覧会の会場の建物内 . . . . . のハズ  
時刻は、11時30分 . . . . . 着いてから  
1時間も経ってない。  
蘭ちゃんは . . . . . はぐれた

いやいやいやいや、おかしいでしょこれ!?

さっきまでその辺に蘭ちゃんいてー、『ワンオフ・アビリティーの  
発動条件と過去の事例』っていう展示読んでー、姉さんのアビリ  
ティー強いなとか思ってたら、 . . . . . いつの間に  
かひとりぼっちだぜ。蘭ちゃんどころか、他の人も全員いないし . . . . .

まあ、なんいせよ蘭ちゃんとはぐれてからまだ5分と経っていない、  
フラフラしとけばそのうちもどれるでしょ。

特に深く考えず、歩き出す。

一人で歩くということに少し感傷深くなった。

五反田蘭という存在がなければおそらく僕は、この博覧会を独りで歩いてだろう。

今回の博覧会だけでなくデフォルトとしての独り。

勿論、僕が四六時中蘭ちゃんと一緒にいて、一人で寂しいぜ、うわーん、うわーん。

と言うわけではない。

歩いていれば二人になれるという安心感と、孤独であるという不安感が『一人』である現在にはあるけれど

『独り』であったはずの現在ではその二つともを感じることは絶対になかっただろう。

・・・まあ、なんかよくわかんないけど、蘭ちゃんがいて良かったっていうこと。

言わせないで恥ずかしい・・・

そもそも僕はいつから『独り』になって、どこから『一人』になっ

たのか、もとい五反田蘭と出会ったのか。

時は遡って中学1年の冬手前11月ごろの

っと左手の方にドアを発見。

『織斑一夏、五反田蘭との邂逅編』はまた今度ということので、とりあえず入ってみるか。

ガチャ

「あれは・・・IS?」

部屋の中央にどっしりと腰を据えている鎧。

「打鉄かな?」

さっき見てた展示のレプリカ、写真と似てるなと思ったただけだけど。近接戦闘に向いてるとかなんとか。

本物？

いや、本物であるかどうかは置いておいて、ISがあるっていうことは少なくともここはIS博覧会会場で合っているらしい。

女性にしか動かせないんだよね。

『 ” IS ” 正式名称 ” インフィニット・ストラトス ”

宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツ。』

手元の資料、もとい入館時にもらったパンフレットにはそう書いてある。

でも実際は宇宙進出は一向に進まず、結果このスペックを持って余した機械は『兵器』へと変わり、しかしそれは各国の思惑から『スポーツ』にと落ち着いた。所謂、飛行パワードスーツである。これもパンフレットに書いてあることなんだけどね。

ISのある一歩手前まで歩く。

触ってみたいと思って手を伸ばした、けど引つ込めた。

普段からよく女と間違われる僕だからもしかしたらISも勘違いし

て動くかも、とかいう馬鹿げた思考以上に展示品に触ろうとする行為の方が馬鹿げていたからだ。

立ち去ろうとして『ドンツ!』と背中を押された。当然、体は前によろめく

誰っ!??と振り向く前に、まだ引っ込めきれていなかった右手がISに触れる。

キンツという金属音が頭に響く。

.....自分の意志とは関係なく頭に流れ込んでくる情報の数々。

金属音は更に強くなる。

.....ISの基本動作、操縦方法、性能、特性

金属音は鳴りやまない。

.....活動限界時間、行動範囲、センサー精度



てしまうともっと怖くなることを

俺は知っている。

だから怖くなんかない、この耳鳴りに恐怖なんて覚ええない。

だから怖くなんかない、この耳鳴りに恐怖なんて覚ええない。

だからコワくなんかない、このミミナリにキョウフなんて覚ええない。

だからコワくなんかない、このミミナリにキョウフなんてオボえない。

い。

ダカラコワくなんかない、このミミナリにキョウフなんておぼえない。

い。

ダカラコワくなんかない、このミミナリにキョウフなんてオボえない。

い。

だからコワくなんかない、このミミナリにキョウフなんておぼえない。

ない。

だからコワくなんかない、このミミナリにキョウフなんておぼえない。

い。

長い長い、終わらない金属音が体を蝕んでいく、既に意識はない。

全身が芯から冷やされて、冷たく冷たくなっていく。

この感覚を織斑一夏は知っている、いや熟知している、世界の誰よりも理解している。



耳が痛くて、動けなくて、ただただ見えない恐怖におびえる。

経験しているが故にその対処方法を織斑一夏は知っていた。

ひたすらに待てばいい。

そうすれば勝手に夢は醒めて、いつもの現実に戻ることができる。

だがこの感覚を味わう現在は夢ではなく、現実である。

そのことが織斑一夏を混乱させる原因の大部分を占めているだろう。

「  
？@\* ん！」

その音がだれかの声に似ていても、今の織斑一夏には考えることす

ら出来ない。

何も聞こえない、聞こえてなんていない。聞こえるのは耳鳴りだけ  
聞こうとしてはいけない、それは朝学んだこと

だからコワくなんかない、このミミナリにキョウフなんておぼえな  
い。

何も聞こえない、聞こえてなんていない。聞こえるのはミミナリだけ  
聞こうとしてはいけない、それはアサマナんだこと

だからコワくなんかない、このミミナリにキョウフなんてオボえな  
い。

もキコエナイ、きこえてなんてイナイ。キコエるのはみみなりだけ  
きこうとしてはイケナイ、それは まなんだこと

だからコワくなんかない、このミミナリにキョウフなんてオボエナ  
い。

「 イ@ ￥ん!! 」

でもその声は何を意図して発せられているのか、何故か織斑一夏に  
は理解が出来た。

助けてほしいだなんて思わない

だからコワくなんかない、このミミナリにキョウフなんて覚えない。  
たすけてほしいだんておもわない

もキコエナイ、きこえてなんてイナイ。キコエるのはみみなりだけ  
きこうとしてはイケナイ、それは まなんだこと  
タスケテほしいだんておもわナイ

だからコワくなんかない、このミミナリにキョウフなんてオボえない。

タスケテホシイダナンテオモツテイナイ

もキコエナイ、きこえてなんてイナイ。キコエるのはみみなりだけ  
きこうとしてはイケナイ、それは まなんだこと

「 イチ サン！！ 」

一層強くなる耳鳴りに、抵抗する力が戻ってくる。

たすけてほしいだんてオモツテ

ゴタン ラ ニタスケテホシイダナンテ

ゴタンダランにたすけてホシイダナンテ

ごたんだらんにたしけてほしいダんて

蘭ちゃんに助けてほしいだ

なんて

「……夏ちゃん……！」

「ふえっ?!」

耳鳴りが止んで、視界が戻って、その先に見えているもので理解できるのは

ホッと安堵の表情でこっちを見る蘭ちゃんと、『IS』ぐらいだった。

## 5 話だだだだ (後書き)

まさかの原作と同じパターン

## 6話どすえ

何故、男である僕がここにいるのか？

(以下、織斑一夏の脳内対談)

そもそも『ここ』ってどこなの？

『ここ』とは、IS学園1年1組の教室、最前列の真ん中の机のこと。

現在は、IS学園入学式終了後それぞれの教室にわかれての自己紹介タイムさ。

IS学園では少しでも多くのISに関する授業を入れるために入学式当日から通常授業が始まるのさ。

わかったさ。では何故男である僕がIS学園に入学してるのさ？

それは織斑一夏がIS博覧会とかに行っちゃって、迷子になって発見したISを触ったらいつものアレがきて気付いたら動いちゃったからつた。

なるほどうさ、それにしても視線を感じるうさ。クラスのみんなから見られている気がするうさ。

仕方ないうさ。なにせ世界初の男のIS操縦者うさ。みんな気になるうさ。

それより次はイギリス代表候補生の自己紹介うさ。ちゃんと聞いておく方がいいうさ。

「イギリス代表候補生、セシリア・オルコットですわ。

第三世代装備『ブルー・ティアーズ』の第一運用試験者に若くして選ばされた、セシリア・オルコットですわ。特技と言ってはなんですが、バイオリンとピアノを嗜んでいますの。これはオルコット家が古くから伝統であり、楽器を弾いている女性こそ麗しいという代々のオルコット家の気高き思想でもありますから、わたくしもその伝統、思想を守り、誇りにするべく幼少期からの厳しいお稽古にも屈せず、その腕前は母からも認められていますわ。最近では創作料理にも取り組んでおり

何で名前二回言ったの？

語尾を忘れているつよよ。

ナントカ カントカ ウンヌン カンヌン ナントカ カント  
カ・・・・・・・・以上ですわ。」

やっと終わったつよ。長すぎて全然覚えられなかったつよ。

仕方ないつよ。

せいぜい

セシリア・オルコットはイギリス代表候補生で新装備の試験運用を  
任せており

幼い頃からのバイオリンとピアノが趣味でしかもその腕前は母親の  
折り紙つき、

最近では創作料理にも手を出しており、男という存在があんま  
し好きじゃなくて



今は亡き母という偉大な存在をこよなく愛し、尊敬していて  
IS 関連でわからないことがあれば答えてあげないわけではない  
ということぐらいしか覚えてないうさ。

全部おぼえてるじゃねえかうさ！

それより、箒の方が気になるうさ。

篠ノ之箒うさ？どうしてうさ？

箒は幼馴染うさ。小学4何年の終わりまで一緒に道場で剣道を習っ  
ていたうさ。

箒はめっちゃくちや強くて試合をしても負けてはっかしたうさ。  
それに、箒は去年の中学の剣道で全国大会優勝しているうさ。

ということとは約6年ぶりのさいかいうさ。感動の再開うさ。

ううむ、でも6年という時間は長いうさ。

むこうは覚えてないかもしれないうさ、不安うさ。

元気を出すうさ！やってみなければわからないうさっ！

果敢にアタックするうさっ！

っえ？別に覚えてもらってなくてもいいうさ。

・・・お前案外ひどい奴うさね。

箒はいい人だからきつとまた一からの関係でお友達になってもらえ

るうさ。

前言撤回うさ、お前はやっぱりひどい奴じゃないうさ。

うさ？

それより今日の入学式で姉さんらしき人物を見たうさ。

姉さんは仕事だから入学式にはこれないと言っていたうさ。

姉さんというと織斑千冬のことかうさ？

そううさ。見間違いだったかうさ？

いや、織斑一夏の視力は両目とも1、2うさ。見間違えるわけないうさ。

ならやっぱり姉さんは入学式に来ていたうさか、

次の自己紹介でお前の番うさ、準備しておく方がいいうさ。

うん、わかっ

ガラッという音を立てて、教室前方の扉が開かれる。

同時にその音は、織斑一夏脳内対談終了の合図でもあった。

一人の女性が入室してくる。

下から順に、黒のストッキングに包まれたスラリと伸びる美脚  
引き締まったヒップを強調させるタイトスカート  
出るところはしっかり出ている、それはスーツの上か  
らでもわかる。

鷹を思わせる鋭い吊り目が特徴の凜とした顔立ち

頭なでなでされながら、あの美脚にはさまれ

「つて！？姉さん?!」

あまりの驚愕に思わず立ち上がってしまった。

「学校では織斑先生と呼べ、馬鹿者ッ！」

スパーン！と頭を叩かれる、、出席簿アタック!?、、

「なんでっ！？保護者の人は講堂で説明会があるんでしょ！」

「私は教師だと言っているだろう！」

スパーン！

初耳だぜよ。姉さんがIS学園の教員だったなんて・・・  
頭が事態についていけない。

「次はお前の番だろ早く自己紹介をしろ。」

・・・ああ、そっか自己紹介か、

既に立っていたその場から、教室後方へと向き直り・・・

・・・大勢の前で話すことはわりかし慣れてる

「OO中学、出身の織斑一夏です、みんなも知っている通り、ここにいる自称教師の不審な女の弟で「スパーン！」すみません真面目にやります。」

中学の頃は、演劇部でした、結構真剣にやっていたつもりです。趣味は、ジャグリングと読書です、特技は暗記です。

世界初の男のIS操縦者とかで騒がれてるけど、中身は普通の15歳の少年なので気軽に接してください、これから1年よろしくお願ひします。」

ふう、完璧な自己紹介だ、昨日蘭ちゃんに電話しただけはある。

Side change

「これから1年よろしくお願いします。」

一夏の自己紹介が終わった。

、、、、、、一夏はあんなに流暢な自己紹介が出来るやつだったろうか？

少なくとも私の知っている一夏、6年前の一夏なら、、

『織斑一夏です、よろしくお願いします。』

で、終わりだっただろう。

演劇部に所属していたと言っていたな、その辺が関係しているのだろうか？

しかし、姿、形、容姿に目立った変化はない。

いや、まるつきり昔のまんまという訳ではないが、あの細くて、ちびっこくて、髪の毛サラサラで、可愛い顔がそのまま成長したというかんじだ。

私も一夏に出会って間もないころは一夏は女だと信じて疑わなかったからな。

「キヤーーーーー！千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」

ざわ、ざわ、わー、わー、がや、がや

教室が騒がしくなる。千冬さ、織斑先生が自己紹介をしたらしい。

一夏のこと考えてて全く聞いていなかった、

つく！人の話、ましてこれからお世話になるであろう先生の話聞いていなかったなどは！

篠ノ之流剣術の後継者にあるまじき行為だ。今度から気を付けねば。

・

「・・・毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させているの

か？」

それにしても一夏の横顔は可愛い  
もう織斑先生の話とか聞いてない

私の席は最前列の窓際左端だから、首を90度右に向けると自然と一夏の横顔が見える。

じーっと見つめてしまう。

一夏は私の幼馴染で同門だった。

同じ道場で剣道を学び、同じ学校で勉学に励む。

必然的に私と一夏が一緒に過ごす時間は多くなっていた。

「おとおんな」とクラスの男子にからかわれても、大人な対応で無視し担任に逐一報告していた私だが、一夏が男子から「おんなおとこ」と、からかわれているのを見た時は思わずその男子達に手をあげてしまった。

『お前たち、集団で一人の女の子をいじめて恥ずかしくないのか！  
私が成敗してくれる！』

『僕は男・・・』

『つえ。』

この頃は学校でも道場でも全く話さなかった私と一夏だが、これを期に少しずつ会話をするようになった。

織斑一夏、それはもう静かな奴だった、学校での休み時間はずっと本を読んでいて、クラスの誰とも喋らない。そのくせ成績は優秀、運動神経は抜群。私以上にクラスで浮いた存在だった。

本気で友達が私以外にいなかったと思う。

クラスに限らず道場でも誰かと喋っているところをみたことがな．．．

．．．いや、一人例外がいた。忘れてはならない忌まわしきヤツがいた。

篠ノ之束、一夏は何故か私の姉だけには懐いていた。

それはもう、飛びついてたり、抱きついてたり、耳掃除 and 膝枕してたり、一緒に寝てたり、勝手に二人で旅行に行っていたり、口を開けば二言目には束、しまいには道場で出会った瞬間「今日は束さんか？」と聞いてくる始末。



私の方が長い時間一緒にいたはずなのに一夏は何故・・・むうー！

思い出すと腹が立ってきた。やめよう。

道場での一夏は練習熱心だった。誰よりも早く道場に来て、誰よりも遅くまで練習する、それに加え朝練までしているという。

無論、私も朝の修練をかかしたことはないが、私より一夏の方がそれにかかる時間が長かった。

私は5時半から、一夏は5時から、、、人生で初めて悔しいと感じた瞬間だったと思う。

その剣道の腕前も確かなもので、そこいらの同年代には負けないほどの実力を持っていた。

まあ、私が一夏に負けたことはないがな。

そう、小学4年生の春、その日も一夏は誰よりもやく道場に来て竹刀を振っていた。

もうすっかり友達になった私と一夏だったが、何を思ったのか私はこんなことを聞いていた。

『一夏、どうしてお前はそんなに練習するのだ？』

この問いかけに対する答えは容易に想像できた。

『強くなりたいたいから』とか『碁に勝ちたいから』とかおおよそんな答えだろうなど、幼いながら予想していた。

しかし、その返答は私の予想の斜め上に行くもので

『多才になりたいから。』

と一夏は言った。

この発言に対し私はどう思ったのか、もう覚えていないけど

少なくとも『東さんがいるから』とかいう答えじゃなくてよかった  
と思う。

ざわ、ざわ、がやがや、ざわわ、がやがや

教室が再び騒がしくなる。

ああ、SHR後の休み時間か。昔のことを思い出していたばかりに  
全く気が付かなかった。

右からこちらに歩み寄る影が見える……………一夏だ。

「筈。」

懐かしい声とそのイントネーション。若干声は低くなっているだろ  
うか？

「なんだ？東なら今日はいないぞ。」

「ええっ！？」

旧友との再会に自然と私の頬は緩んでいた。

## 6話どすえ（後書き）

筭は若干大人っぽくなっています。

次回は衝撃の展開ですわ！

## 7話以外ありえない

入学式初日のSHR、もとい自己紹介タイムが終わり、1時間目と  
の間の休み時間になる。

僕は旧友との再会を確認すべく席を立った。

篤は変わった。

いや、6年も経ったんだから外見が変わるのは当然だけど、、、な  
んというか大人っぽくなってる。

外見もあるけど、落ち着いた雰囲気纏っているというか、神聖な  
オーラがをかもし出しているというか、ポニーテールがすごく可愛  
いというか、、、

「篤。」

その机の前に立ち、その名前を口にする。

どんな反応をするのだろうか。何せ6年振りだから、楽しみになる

つてもんですよ。

「なんだ？東なら今日はいないぞ。」

「ええっ！？」

なんでいきなり東さんっ！？いや、気になってはいたけどっ！？

「違ったか？お前が自分から話しかけてくるなんて姉さんのこと以外ありあえないだろ。」

「違うよっ！そして東さん以外のことでも話しかけるしっ！」

「そうか、久しぶりだな一夏。6年振りか。」

「最初からそう言ってよもっっ、、、久しぶり箒。」

6年振りだな、、、本当に、、、

「東さんとは連絡取れてる？」

「ほらやはり、一言目には姉さんのことを言う。」

「ふぐう。」

ぐはっ！極めて自然な流れで東さんについて聞いてたっ！？

「姉さんなら心配ない。ひょっこり家に現れて、夕飯だけ食べて消えるという現象が月一で起こるくらいだからな。」

「そ、そっか、なら大丈夫だね。」

「お前こそ、千冬さんとは何もなかったのか？（あのブランコと何も無いとは思えないがな・・・）」

「ん？何かって何が？」



何だろうか？何かあるといえばたくさんあったけど・・・

「いや、いいんだ、忘れてくれ。　（あんまり言つと聞かれてるかもしれない・・・）」

「そ、そう・・・っあ、そうだ優勝したんだってね、剣道。おめでと。」

「あ、ありがとう、よく知っているな。」

「実は算は中学1、2年の頃から優勝出来る実力を持っていたんだけど、中学の顧問の先生が上級生を中心に出しますっていうタイプだったから出れなかったんでしょ。」

「何故そんなことまで知っている?!」

「んー、東さんから聞いた。」

僕が中一の頃かな、東さんが電話で『あの顧問抹殺する！算ちゃんを出さないなんてっ！』って言い出だして、必死に止めてたのをよく覚えてる。中二の時は『教員免許とつたから、顧問代ってくるね！』なんて言つてたな、止めたけど。東さんなら本当にやりかねん。

・・・っと箸が何か怪訝そうにこっちを見つめてる。

な、な、なんだろうか？

「一夏、やはりお前は二重人格かなんかだったのか？」

「ろ、6年もあればいろいろと変わるでしょっ！喋り方も性格もっ  
っ！」

キーンコーンカーンコーン

休み時間を終了させるチャイムが鳴る。

「ま、また後でね。」

「ああ。」

小走りで自分の席へ戻る。

1時間目、2時間目と終了して休み時間到来。

両方とも専門授業、ISの授業だったんだけど、難しくはなかった。すべて、僕がISを動かした翌日から個別IS授業を始めてくれた聖マリアンヌ学園のおかげです。ありがとうございます。

ちなみに、1時間目終了後の休み時間、幕が『どこか頭を打ったのか!』とか『良い精神科医を紹介してやるっ!』とか『し、信じられない。一夏がこんなにまともに人と話をするなんて・・・』とかなんとか言ってたけど・・・

そんなに変わったのかな僕・・・確かに小学校低学年から高学年にかけてはいろいろと迷走し始めた時期ではあるけど、人と話をしないうとまではなかったはず、、、、なかつたはず、、、、はず、、、、。

「ちょっと、よろしくって?」

「っへ？あ、うん、よろしいよ。」

声をかけてきたのは、イギリス代表候補生セシリア・オルコットだった。

若くして新装備の試験運用者に選抜されたセシリア・オルコットだった。

鮮やかな金髪の、白人特有の透き通るような白い肌とそのブルーの瞳、100人が見れば100人が振り返る美少女、セシリア・オルコットだった。

本人は二回しか言っていなかったけど、僕は三回言っておいた。

周囲からの視線がより一層強くなる。数も増える。

「まあ！なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがあるのではないかしら？」

「っえ、三回も言ったんだけど足りなかったかな？」

「三回？何を言っていますのあなたは？」

しまった、適当に答えてしまった。

視界の端にチラチラと映る我が幼馴染の顔は『それでこそ一夏だ。』とウンウンと頷いている。

くそ、なんか悔しいぞ。

「ごめん、ごめんポーっとしてた、で、何かな？オルコットさん。」

「あなた、本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運ですよ。ポーっとしている暇なんてありますの？」

ここで腹を立てては、視界の端の幼馴染『やらかせっ！昔みたいに何かやらかせっ！』というニヤニヤ顔の思いつぼなので、極めて冷静に対応しよう。

大丈夫、この手のタイプの女性との接し方は過去に一回学んでるから。

「ごめんね、まだごういう雰囲気、慣れてなくて・・・」

「あら、そうですね。庶民がいきなりわたくしのような高貴な人間に話しかけられては緊張してしまうのも当然のことですもの。楽にしてくれてもよろしくですよ。」

「いや、この学校の雰囲気に慣れないって言ったつもりなんだけど・・・」

視界の端の幼馴染の顔は『ピッチャーびびってる！ヘイツ！ヘイツ！ヘーイッ！』と、絶対箒の方がキャラ変わってるでしょこれ。それ以前になんで顔で言ってることがわかるんだろう・・・

「うん、オルコットさんはどことなくそういうオーラでてるから、」

視界の端の幼馴染『小者臭だろっつ、小者臭って言えよー！』っていう顔、、、もうつつこまない。現実の箒はそんなこと言わない、これは僕が創り出している幻聴、いや顔だから幻顔。

「あなた、庶民にはなかなかわかっていきますのね。まあ、あな

たでしたらISのことでわからないことがあれば、泣いて頼まれたら教えて差し上げててもよくなってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから。座学でも次席でしたのよ。」

「そうなんだ、オルコットさんはすごいね。じゃあISでわからないことがあったらオルコットさんの前で泣くことにするよー。」

「ふふん、素直でよろしいことですね。」

視界の端の幼馴染の顔、、、はもういい。

言っと面倒なことになるかもだから、言わないけど

実は、僕も教官は倒してるし、あれは倒したというより相手が自滅したんだけど、、、

座学の首席も僕だからね。マリアンヌ学園の校舎には今もでかでかと『祝 織斑一夏 IS学園首席入学』という垂れ幕がある。ふつ、聖マリアンヌ学園中等部学年3位の実力をなめちゃいけない『無視しないで(´・`・´)』ええいつ！割り込んでくるな視界の端の幼馴染っ！

「っえ、織斑君って座学首席だったよね、、、」

「えっ。」

突然の第三の声に、目を見開けて、口をパクパクさせるオルコットさん。

教室がざわざわと揺れる。

ざわ・・・ざわ・・・

嫌な予感がしてきた。

「実技でも教官を倒していたしな。」

「なっ!?!」

追い打ちをかけるようなその声に、金髪美少女の顔がさらに赤くなる。

・・・ってこの声この口調は篝イイイイイイイイー!!!

篝の方へ振り向く。視界の真ん中に入ったのは写真に収めたくなくなるような幼馴染のドヤ顔。



初めて、箒に対してムカツクという感情を覚えた瞬間だ。

「ちょっとっ！！あなたそれは本当ですよっ！？」

ずいっと身を乗り出して聞いてくるオルコット嬢。唾飛んできた。

「え、えくと、その座学は首席、、、だったかな？あははー」

「ふ、ふんっ！あなた極東の男にしては意外とやりますのねっ！しかしさすがに実技で教官を倒したというのは嘘でしょう！教官を倒したのはわたくしだけと聞きましてよ！」

「あ、うん。そっちの方は事実無根だとおも」

「それ、女子の中ではオルコットさんだけっていうことじゃないの？」

なわ・・・なわ・・・

くそっ！またしても第三の声が！この声は篤じゃないっ！誰だっ誰が言ったんだっ！？

と、オルコットさんがプルプルと震えている。

「な、な、な、あなた！わたくしを騙しましたのねっ！このわたくしに公共の場で恥をかかせようなどと万死に値する行為ですわっ！  
！」

「お、落ち着いてオルコットさん。別に騙そうとしてたわけじゃないから。」

顔を真っ赤にして、声を荒げるオルコットさん。僕が一体、何を騙したというのか！？

「こ、これが落ち着いていられ  
」

キーンコーンカーンコーン

助け船をだしてくれたのは、ウエストミンスターの鐘だった。

おお！神よ！次の1時間も私を導いて下さい！

「っ……！またあとで来ますわ！逃げないことね！よくって!？」

そんな捨て台詞を吐いて、席に戻るオルコットさん。

どうしよう、次の休み時間は逃げようかな……

主よ！どうかこれからもあなたの力で私の口が滑らないようにしてください。  
足は滑ってもいいから。

次の時間、主は僕の祈りを受け付けなかったらしい。

7話以外ありえない(後書き)

All through this hour  
Lord, be my guide  
And by Thy power  
No foot shall slide.

日本のチャイムのキーンコーンコーンってやつを  
ウエストミンスター・チャイムといいます。

ロンドンにある「ウエストミンスター宮殿(英国国会議事堂)」に  
付属する時計塔<sup>ビッグ・ベン</sup>が奏でるメロディです。(Wikiより  
上に書いたものはその歌詞です。

キーンコーンコーンコーンのリズムで口ずさんでみてはどうでしょ  
うか？

Wikiを見る限りでは歌詞の種類は4つありました。これはビッ  
グ・ベン時計塔部屋に刻まれていた歌詞らしいです。

すみません、衝撃の展開は次回に持ち越しです。

## 8 話だなんだ（前書き）

ここいらで織斑一夏君によるジャグリング道具紹介を読んでもほしいです

## 8 話だなんだ

某イギリスお嬢様の襲撃をなんとか防ぎ切り3時間目を迎えた。まあ、再襲撃の宣言も受けたんだけど・・・

まだひしひしとクラスの女子からの視線を感じる中、一際強くギシギシとした線がある。

早く彼女と平和友好条約を結びたい、くそっ！あのいまわしき第三の声のせいであつ！！

「それではこの時間では実戦で使用する各種装備の特性について説明する。」

「およ、姉さんが授業するのか。自分の家族が仕事してる姿っていうのは新鮮だよな。」  
「顔がニヤニヤする。」

「ニヤニヤ、ニヤニヤ」

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないとな。」

思い出したように姉さんが言う。

クラス代表者っていうのはいわゆるクラス長のようなもので、生徒会の開く会議や委員会に出席する人のこと。  
勿論、姉さんが言ったようにクラス対抗戦と呼ばれるIS同士の模擬戦闘の代表者でもある。

っふっふっふ！はっはっはっは！！

この時を待っていた！！

僕はこの先起こりうる全ての展開を想定している。

そして、いかなる事態に陥ろうと必ず僕が代表者となれる確証がある！！

ああ、私はクラス代表になりたい。 演劇モード入って一人称変わった

何故かって？何故、クラス代表などという、ただ時間がとられて面倒くさいだけの役職に就きたいかって？

違うんだよ。その考えを正しくないんだよ。

確かに、クラス代表は、呼び方は違えどその中身は学級委員、代議員、クラス委員長と同じ

委員会への出席、何かと司会進行役、授業が始まっても担当教員が来ない時の先生呼び出し係、やっと放課後になったと思ったら『ああっ！今日委員会あるんだっ！』という残念感

等、全てを担う苦勞人

デメリットしかない、面倒くさい、時間取られる、  
なんで俺なの、誰かがやるっしょ？

などという幼稚な考えはとうの昔に捨て去った！

クラスのために時間を割き、よりよい学園生活を気付くための礎となること！



それをデメリットと捉えてしまうその頭こそが真のデメリットなのだ！

そしてなにより、面倒くさいからと言って、誰かが必ずやらねばならないその役職を拒否すること、

それは私の主義に反する！！

「クラス代表とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく

まず、代表選出の方法について

くじ、ジャンケンという方法はありません。クラス代表という大事な役割を運任せに誰かに決めるなんてことはもっての外だろう。まあ、副担任の山田先生ならありえたかもしれないが。

投票になったとしても紙に書かれる名前は私以外にありえない。入学して初日、まだ誰が誰かもわからない状況で明確に他者との違いがわかる人物がただ一人いるだろう・・・私だ。某イギリスお嬢様という線もあるが、その可能性はさきほどの休み時間でほとんど潰

れた。

だが、投票なんて時間がかかる方法は姉さんならとらない。

となると、代表選出の方法は

「はいっ！織斑君を推薦します！」

その場での、立候補もしくは推薦。

ならば！！私がここで取るべき行動は一つ

「ええっ！？僕っ！？」

何もせず、ただリアクションをとるだけだ。

極めて自然に席を立ちあがる。

完璧だ。完璧な反応だ。だれが聞いても「クラス代表ってなんだろうな」ってボケーっとしてたらいきなり推薦されてビックリしちゃ

いました』という風にしか聞こえない。

この声、さっきの休み時間での第三の声はお前だったのか。田島だな、おぼえておこつ。

しかし、今回はよい働きをしたぞ田島。お前のその躊躇なくモノを言える精神、高く評価する。

さっきは君の発言によってオルコットの強烈な敵意を買つことになつてしまつたが、、、、それもまた一興だろう。

私の卓越した話術でその敵意ごと丸め込んでくれるわ。

そして、私の予想が正しければここで、私を支持する声が続々と

「ちよ、ちよつと待って！僕はそんなのしな」

「わたしも織斑君がいいと思います！」

「わたしもーわたしもー！」

「織斑君以外ありえないwwwwww」

「織斑君に28票!」

「わたしもそれがいいと思います。」

ふ、ふはははははははははは!!!!条件はクリアしたも同然じゃないか!!!

さあ、かかってこいセシリア・オルコット。

あとはお前が抗議の声を上げるだけだぞ。

「席に着け、織斑。……では、立候補者は織斑一夏、他にはいないか?このままでは無投票当選だぞ。」

「ま、待ってくだ」

「待ってください!納得がいきませんわ!」

予定通り、バンッと机を叩いて立ち上がったセシリア・オルコット。

「そのような選出あ認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

まだ。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！つわたくしはこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サカスをする気は毛頭ございませんわ！」

まだ。ここは完璧を持つために彼女の性格の悪さをクラスに露呈させ私への支持率をあげよう。

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

もう、その意見に耳を貸す者はいない。

「大体、文化としても護身的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で」

まだ、自らの評価を下げるか。ここいらで口を挟もう。

「あ、あのー！」

「なんですか？」

イラたちの目立った、とげとげとした声が私を迎える。

「ふう、ご、ごめんなさい。その、オルコットさんがイギリスの代表候補生ですごく強いつていうのは知ってるし、僕が物珍しいって理由でみんなから推薦されてるのもわかってる。」

当然、オルコットさんがクラス代表にもなるべきだと思うけど

「

「ふんっ、でしたらやはりわたくし」

「聞いて」

「む……。」

一度相手に口をはさませる。

「でも、一番強い人が代表にならないといけないっていつきまりはないでしょ。さっきはいいやな反応してたけど僕もクラス代表やってみたいから。僕が代表になってオルコットさんが指導してくれば万事解決じゃないかな？オルコットさんは国家クラスで見ても博識だつて聞いているし、オルコットさんの指導があれば他のクラスの代表にもそうそうは負けないと思うから……、そ、その、僕頑張るから。」

「さ、猿にモノを教えるほどわたくしは暇ではありませんわ。」

「ぼ、僕だつて座学ならそれなりに出来るよ。さ、猿と言われるほどの脳ではないはず。」

さつきは強めに言ったから、今度は下目にてでて相手を安心させる。

「ふんっ、何故わたくしがそのようなこと。」

「オ、オルコットさんに拒否権はないんじゃないかな?」

「どっぴいっことですか?」

いける、これならばいける。

「だって、泣いて頼めばいろいろ教えてくれるんですよ。」

「っ!!!?!?」

ちよっと目をウルウルさせて上目使いにオルコットを見る。

決まった。

案の定オルコットは顔を赤くし、視線を泳がせている。

「も、もう騙されませんわよ!!!そうやって猫をかぶってわたくしを籠絡しようとしてっ!!!」

オルコット、君は入学式以来、一番の懸念事項だったよ。私が代表になれるかどうかのな。

成績優秀、容姿端麗、イギリス名家の一人娘、そして一国の代表候補という実力。

君が人を惹きつける要素を十分に持ち得ていた。にもかかわらず現在君を支持する者はいない。

実力トップが代表になるべきという正当性を持った意見にも誰も反応しない。

何故、君がみんなから推薦されなかったかわかるか？

教えてやろう。

人を猿呼ばわりし、他国の文化を侮辱し、自らの実力に驕る、上から目線でしか話せない、

男であるというだけで人を見下すようなガキで幼稚な思想を持つ君には……



！！

イギリス貴族の誇りの意味を吐き違えるお前には

国家代表の意味も理解できない貴様には！！

今のセシリア・オルコットには！！

人はついて行くとは思わないっ！！！！

ふ、ふはははははははははははは！！いいだろう、オルコットお前には特別に私直々の教育指導を施そう。  
じっくりとじっくりとその捻くれた精神を私が矯正する、本人も気づかない内に善良人に様変わりさせてやるさ。

さあ、あと一押しで私のクラス代表が確定するといったところか・

「オルコット、君は入学式以来、一番の懸念事項だったよ。私が代表になれるかどうかのな。  
成績優秀、容姿端麗、イギリス名家の一人娘、そして一国の代表候補という実力。  
君が人を惹きつける要素を十分に持ち得ていた。にもかかわらず現在君を支持する者はいない。  
実力トップが代表になるべきという正当性を持った意見にも誰も反応しない。」

何故、君がみんなから推薦されなにかわかるか？教えてやろう。

人を猿呼ばわりし、他国の文化を侮辱し、自らの実力に驕り、上から目線でしか話せない、

男であるというだけで人を見下すようなガキで幼稚な思想を持つ君には！！

イギリス貴族の誇りの意味を吐き違えるお前には！！国家代表に意味もわからない貴様には！！

今のセシリア・オルコットには！！人はついて行こうとは思わないっ！！！！

ふ、ふははははははははははははははは！！いいだろう、オルコットお前には特別に私直々に教育指導を施してやろう。

じつくりとじつくりとその捻くれた精神を私が矯正する、本人も気づかない内に善良人に様変わりさせてやるさ。

さあ、あと一押しで私のクラス代表が確定するといったところか・  
・  
・

ざわ、ざわ

教室が突然騒がしくなる。振り向くと、姉さんがやれやれといった具合に頭に手を当てている。

なんだ？なんなんだこの事態は？

私が事前に想定した1028通りのパターンのどれにもあてはまらない状況だ。

未確認飛行物体でも見つけたか？

「あ、あ、あ、あ、あなたっ！！やはりわたくしを騙していましたのねっ！！！！わたくしの指導を受けたいなどと調子のいいことを言っつて！！！！またわたくしに恥をかかせてっ！！！！！！！！！！」

オルコットが顔を真っ赤にし、頭から湯気をだしている。

・・・しまった！！声に出していた！！！！！！

まずい！まずい！このままではっ！想定された1028通りの可能性の内756通りのエンディング

「決闘ですわ！！」

やはりか・・・

だが、ここで引くわけにはいかない！　もう、半分やけくそ

「ふ、ふはははははははははは！！笑わせてくれるじゃないか！オルコットっ！私とお前如きが決闘とな？」

「やっと、本性を現しましたのね。」

こちらを、にらみつけてくるオルコットさん、もう後戻りはできない。

「オルコット、お前は何故ライオンが百獣の王と呼ばれているか知っているか？」

「いきなり何を言い出しますの？」

「答える」

「ふん、強いからじゃありませんの。」

「では、どのようにしてその強さを証明したか。現存する動物約100万種をすべてその爪で狩って見せたか、トラを、鷹を、牛を、うさぎを、キツネを、すずめを、ワニを、すべてを狩ったのか。」

「何が言いたいんですの？」

「ライオンは動物とは格上の存在、龍を狩ってその強さを証明したんだよ。王は動物には一切触れなかった。」

「どいりいり」

「つまり、ライオンである私と、うさぎかそこいらであるお前が戦おうとはお筋違いなんだよ。」

「……あ、あーはっはっはっはっは！！あなたこそ笑わせてくれますわ！あなたがライオンだなんて！！むしろうさぎがあなたで、ライオンがわたくしでしょう！！！」

「ほう、そうかならば私が王であることを証明してみせよう。ちよつとそこに龍もいることだからな。」

姉さんを指す。

「なっ！？あなたまさかっ！！！」

誰もが驚愕の表情を浮かべている。見なくてもわかる。

何せ僕は第一回IS世界大会優勝者にISで勝負を挑もうというのだから。

「私は、織斑千冬にISでの勝負を申し込む。」

教室がざわりと揺れる。

「い、いけませんそんなこと！教師と生徒が決闘だなんて。」

今までウンともスンとも言わなかった山田先生が声を上げた。僕は勝負と言ったのに決闘と言い換えているあたり、よほど衝撃だったのだろう。

「先生はお口チャック。」

丁寧にジエスチャーまでして言う。姉さんはまだ口を開けない。

「は、はい。」

ジェスチャーを返してくれる山田先生。

「あなた、正気ですか？」

激昂していたオルコットさんだけど、僕の発言に少し冷静さを取り戻したらしい。

「オルコット、お前にはないのか？」

僕の声に教室が静まる。誰もが聞き入っている。

「・・・何がですか？」

「お前には織斑千冬に勝つ自信がないのかと聞いている。」

「そ、それは」

「歳を15にして、IS搭乗時間300時間越え、超音速下での訓練を20時間行ったセシリア・オルコットに。

イギリス第三世代IS『ブルー・ティアーズ』を駆るセシリア・オルコットに

6機のビットを自在に操るセシリア・オルコットに！

国家を代表する気高き貴族オルコットに！！  
織斑千冬に勝てる自信はないのかと聞いている！！！！」

「っな、っ、つく！あなたこそただの一般人がブリュンヒルデになうとも思っていますの！？」

「ああ、勝てるさ。私には織斑千冬にかてる自身、っ、いや確証がある！！！！」

「ど、どこにその根拠が、っ、」

「お前は私が誰か知らないのか、教えてやろう。」

幼少期より誰よりも近くで織斑千冬を見守り続け！小学時代は稀代の天才科学者、篠ノ之束のもとで育ち！中学時代にはフランスの象徴、マリアンヌ様の加護を存分に受け！そして何より世界で唯一ISを操縦できる男！！それが！今、お前の見ている人間！！織斑一夏だよ。」

「つく、っ、っ、っ、」

「今のお前には一生、龍は狩れない。立ち向かうことすら許されない。動物というカテゴリーの中でみじめに順位を争うことしかできない。安心しろ、ウサギとのご戯れならいくらでもやっつけてやる、龍を狩った後でな・・・」



「……、……って。」

「どうした、オルコット。お前が獅子だと言っのなら」

「……しだつて、わたくしだつて、ありますわ！！織斑千冬を倒す自信が！確証が！！」

このセシリア・オルコット、ブリュンヒルデにもひけをとらぬ実力でしてよ！！！！」

「そうか、ならば……」

「ええ！わたくしセシリア・オルコットは織斑教諭に決闘を申し込みますわっ！！」

僕こと、織斑一夏は入学式初日からやらかした。

## 8話だなんだ（後書き）

一夏君が言い出したライオンが龍を狩ったから百獣の王になったとかいうのは

嘘です。ググっても出てきません。

今回は一つ番外編をはさむと思います。

## 9話ですけどなにか

「それで、どうするんだ一夏？」

夕食後の寮の自室にて幼馴染から問いかけに、思い出したくないことを思い出させてくれた。

「言わないでよ、忘れてたのに……。」

「忘れちゃいかんだろう。」

「ふぐう」

ごもつともだ、世界一のIS操縦者に決闘挑んで『忘れました』はないだろう。

「まったく、お前は何を考えているんだ。昔から変な奴だとは感じていたがまさかこれほどだったとはな。」

「むー！今朝は『昔と変わった』って言ってたじゃないっ！」

「いいや、全然変わっちゃいない。確かに人当りはよくなった、雰囲気も柔らかくなった、だがしかし、お前の心に秘めたる変態スピリッツは今もなお健在だ。猫のかぶり方を覚えてただけだろう。」

篝の口から変態スピリッツなんてワードが出てくるとは……

この6年間に箒の身に何があったのだろうか、

ずっととお茶をすすり直して、もう一度箒が聞いてくる。

「どうするんだ？まさか本当に千冬さん倒すとか言い出すんじゃないだろうか？」

僕もずっととお茶をすすり直す。

ずっと、、、、ちなみに今、寮の自室、テーブルを挟んで箒と話しています。

「わけないでしょ。そのために頑張つてオルコットさんを巻き込んだんだから。」

オルコットさんが決闘を申し込んだ後、僕はあのテンションで話し続け、姉さんに勝った方がクラス代表になれるということになった。

そのときの様子、、、

『ほう、そうこなくては面白味がないな。』

これが僕ね。

『では、クラス代表には織斑教諭に勝利した方が、ということですよしくて?』

こっちオルコット嬢

『ああ、いいだろう。こんなことはありえないが、もし私と君の両方が敗北してしまった場合……クラス代表は君に譲ろう。』

常識的に考えて、僕とオルコットさんのどちらかが勝利してしまう方がありえないね、常識的に考えて……

『ええ！ありえせんわ！その心配事は杞憂でしてよ！』

いえ、ぜんっぜん杞憂じゃありません。ごく当たり前の懸念です。

『話は纏まったな、では来週の月曜日、第三アリーナにて織斑、オルコットの両名は私との勝負を行う。織斑とオルコットはそれぞれ用意しておくように。』

『いいんですか?!? 織斑先生?!? 教師と生徒が決闘だなんてっ  
』!』

これは山田先生。いい慌てっぷりです。

『いいんですよ、本人がやりたいと言っているのだから、……、  
織斑、オルコット、覚えておけよ。』

回想終了——

「オルコットを巻き込んだのはいいとして、それが何になる?」

「やっちゃったことは仕方ないから、宣言通りオルコットさんのひねくれた精神を矯正するよ。本人も気づかい内にね。」

箒の質問に対する答えとはなっていないけど、話し続ける。

「どうしてオルコットさんが男に対して変な価値観を抱くようになったか?」

「ISのせいじゃないのか?」

「それもあるけど、、、ISだけじゃあそこまで性格は酷くならない。それに、一国の代表なんだから礼儀くらい学ぶでしょ。口には出さないけど、心には思うくらいできるよつになる。」

「.....」

どうやら真剣に聞き入るつもりになったらしい。

「オルコットさんは本人が言っていた通り貴族の末裔なんだけど、母親がその血筋の人で、父親はどこぞの富豪。名家に婿入りした父親は、そのことに引け目を感じ、母親の顔色をうかがうようになったらしい。」

「ISが発表されてからはさらに・・・か?」

「そう、ますます父親の態度が弱くなる。いつもへこへこして、他人の顔色うかがってばかり。そんな父親を見て育ったのなら、、、オルコットさんがあなってしまうのもわからないでもない。」

「たしかにな、、、って、どうしてお前そんなこと知ってるんだ？」

「つえ え〜つと？なんでだったかな？ちょっと、思い出せないかな？」

「姉さんだな。」

ふごお、バレた。

なんか、篝の前で束さんの話をするのは恥ずかしい、、、

「えつと、昼休みに電話したらいろいろ教えてくれた。ほんとにいろいろ」

オルコットさんの作る料理は超まずいとか、スリーサイズとか、機体の弱点とか、チェシルーっていう付き人がいるとか・・・

本当なのかな？

「ふんつ、まあいい。話を続ける。」

「え〜つと、まあこんな感じでオルコットさんは男なんてよわっちいとか、男は猿と同等ですわとかいう偏見を抱いちゃったわけ。」



「……………」

いいから早く話せ、という顔

「そのオルコットさんの前に、いきなり自分と対等な立場、いや若干上から目線でモノを話す、自分とその男が決闘することを筋違いだと笑い、ブリュンヒルデを狩って強さを証明するという男が現れたら」

「オルコットじゃなくても衝撃だ。」

正論です。

「衝撃もあるけど、それ以上に期待されるだろうね。」

「期待？」

「筈だつてちょっとくらいしたでしょ。この人なら、織斑先生を倒すことまでは無理だけど、何かすごいことをしてくれるんじゃないかって。」

「ま、まあちょっとは、私に限らずクラスの大半がそう思っただろうな。」

「オルコットさんからしてみれば、その衝撃も期待も他の人とはケタ違いに大きいわけ。男の人に面と向かって話されたのも初めてかもしれないし、まして自分より強いと言われるなんて思ってもなか

「ただらうつからね。もしかしたら、オルコットさんが本当に織斑一夏が強いと信じているかもしれない。その可能性は十分ある。」

「入試座学が首席で、教官を倒したという話でか。」

「そう、箒が言ってくれたおかげでね。」

「いや、箒が言わなかったらすんなり代表になれていたのか？うーむ、まあいい。」

「そんな自分の初めて期待を抱いた男が、いとも簡単にその期待を裏切ったら、さもそれが当然であるように織斑千冬に敗北したら」

少し語尾を上げて問いかける形にする。

「怒る、、、か？」

「そう、そしてその場面はオルコットさんがブリュンヒルデに敗れた後の、第三アリーナのAピットの中。マイクでもあったら叫びだしたくなるよね。『織斑一夏ー！何をへこたれてるんですのー！』」

「言いたいこと伝わったかな」

「・・・名前か。」

さすが箒さん。

「普通の人からしたら人の名前を呼ぶなんてことは当たり前だけど、僕やオルコットさんのみみたいな特殊な人からしたら、名前を呼ぶというだけでも十分な行為だよ。」

僕はまだ、オルコットさんから名前を呼ばれていない。猿としか。

僕だって、箒の名前を初めて呼んだときは緊張したし、躊躇ったし、思う所もいろいろあった。

その感覚がオルコットさんに対してどんな変化をもたらすかはわからないけど

「友達が少ない人間の間違いじゃないのか？」

「違うよっ！友達が少ないんじゃないっ！友達と認めるハードルが高いだけだよっ！」

人がオブラートに包んだというのにつ！それに箒も十分・・・

「まあ、わかった。名前を呼ぶという行為に意義があることは認める。それがオルコットの心理状況に何らかの変化をもたらすこともなんとなくわかる。」

「でしょよ。」

「だが、その話は出木杉君だ。上手くいくとは思えない。」

・・・ですよな。正直、僕もそんなに・・・

「上手くいかなかったら、いかなかったで、それでいい。」

「・・・・・・・・・・。」

何かを期待していたのか、篤は黙っている。

「もともと、織斑千冬にISで挑もうだなんて馬鹿げたことにとつて付けたような話だからね。上手くいく方がおかしい。」

「・・・・・・・・・・。」

3時間目のように『できるさー!』と断言してほしかったのだろうか

「それに、この生徒と教師の決闘で損する人なんていないんだ。イギリス側は、自分とこの代表候補生がISの世界チャンピオンと戦えて、いいデータがとれるわけだし、オルコットさんからしても同じ。いい経験になるでしょ。学園側も自分とこの教師が一国の代表候補を余裕綽々で倒してくれて生徒からも他の勢力からも威厳を保

てる。僕としては……」

「……一夏としては？」

この先を言うのは少し嫌だった。

## Side change

「だが、その話は出木杉君だ。上手くいくとは思えない。」

一夏の考えていることを理解した私は正直な感想を述べる。

オルコットが、一夏に対し大きな期待を抱いたことは事実だろうし、それを一夏が裏切るのは当然のこと、そこでオルコットは憤慨する、大勢の見物人がいるアリーナの放送器具を先生から奪い取って一夏の名前を叫ぶということも予想できる。

でも、そのためには大きな障害が二つ。

一つ、勝負当日までオルコットが一夏に対して期待を抱き続けること。

二つ、オルコットが激昂するような試合を一夏が演出しなければな

らないこと。

前者は、一夏の演技が続けば何とかなるかもしれないが、後者は、不可能に近い。

なにせ相手が千冬さんだ。普通に行けばオルコットが感情を覚える間もなく瞬殺だろう。

一夏はこれらの問題を、どう対処していくのか。

改めて一夏の方へ向き直る。一夏もこれくらいのことには解っているだろう。

「上手くいかなかったら、いかなかったで、それでいい。」

少しだけ、ほんの少しだけ、むっとした。

一夏はそれら二つの問題をどう対処するか弁舌をふるってくれるものだと思っていた。

「もともと、織斑千冬にISで挑もうなんて馬鹿げたことにとっつけたような話だからね。上手くいく方がおかしい。」

オルコットほどではないが私も織斑一夏に期待をしていたのだと思う。

3時間目のように』できる!』と言い切ってほしくて、その恰好の良い姿をみたくて、

「それに、この生徒と教師の決闘で損する人なんていないんだ。イギリス側は、自分とこの代表候補生がISの世界チャンピオンと戦えて、いいデータがとれるわけだし、オルコットさんからしても同じ。いい経験になるでしょ。学園側も自分とこの教師が一国の代表候補を余裕綽々で倒してくれて生徒からも他の勢力からも威厳を保てる。僕としては……………」

勝手に抱いた期待に、勝手に裏切られる、そんな気持ち

オルコットはこの何倍の気持ちを味わうのだろうか

「……………一夏としては?」

でも、そんなモノはすぐに吹き飛んだ、一夏のその顔を見て

「結局、姉さんに助けてもらっしかないわけ。なにせ、世界で唯一ISを動かせる男なんだからこれから先いんな事件にも巻き込まれるだろうからね。そんな時、いや、そうならないために織斑千

冬という後ろ盾を僕は失ってはいけない。固い、堅い、盾を常にみんなに見えるように置いておかなくちゃ。この決闘で姉さんの強さをもつ一度世界に見せつけられるでしょ。」

「そんなこと全部考えて千冬さんに勝負を・・・？」

「多分姉さんは、ISなんて装備してこないと思う。近接ブレード一本でなんとかしちゃうかもしれない。IS付けて、イギリスの代表候補に勝ったなんて織斑千冬なら当然だから。」

私の疑問に一夏は答えてはくれず、寂しいような顔をした。

私はその顔を知っている、幼少期一夏はずっとそんな表情をしていた。

大事なことを思いつめているようなその顔が

なにか切なそうに、どこかを見つめるその顔が

助けが必要なのに、助けなんて存在しないと諦めているその顔が

だから上手くいかなくても問題ないよ、と薄く笑ったその顔が



私は昔から大嫌いだった

なら

「一夏、やはりお前は変態だ。」

「っな！？変態ってなにさっ！天才の間違いでしょ！」  
表情が変わる、昔はこんな顔をする時の方が珍しかった。

「ふんっ、変態だ。明日から特訓だぞ一夏！計画通りオルコットが  
叫ぶ前に、お前が撃沈しては意味がないからな！」

「うん、もう訓練機の申請出してるよ。勿論、筈の分も。明日の放  
課後、第二アリーナね。」

「な、なにっ！？もう許可が降りてるのかっ！？というか1年生は  
第一回のIS安全講習を受けてからじゃないと申請できないはずだ  
ぞっ！！」

「はっはー、学園に謎の圧力がかったようだねー。」

「また、人の姉をいのように使ってー！」

「今度、手作り弁当を差し入れするって言ったら、喜んでやってくれちゃったー。」

「っな！私にも差し入れしろ！」

はっはーどうぞだろうねーと言って、んっんーっつと背伸びをするー夏。

「今日はもう寝よう。いろいろあって疲れた。」

「ああ、そうだな。」

私も疲れた、、、今日はゆっくり寝て明日に備えよう

「じゃ、電気消すよー。」

「うむ。」

歯を磨き、寝間着に着替えた私たちは手早に各々のベットへと潜り込んだ。

照明が消え、初めてのベッドの感覚に挟まれながら思考を巡らせる。オルコット性格矯正計画で（あの後、一夏が名付けた）懸念されていた2つの問題、既に解決済みらしい。

ISの世界チャンピオンと戦うことになってイギリス政府、ブルーティアーズの開発元はそれぞれ大慌て。オルコットは学園が終わるとすぐ開発元の日本支部へ行き機体の調整、訓練に没頭するらしい。つまり、私たちのアリーナでの下手くそ訓練をオルコットに悟られないということだ。

2つ目の問題、さつきも一夏が言った通り、既に訓練機を申請済み。訓練内容も某天才博士に『ブリュンヒルデと戦って10分間生きながらえる方法教えて』と聞いたら、その資料を送ってくれたとき。束さんができるっていう訓練法なんだからできるでしょ、と一夏が言っていた。

さつきは、上手いかなかったらそれでいい、とか言っておきながら、本気じゃないか。

ふんっ、やはり一夏は

「第  
」

暗闇の中、一夏の方から声がする。

「なんだ？」

「そ、その、ありがとう。箒と同じ部屋じゃなかったら今頃枕を濡らしてたかも。」

「私とお前が同室になったのは先生が決めたことだろう。」

「いや、なんか相談に乗ってくれたという意味で、、、気持ちを共有できるのはすごくいいことだから。」

一夏は本当に変わったな。猫をかぶっているだけではないのかもしれない。

「一夏、やはりお前は変態だ。」

「もっつ！何回変態って言えば気が済むの!!！」

少し薄くなった暗闇に幼馴染の声が響き渡る。

そのにぎやかな声は、それからもう10分ほどの間、途切れることなく部屋に居つづけたとさ

## 9話ですけどなにか（後書き）

どこかにも書いたような気がしますますが篤さんは大人っぽくなっています。

過去に一夏とかかわったことで考え方が変わったのでしょうか。

だからこれはキャラ崩壊なんかじゃなくてですね

二次設定を作るうえでの仕方のない行き過ぎた性格の変化

とでも言いましょう それを一般にキャラ崩壊という

次回は番外編になるか、本編になるか未定です。

ただ、どちらにしても一身上の都合で少し更新が遅れます。

あしからず

## 10話かな（前書き）

この話を読む前に？織斑村一夏よるジャグリング道具紹介？介を読む  
ことを推奨します

## 10話かな

織斑一夏はある病気を抱えていた。

何万人に一人の割合で発症すると言われる稀有な病気。

ISが発展したこの世の中の最新医学を持ってしても治療は不可能。

いや、治療を試みた者がいないのか・・・

故に織斑一夏の朝は早い。

午前5時8分、目覚まし時計に起こされるまでもなく織斑一夏は活動を始める。

病名『ジャグホリック』またの名を『ジャグリング症候群』

「いやあ〜やっぱり一日3時間はジャグらないと落ち着かないよね」  
「」。

昨日見つけた、寮の裏のちよつとした広場、特に障害物もなく広すぎず狭すぎずのその場所で、誰に言っわけでもなく咳く。

せわしなく動くその両手の先にあるディアボロ。僕が先輩から借りてるものだ。

「むふふふふー。」

まだ辺りは薄暗い、そりゃあ4月の朝五時半っていうとこんなもんか。

実にジャグリングに適した環境である。

太陽が出ておらず上を向いてもまぶしくない

長袖長ズボンの上下ジャージで快適な気候

道具を落としても、傷が付かない、そして汚れない、手入れの行き届いたきれいな芝生。

「むふふふふふふふー。」

こう、やってるだけで癒されるよね、ジャグリングは。

嫌なことを忘れさせてくれるというか、目前の問題から目をそらせる唯一の時間というか………

ディアボロの回転をより一層強くし、軸の向きを微調整する

一度呼吸を整えて





午前5時頃ルームメイトのたてたガサゴソという音に目を覚ました。  
曖昧でおぼろげの視界のなかで確かに見たもの。

エナメルバッグを肩に下げ、竹刀袋を背負った一夏

勿論、竹刀が入っているであろう竹刀袋。

一夏 竹刀 朝練 剣道

一夏め、演劇部だと言っていたが、やはり剣道の鍛練もするのではないか！

ガバっと掛布団を蹴り飛ばして跳ね起きる、どうやら私はてんしょんの上だった状態らしい。

幼少期の頃の朝練は今も継続中なのだな！

もしかしたら、私が引越した後もどこかの道場で修業をしていたのではないか？

そうか、そうか、一夏はそんなに私に勝ちたいかー  
もう、す  
っかり一夏は剣道をしていると信じ込んでいる

私に勝てないと、すごく悔しそうにしていたものな！

「よし、私が軽く相手をしてやるー」

どれほど腕を上げたか楽しみだ。

それにしても一夏と二人きりの朝稽古か、しかもこれから毎日・・・  
・・・むふふ

手早くいつもの紺袴に着替え、普段より少し長く歯を磨き、前髪の手エックを入念に行う。  
驚くほど体が軽い。

部屋の戸締りをすませた私は自室を後にした。

・・・・・・発見した、一夏だ。

寮の裏の広場にて草に茂った隙間から垣間見る。おそらく一夏は気付いていない。

黒に一本白いラインの入った上下のジャージ、うむ、一夏は昔からジャージしか着なかった。

普通に出て行ってもいいのだが、一夏が竹刀を振るう姿も久しぶりだからな。

少し一夏の素振りを見てから出よう。

と、一夏が竹刀袋からブツを取り出した。

38、高校男子が試合に用いるサイズの竹刀だ。

むふふー、お前の体格ならもう1サイズ小さくてもよからうにー。

さあ、早く始めるんだ！お前の成長した姿、私に見せてみるがいい！

この篠ノ之流剣術後継者の篠ノ之箒が後で存分に指導してやるからな！

「ん？」

？一夏が奇怪な行動をとり始めたぞ

竹刀を自分の正面に立てて、、、、どうしたというのか？

「つむむ？」

よくみると両手に何かを持っているな。長細い棒。

三刀流でも極めたか？いや、しかしあんな形で構える流派は知らない、というか存在しないだろう。

「ふむむむ？」

そして、その両手に持った棒で正面に立てた竹刀を左右からコンコンと……

コンコンと……竹刀がコンコンと……空中に……

「！？」

ななななななな、何が起こっているんだっ！？

しししし、竹刀が宙に浮いているだっ！！??

おかしい！ありえんっ！！！

うわっ！今竹刀が大きく一回転したぞ！！ああ！今度は二回転くらいした！！

「いいいい、一夏っ！！何をやっているんだお前は！？」

グシャグシャと草の茂みをかき分けて、一夏の前に躍り出る。

「あ、箒おはよー、箒も朝練するの？」

言いながら、竹刀は宙に浮いている。

「ああ、おはよー、私もあされ・・・じゃないだろっ！何なんだそれ！」

今までは左右の棒を行き来していた棒が、今度は片方の棒の回りをグルグルと回りだす。

し、竹刀が生きてるみたいだ・・・

「んー、デヴィルスティック」

「で、で、で、でびるすなっく？！」

「いや、デヴィルスティック。」

Side change

「いいいい、一夏っ！！何をやっているんだお前はっ！！？」

「あ、箒おはよー、箒も朝練するの？」

と、いきなり現れた箒に特に驚くことなく対応する。

いや、実はさっきから気付いてたけどね。

「ああ、おはよー、私もあされ・・・じゃないだろっ！何なんだそれはい！」

竹刀をアイドリング状態から、プロペラという技に移行する。

片方のハンドスティックでセンタースティックを回す技だ。

「んー、デヴィルスティック」

普通に道具名を言ってみる。

「で、で、で、でびるすなっく〜?!」

「いや、デビルスティック。」

それにしても箒は驚きすぎ、まあ箒がいることわかってて竹刀で回し始めたんだけど。

「お、おお、お前、剣道の鍛練はどうした?!」

「剣道？箒が引越してからやめちゃったけど・・・」

その頃から、朝は別のことをやり始めた。

「何故止める!?!」

「いや、箒がないと剣道なんか面白くないし。」

「・・・そ、そうか、私がないとか・・・」

何故か、顔を赤らめる箒さん、、、、、なんで?

「で、落ち着いた? さっきまで肩で息してたけど。」

「・・・・・・つぶ、取り乱してなどいないさ。よく考えてみれば棒で左右からコンコンすれば竹刀が空中に浮くのは当然のこと、何も不思議なことではない。この程度で慌てていては篠ノ之流剣術後継者の名がすたれ」

ディアボロでエクスカリバーしてみるか

「ほら! 箒見て! ディアボロが重力の影響を受けていないよっ!」

「な、なにーーーー!? 大道芸でよく見るアレが縦回転になっているだとーーーーっ!? うわっ! 今一瞬、手に持つてる棒が離れたーーーーっ!? 何故落ちないんだ!?! 重力が働いていないのか?! ー夏の半径2メートル以内に重力が働いていないのかーーーー!?!」



そこまでリアクションしてもらえるとやりがいがあります。

「はあ、はあ、何が起こったんだ・・・？」

肩でせえせえと息をしながら聞いてくる。昔から箒はジャグリングとかに興味ない子だったから、免疫がないのかもしれないな、それでも肩で息をするのはやっぱり驚きすぎだけど。

「あれがエクスカリバーだよ、聖剣エクスカリバーだよ！」

このテンションなら箒も乗ってくれるかもしれない。

「そうか、聖剣だったか、、なら仕方ないな。。。」

いや、これは素で反応してるのか。

箒が気を取り直す（？）までちょっと時間がかかって

現在5時59分、あと1時間はできるね

「箒、ほんとに落ち着いた？」

「ああ、もう大丈夫だ。」

どこか遠い目をして答える筈、まさか本当に聖剣だとか思っていないだろうか……

「私はもう行く、一夏も練習頑張れよ。」

「あ、うん。」

「どうした？そんな可愛い顔して？」

可愛い顔って……

「なんか意外だなと思って。筈なら、くだらん、とか言ってますぐどっか行きそうなのに……」

「っふ、私を昔のまんまだと思うな。」

「人の努力の形に優劣など存在せず、その方向は無限にある」

「それが一夏の道だと言うのなら進めばいいさ！私には止める権利も義務もない」

「行け一夏！世界一のジャグラーになってこいー！」

達者でなーと手を振りながら、去っていく筈。

どうしよう、ちょっとウルっと来ちゃった、、、、達者でね、  
筈……

午前6時02分、6年振りの幼馴染は再び別れを告げた。

三十分後

「私もでびるすなつくするぞ、でびるすなつく。」

同じ場所で僕たちは再開した。

ジャージ着てるし、、、、本気が……………

いや、嬉しいけど。そして、でびるすなつくじゃなくてデヴィルス  
ティック。

「ふむ、明日もするぞー夏。」

朝練も終えて、シャワーも浴びて、食堂にて朝ご飯。

テーブルを挟んで座った筈がニコニコしながら言ってくる。

昨日の一件もあるせいかな周囲からの視線がチクチクと痛い。

「剣道はいいの？練習時間削っちゃうけど。」

『昨日の一件』程度に済ませられることでもないけど、、、、ほら今も『ええ！それホントだったの！？』『世界初の男IS操縦者死んじゃうんじゃない？』『いや、イギリスの代表候補も危ない・・・』なんて物騒な会話が聞こえてくる。

「篠ノ之流剣術は技術だけでなく精神面も鍛えなければならぬ。多くの経験を積むということは、それだけ精神が成長するということだ。故に私がデビルスナックを練習するのも立派な篠ノ之流剣術の修業だ、うむうむ」

発音はよくなったけどまだデビルスティックって言えてない、、、

おそらく筈にはカタカナ語の免疫もないのだろう。自己紹介で趣味はジャグリングって言ったけど、昨日筈はそのことに一切触れてこなかったから。

それにしてもよく筈は篠ノ之流剣術という言葉の口にする。

この6年間にそれを意識させられる出来事があったのだろうか。

「放課後はIS付き合っただけ。」

あたたかな湯気を立てているお茶をグビグビしずしず飲みきった後、  
箸はこう言ってくれた。

「ああ！勿論だ！」

本当に僕は良い幼馴染を持ったと思う。

食器一式を返却口へ運び、僕たちは食堂を後にした。

## 10話かな（後書き）

わけあってスマートフォンからの投稿です

改行とか読みにくいところがあるやもしれませんが

作中でジャグホリックの症状でジャグつてル時にやにやす、とありますがジャグホリックの人全てがにやにやとそているわけではありません

本作の一夏君にそのような症状があるというだけです

今回は放課後のIS訓練から始まります

では

## 11話という名の必然

全ての授業が終わって放課後、僕と篤は第二アリーナへ向けて歩いていった

何人かおっかけがいるけど・・・後ろからついてきてる

「はあ。」

ため息です、僕の

「どうした、ため息なんかついて？」

「おっかけさんがいる、僕の下手くそIS操縦が見られる。」

「オルコットにはばれないんだから問題ないだろう。」

「それは、そうだけど・・・」

オルコットさんとはいえば、既に機体の調整、訓練にブルーティアーズ製作元日本支部へと出発済み、といっても、IS関連の企業は大体IS学園の周りに集中してるから、そんなに遠い距離ではないけど。

学校での様子も、特に問題なかった。問題ないっていうことはオルコットさんがやる気を失っていないということ。

何故そんなことわかるかって？近寄らないでくださいオーラがびん

びんに出てたから、僕だけに対してじゃなくて他の人にも全員。

「姉さんは何を送ってきたんだ？」

「んー、これ。」

歩きながらだけど、カバンの中から一つのクリアファイルを取り出す。

ほんとは、こんなクリアファイル1枚には収まりきれない量の紙束が送られてきたんだけど、大事な部分だけ抜粋してきた。

「紙媒体？意外だな。姉さんなら千冬さんとバーチャル空間で疑似戦闘ができる機械でも作って送ってきそうだが。」

「いや、東さんもそのつもりでいたけど、僕が止めた。」

アリーナ遠いなー

「何故だ？」

「百獣の王としての最後のプライドです。」

「意味がわからん。」

「つぶ、気高き獅子の醜き足掻きよ。」



「ますます意味わからんわ。」

東さんの力を借りすぎると後で怖いから

いや、もう言えた事じゃないけど・・・

「や、やや、やっと着いた・・・」

バタツつと地面に倒れ伏す。

どうして、、、こんなに、、、疲れている、、、かというところ

「お前は力の入れ方に無駄が多すぎるんだ」

格納庫からから、、、ISを運んで、、、きたからです

やっと、、アリーナに、、着いたと思ったら、、、、

『いや、まだ打鉄を運んでないだろ。』

と、箒さんから言われ、、、アリーナへは、、、二回目の、、、到着です

「もっところ体全身から力が作用する一点にだな」

「箒と、、、僕を、、、一緒に、、、しないで」

「まったく、運搬用の台車がついているというのに、、、立て、I Sに乗るぞ。」

むくつと、起き上がる。いつまでもへたれていてはいけない。

視界の隅にさっきのおっかけさんたちが映った、、、数が増えてる、それに、、、

『打鉄に乗るのか、、、』 『きつと専用機は対織斑先生用に調整中なんだって!』 『いや、持つてるわけないだろ』 『なんでよ!』 『織斑はつい最近ISを動かせただけのただの一般人だぞ、織斑先生どころか、オルコットにも瞬殺されるだろうよ』 『もう!リアーデは織斑君の演説を聞いてなかったからそんなこと言えるの!絶対織斑君は強いわよ!』 『一緒のクラスだろ!聞いてたわ!そしてあんなものは嘘八百だ!騙されるな!』

演説で、、、リアーデさんとは友達になれそうだ。

そして僕を信じてくれてる方のおそらく田島さん、、、

ごめんね田島さん

僕を信じてくれてる田島さんのような人たちのためにも、少しでもいい試合ができるよう訓練に励むよ。

さあ、打鉄の起動準備を始めよう。

「ん、どうするんだっけ？まず台車の安全装置を解除して」

一通り覚えたはずなんだけどなー、専用の台車からISを降ろす方法。

えーっと

「遅いぞ一夏、まだ出来ないのか。」

学校（マリアンヌ学園）で習ったのと仕様が違うのか

「って、はやっ！」

見ると筈の打鉄は既に搭乗できる状態になっていた。

は、はやすびる・・・！

「この台車は、ワンタッチで搭乗可能状態まで持って行ける最新式だ。IS学園でも2つしか配備されていない、私のお前のだ。」

「へ、そうなの？」

そのかわり、ISを台車に乗せる時は従来の物より面倒くさいらしい  
筈詳しいな

僕は台車にワンタッチした、いや、実際はパスワード入力とかでワンタッチじゃないけど。

「よし！こつちも準備完了です、先生！」

これからのことも考えて筈のことは先生と呼ぼう。

「お前の教師になった覚えはないが・・・、早く乗るぞ。」

「うーっす。」

コックピットに足をかけ、堅い装甲に手を

その時、金属音が聴こえた気がした

「っ！」

慌てて全身をISから遠ざける。

そんなはずはない

冷たいものが背筋を駆けて、チカチカと視界が点滅する。

ありえない、こんなものは現実だと認めない

一際強く、心臓が鐘を打つ。それを境にどんどん心拍数が上がっていく

何回もISを起動してきた、アレが来たのは最初の一回目だけ

とても恐ろしいものが心臓から広がっていくかのように

不安が創り出している幻の音

頭が黒く犯されていく、視界の端から黒いものがにじみ出始めて

そう、わかっているはずなのに

「一夏。」

「えっ」

ぎゅっと、あたたかな感覚が右手を包む

細くて柔らかい

「姉さんからお前のことは聞いている。」

「うっ、えっと、その、あの・・・」

そのあたたかいのが全身に広がって

僕は今、箒に抱きしめられている。

「私が付いてる、何も怖いことなんてないだろ。」

とても暖かくて、すごく安心する

「落ち着いたか？」

「う、うん、大丈夫。」

さっきまでが本当に現実じゃなかったかのように、体が軽くなった。

箒の髪が頬にすれてくすぐりたい、でもすごく気持ちいい……

「乗れるか？」

箒からのホールド状態が解除されて

「て、手は握っててね!」

再び、右手をぎゅっとする。

「はいはい。」

妙に大人びたその表情が悔しくて

「べ、別に、俺が好きで箸の手を握っているわけじゃないから！勘違いするなよ！」

ツンデレってしまった！しかも、『俺』とか言っちゃったし！！

「うん、昔の一夏に戻った。」

こちらの心情を見通しているかのような笑み。

くそっ、恥ずかしい、、、自分でも顔が赤くなってるのがわかる。。

「ほむ、早く。」

「……………」



顔を赤くしたまま、ISに触れる

左手が触れた、その堅い装甲から伝わってくるものは全部、右手からのあたたかみに打ち消されてしまった。

「いけるか？」

「うん、全然平気。」

「そうか」

スツと、右手からぬくもりが消える。そのあたたかみが惜しかった。

「っあ」

って！僕はどこの漫画の美少女ヒロインか！

箒もISに乗るんだから、手を放すのは当然でしょ！

もうちょっと手握ってたかったなー、とかぜんっぜん思っていないから！思っていないから！

「全然思っていないから！」

思わず口にしちゃったけど、返ってきたのは

「ふふっ」

ポニーテールを揺らしながら振り向いた、何もかもを見透かしているかのような幼馴染の笑顔。

その顔に見惚れてしまったというのはここだけの話

「べつつにく、勘違いなんてしてないぞ、一夏がもっと私の手を握っていたかったなんてぞ、んぜん思っていないからな。」

「っな!？」

ニヤニヤと口の両端を吊り上げた憎たらしい顔。

カーッと顔が熱くなる。さっきとは違う意味で体が熱い。

体がフルフルと震える

ふふふふふふ、ふふふふふふふふふふ――

「もー怒ったから！！この僕に公共の場で恥をかかせるなんて万死に値するんだからっ！！」

言いながら、打鉄を起動させる。

「どこぞの代表候補みたいなことを言う、わかった、この篠ノ之流剣術後継者、篠ノ之箒が直々に教育指導を施してやろう。いけない生徒にはお仕置きが必要だからな。」

箒が打鉄を纏ったのを確認してから

「決闘だ――！！」

打鉄の標準装備、近接ブレードを呼び出しあの憎たらしいニヤニヤ顔に斬りかかった。

「来い、一夏

！」

勿論、僕は本気で箒に対して腹を立てた訳ではない、箒だってそのことはわかってるし、おそらく束さんから送られてきた訓練方法の内容まで予測してのニヤニヤ顔だったのだろう。こっちは本気で恥ずかしかったのですが・・・

束さん推奨の訓練方法それは、『箒と全力で戦うこと』

送られてきた資料については、姉さんの現役時代のIS戦闘の小難しいデータが8割、箒のIS搭乗歴が1割。

姉さんの方とはもかく、箒のデータを見るのは個人情報満載だったので気がひけた。チラッとしかみてないけど衝撃で胸がいつぱい

篠ノ之箒、IS搭乗時間：320時間

ええ、目を疑いましたとも。篝さんとなりでぐーすか寝てる中で目をこすりました。(昨日の夜、寮の部屋で見てた)

代表候補でもないのにIS搭乗300時間越え、こんな情報、世界で3人しか知らないだろう、僕と篝と束さん。

ああ、どうりで強いわけだ

「ほらー、さっさと立てー夏。まだシールドエネルギーは残ってるだろー。」

と、いうわけで現在進行形で束さん推奨の訓練方法を実行中です。

近接ブレードで脇腹をグイグイと刺激されています。

「もう、もうちょっとだけ休ませて、お願い。」

決闘宣言から1時間弱、地面にへばり付いて休憩を請う僕の姿、、、  
情けない。

どうして、1時間もボロボロにされ続けてシールドエネルギーが尽きないかと言つと

「っでい！」

「ふげ！」

こうやって、内部にだけ衝撃を与える攻撃をしてくるからです。普通に近接ブレードで殴られてるんですが、何故かシールドエネルギーはほとんど減りません。でもすごく痛いです、、、

「よし、2発目を行こうか。自分から罰を受けてくれるなんて先生感心だぞー。」

「待って、待って！起きます、戦いますっ！」

飛び上がって、距離を取る。

「アリーナ閉館まであと2時間、たっぷり鍛えてやる！」

代表候補バりに強い幼馴染に、これから7日間毎日ばこられたら

「っハ！」

「げふ！」

ほころれ耐性が付いて、

「びびー」

「はげえー！」

ブリュンヒルデ相手にも少しは持ち堪えるかもしれないな

「ふ」

「ぐおわっはあー！」

東さんの訓練方法は正しい。。。のかな？

東さんが送ってくれた資料、残りの一割は、、、秘密にして  
おこじ。

僕と東さんだけのね。

「何を考えているんだー！」

「ふじぐわっはあぁ!!--」

痛いです。



## 11話という名の必然（後書き）

もう、一夏君がヒロインでいいんじゃないかって思います

篤さんかつこよすぎですね

フランスの男の娘も篤さんに攻略されてしまいそう

まあ、そんなことにはならないと思いますが・・・？

作者のブログの方でもインフィニット・ストラトスのSSを書いて  
おります

原作設定ですが、、、下ネタ多めですが、、、  
興味あったらこちらからどうぞ

<http://jaguringsuyoukougunn.blogspot.com/blog-category-7.html>

今回は訓練漬けの日々を描きます

次々回あたり蘭さま登場かも・・・

ではでは

## 12話(前書き)

ジャグリング道具紹介読んでもらった方がいいです

## 12話

横に一闪、迫りくる刀身。

当たるわけにはいかない

後ろに躲すか、こちらの刀を合わせるか迷ってはいらなかった。

ヒュンと斬撃音が頭上をかすめる。

しかしそれは、あまりに大きい回避動作

こちらが遅いのか、相手が早いのか、前者でもあり後者でもあるだろう。

既に、その近接ブレードは再び僕を狙っていた。

出せる力の最大限で守りの一手を打ちに行くが、両者の刃が交わることはなく。

ゴソツと骨全体に響き渡る衝撃

痛いというより気持ちが悪い。

体中の臓器と言つ臓器が揺れ動いて、ぐちゃぐちゃする。

胃の中の物をすべて吐き出したくなって、その前に心臓がそのポンプに緊急停止を命じた。

あ あ

あ あ あ

息が出来ない、体が固まる。二三日間でずいぶんと慣れ親しんだ感覚だ。

ドンツと背中から転がり、3回転4回転、心臓が活動を再開した。

地面に這いつくばって何とか立ち上がるうとするけど

同時、思い出したかのように胃の中の物がせり上がってくる、熱く酸っぱい物がのどを支配し始めた

しかし、それさえも忘れさせてくれるような、とどめの一撃。

蹴り飛ばされたバッタのように、速度を伴って体が宙に浮く。

残虐を楽しむ子供の餌食となった昆虫、

ただの愉悦のために、四肢をもがれ、腹をさかれ、蹴られて、踏みつけられて、捨てられて。

あの虫もこんな気持ちだったのだろうか。

痛みすら感じる事が出来なくなり、自分が今どこにいるのかどっちを向いているのかもわからない。

飛んでいるのか、立っているのか、歩いているのか、わからない

何のためにここにいるのか

どうして僕はこんな思いをしなければならぬのか

わからない

みじめで、無様で、何の抵抗もできずに捨てられていくバッタ

それが僕なのか

体の動きが止まった。壁にぶつかったのだろう。

首だけを動かした、そのISが残虐行為を止め立ち止まっている。

「すまん、今のはきつくやりすぎた。」

朦朧とする意識の中で、手放せば消え失せてしまうこの意識をこの思考のためだけに使う。

ああ、僕はあなたは人間ではなく鬼なのではないかと疑っていた。

残虐を愉しむ鬼があなたで、私とその餌食。

しかしあなたは列記とした人間としての心を持ち合わせている。

たとえその所業が鬼のようであっても、今の一言であなたを人間として認めることができた。

決して、残虐な行為などではありません。

無礼だったことをお許しください、どうかあなたに幸あら

「シールドエネルギーを普段の2倍近く削ってしまったな、すまんすまん」

「僕の心配をしろー——————っ  
!?!?!」

心と体、両方の痛みを背負って僕は果敢に鬼に突撃した。

犬も猿も雉もないけど織斑一夏は鬼退治を継続する。

寮の裏。

まだ『いつもの場所』とはなっていないけど、それなりに見慣れてきた風景。

気持ちのよい朝日を反射する鮮やかな芝生。

その一角、ベンチの上に置いてある僕のジャグリングアイテム達。

振り向けばそこには、そびえ立つISS学園寮、遠くに見えるのは第二アリーナの屋根かな。

そして・・・



「見る！一夏！今、5回続いたぞ！」

放課後いつも僕をぼこぼこにしてくれるIS操縦者。

篤は初日以来毎日、こつやって僕の朝練に途中参加している。現在はデヴィルスティックにご執心だ。

よほど竹刀でジャグリングしたのが衝撃だったらしい。

「おー、やるじゃん。練習4日目にしてアイドリリング5回続くとつて、乗り物に例えるなら渋滞下でのプロが乗るスポーツカーくらいの速さだよ。」

日に日に、こつちに来る時間が早くなっているのは気のせいではないだろう。『6時30分くらいから行く』とか言っときながら、今日15分にはいたよね。

「そつだろつそつだろつ……あれ、寝められてない気がする。」

「気のせい、気のせい。」

「そつか、」

と、再び箒はセンタースティックに向き直り、慣れない手つきで左右からコンコンと1本のスティックに命を吹き込む練習を始めた。

コン、コン、コン、コン、ポテッ

コン、ココン、ポテッ

コン、コン、コン、コン、コン、ポテッ

ああ、惜しいあと一回で箒自己ベスト更新だったのに、、

それにしても女の子がああやってジャグリングに苦戦する姿は、、  
良いな、すごくいい。

失敗すると

「うーん、上手いこといかな〜。」

といちいち反応したり

ちょっと上手くいくと

「おお！すごい！すごい！見る一夏！十回以上続いているぞっ！」

と、表情が華やいだり、、、、男はああいう風には行きません。

箒自体が可愛いというのもあるけど……っは！いかんいかん僕はあの『箒ちゃんとおてて繋いでIS乗っちゃいました事件』（命名、僕）以来、思考がおかしくなる時がある！注意せねば！

「あー、ほらー、一夏が見ないから落としてしまったらー。」

「ごめん、ごめん、次はちゃんと見てるから。」

嘘です、ずっと見てました。

「まったく、」

頬をぶくつと膨らまして、センタースティックとにらめっこを始める箒。

……

デヴィルスティックという道具を始めて間もないとき、今の箒のよくなイドリング状態もままならない時は、スティックを落としては拾いを繰り返す。それでだんだん上手くなっていくんだけど、下手な内は常に腰が曲がった状態になる。センタースティックは70センチ程度、股下くらいまでの長さ、その真横の位置まで両手を持っていきハンドスティックで叩いて上げていくから、どうしても腰が曲がってしまうのだ。

えーっと、箒が着てるのはジャージで、ちょっとサイズが小さ

いのかな、、、

腰を曲げるといふことは、服の裾が持ち上がるということ。

今、僕と箒は向かい合わない形で、僕が箒の方を見ていて、箒も僕と同じ方向に体が向いている。

つまり、箒が女性らしい丸みを帯びた形の良なお尻をこちらに突き出している状況で、その上部薄いピンク色の布がチラチラと……  
・・・チラチラと……

め、目が離せません、、、

「ぬー、また落ちたぞ。」

ああ！箒が落としたセンタースティックを拾おうとさらに姿勢を屈めて……！

薄いピンク色の面積がっ……！

見えてる……！み・え・て・RU……！！

「?どうした一夏」

鼻の奥に熱いものを感じた時、体を支える力がなくなって、するつと意識が抜け落ちた。

「おい一夏!鼻血!鼻血!」

ファウンテン、、、、、、3ビットウィーブ、、、、、、  
バタフライ、、、、、、、、、、、、、、、、  
5ビットウィーブ、、、、、、ビハインドザバッグバタフライ、、、、  
、、、、コークスクリユー、、、、、、、、  
コスモ、、、、、、、、キャリーターン、、、、クローバー

「一夏」

ローターン、、、、、、、、スレイドザニードル、、、、、、ス  
トール、、、、、、

「一夏！」

「っは！？僕はいったい何を?!」

突然の意識の覚醒にビツクリする僕。

「何って、、ポイを振っているだろう。」

「ポイ?・・・あ、ホントだ。」 ジャグホリックの症状その2：無意識にジャグってる

思い出したぞ、箒の『アレ』を見て、何故か真剣にジャグらなければならぬと直感した僕は本職であるポイでジャグり始めたんだ!!

はて?それにしても箒の何を見たのだろうか、、思い出せない

箒、、箒の、、薄い何かを、、薄い、、薄いピンクザアアアア

アアア!

ジャグホリックの症状その3：ジャグリングは思春期の煩惱さえも犯してしまう

思考にノイズが入る。まあ、思い出せないってことはさして重要なことではないのだろう

「もう時間だぞ、7時10分だ。」

「そだね、かえろっか。」

「ああ。」

素早く帰り支度を整えて、、、と言っても僕の道具を片付けただけです。

寮の自室を目指した。

その帰り道、そろそろ芝生が見えなくなる位置で呟いた。

「今日で最後だね。」

「そうだな。」

主語を置かなくても理解した筈は、僕の雰囲気ですわ。悟ったらしい。

顔つきが変わった。

「不安か？」

屋根があり、左右を等間隔でサクラの木がはさむ、綺麗な通路に――歩足を踏み入れて。

「……、……ブリュンヒルデとの決闘を間近に控えて不安にならない人なんていないよ。」

まだ金曜日、決闘の日は来週月曜日だから。『最後』と言ったのは訓練のこと、土日はアーリーナの整備、点検をするらしいから訓練は出来ない。

「どうかな？オルコットさんの性格。」

忘れがちだけど、この決闘の目的はオルコット嬢の性格矯正にある。

「さあな、そっちはまったくわからん、ただ」

「ただ？」

間を空けた筈、その視線の先にはただ桜の花びらが散っていた。



「お前もオルコットも千冬さんには勝てない、勝てないどころか傷も与えられない。」

間接的に、僕が弱いと言われて腹を立てた訳ではない。

「でも、姉さんは」

「お前の言った通り、千冬さんはISを装備してこないかもしれない。」

「なら、僕はともかくオルコットさんなら、、、仮にも代表候補だ。」

寮の玄関口が見えてきたところで、篝は立ち止まった。

「お前は、織斑千冬を知らない。」

「え」

僕も止まった。

いつもはきれいだと言え称えていた、舞い散る桜の花びらが、『僕も』『俺』も知らない筈の表情とのコントラストに、その歪さを際立たせる。

「私はISとも、篠ノ之束とも、長く付き合っている。当然、お前の知らない織斑千冬も私は知っている。」

「、、、どんな？」

「あの人は人間じゃない。」

筈は姉さんに対して『あの人』という呼称を使った。

6年前、僕が束さんの所在について聞いたときと同じ顔で。

『あの人』、筈は昔、束さんに対してそう呼んでいた。

”束さんは？” ”あの人なら今日はいない” 道場で朝だったかな・

「 比喻？」

「人間以外に見えるのか」

あの人という言葉に思う所があったのか今度は主語を置かなかった。  
もちろん、比喩だと言っているのだが。

「それに、千冬さんはお前の思ってる以上に」

「大丈夫！」

箒の言葉は遮った、大体言わんとすることが分かってきた。

小さい頃、僕と姉さん、少しギクシャクしてたから。姉さんは好意的に接してきてくれたんだけど、僕はそれを受け入れられなかったというかんじで。

箒は僕と姉さんの関係を心配してくれていたのだろう。

「箒だって、織斑一夏と言う人間を知らないでしょ。」

「っぬ、っ、」

「僕だって成長したんだから、姉さんとは上手くいってますー。」

「ぬぬぬ」

「今回のことだって、実はもう姉さんとは話し合ってるし、殺さないでねとも頼んでるし。」

「ぬぬぬぬ」

「姉さんとの関係は良好です、したがって尊の心配は杞憂です。」

「、、、ふん」

腕を組んで、顔をそらす筈。

「帰るぞ、無駄な立ち話をしたからな！」

スタスタと早足で玄関へ向かった。

「ああ、ちょっと待ってよ！早いつて！」

「いいだろう！別に！私の心配事なんて、空から槍が降ってきたらどうしよう、と考えるくらい杞憂なことなのだからな！！！」

「そこまでは言っていないって!!」

スタスタと僕の駆け足より早い歩きで進む篤だけど、玄関先階段の前で立ち止まった。

「どしたの？ 篤の心配事なら東さんが僕と結婚したらどうしよう、って考えるくらい杞憂だよ。」

「・・・放課後、覚えておけよー夏、く、く」

ギロリっ！こ、こわい。。。。

「私のタオルがない、いつも持って行ってたやつだ。」

「むこうに忘れてきた？ どんなやつ？」

むこうってというのは僕たちがジャグリングしてたところを指して言った。

「薄いピンクっばいやつだ。」

・・・、・・・、・・・、何故か、その薄いピンクのありかを知っている。

「はっはー、腰にでも巻いてるんじゃないかなー、はっはー、は、はははー」

「おお！本当だ！よくわかったな！」

はっはー、ははははは、なんだろうこの焦燥感、ガツカリ感。

なんかとっても切ない気持ちになってきたぞー。

というか思い出しちゃったなー、僕はあの薄いピンク色みて鼻血出したんだよねー。

ははー、はははははは

「なんで腰になんて巻いてるの！？なんで！！」

「ど、どーしたんだ？」

篤が単純に僕と姉さんの関係を心配しただけなら、姉さんを『あの  
人』なんて呼ぶことはなかった。

そこには何か別の事情があるのかもしれない、でも今の僕は薄いピ  
ンク色に頭がいつぱいでそんなことは考えようともしなかった・・・

## 12話（後書き）

戦闘描写頑張りました

一夏君が気を失っているときの文はポイの技名です

ほつきさん伏線張りまくりですね

次回は土日とセシリアさんを少々です  
のし



### 13話ですよね

その姿が母と重なって見えた。

安全ガラスの向こう側、多くのコードに接続された青のISがあった  
全体的に薄暗く、機械的な部屋だ。

おびただしい数の情報が流れるモニターとにらめっこをする研究員  
が数十名、その指は視認できないほどのスピードでキーボードを打  
ち続けている。

研究員はみな明日の試合への調整に必死なのだ。

万全な機体で世界チャンピオンに臨んでもらいたい、そう思うのは  
研究員として当然のこと。

そんな人たちの邪魔にならないようにと、少し離れたところから自  
機を見つめる黒のベンチコートがにいる。

それは紛れもなくIS操縦者、セシリア・オルコットだった

思い出していた光景はちょうど一週間前、IS学園の入学式の当日。

初めて喋ったとき、”なんだあの人と同じか”と思った。

結局、ISを動かせるようになって男は『男』でしかないと落胆  
気弱でへこへこして、こちらの顔色をうかがってはすぐに謝る。

おまけに男とは思えない体つき、あれじゃ労働力にすらならない。

しかし、その男が他の者と一線置いていたのは事実、

頭はそれなりに良いみたいだし、礼儀もある、容姿だって整っている。懐柔して家の召使いにしても良いとまで考えた。

自分に女としての魅力が備わっているのは知っているし、まだ誰に

も行使したことはないけれど、あんなやわそうな男ならすぐに自分のモノに出来る自信があった。

世界で唯一の男IS操縦者を思うままに弄ぶ、その優越感に浸るのも悪くない。

もっとも弄ばれていたのはこっち側だった

### 3 時間目

人懐っこい女顔の裏に隠された、あの男の本性。

今まで合ったどんな男にも、こんな態度をとられてことはない

弱々しかった口調はどこへ行ったのか

セシリア・オルコットを否定し

自らを下げる卑下する日本人らしい人格はどこへ消えたのか

ウサギは引っ込んでいると、お前では私に勝てないと

『男』という生き物は猿にも劣る、そう今でも信じてる

ブリュンヒルデに勝てると断言し、わたくしに問うてきまして  
たわ

『お前は織斑千冬に勝てないのか』

そうだ、男が劣等種であるとするなら、最初から織斑一夏になんて目をつける必要はなかった。

IS学園にはただ珍しいだけのチンパンジーより、確かな実力を持った者がいる。

何より悔しかったのはその男と母の姿が重なって見えたということ

意味のわからないたとえ話から入って

わたくしに厳しく

堂々として、はっきりとした語調

目をそらすずに

誰もが不安に駆られるようなことを、わたくしには絶対できないよ  
うなことを、断言した

母のようになりたいと、ずっと追いつけたその境地に

織斑一夏は既に立っているというのか

認めたくない

自身より男のほうが優れているなどと認めたくない

認めたくない

自身より母に近い者がいるなどと

それが男であるなどと

「オルコットさん準備が出来ました」

「・・・」

「オルコットさん？」

「ええ、今行きますわ」

（織斑、、一夏・・・口だけでしたら承知しませんわ）

白衣のいかにも研究してますといったかんじの研究員（女）に呼ばれ、セシリア・オルコットはベンチコートを脱ぎ捨てた。

日曜日の夜、いよいよ姉さんとの決闘を目前に控えた僕は、この最後の休日を何に使ったかと言うと、どんな訓練をしていたかということ

寮の裏の広場で、ずっとジャグリングしてました。

いや、違っただって！僕だってこの土日は姉さんの過去の対戦動画を見て対策を練ろうとか精神的な鍛練をしようとか思ってたんだけど！筈がどっかに行っちゃたの！そして日曜日の午後7時半になった今でも帰ってこないの！

故に僕がこの土日を全てジャグリングに費やしたのは正当だ！・・・お弁当まで作ったんだから！

一日中ジャグるっていうことは当然、他人に見られる寄ってくる。

ジャグラーなんて見られてなんぼの商売、そういうのは気にならな  
いんだけど、、、いやできればこの学園の人には内緒にしたかった

んだけど。

人が寄ってくるということは、話す喋る 仲良くなる

その結果が・・・

トントントン

『お〜りむ〜らく〜ん、一緒にお風呂入ろうよ〜』

『部屋のシャワーは故障中でしょ〜、意地張らなくていいって〜』

『大浴場は広いよ〜』

『一緒に来たら、お姉さんがイ・イ・コ・トしてあげる〜』

ワイワイ、ガヤガヤ、ワイワイ、ガヤガヤ

この状況である。

さつき振り切ったと思ったら・・・まだ追いかけてきますか

扉の向こう側に複数の人の気配、十人以上はいる

聞いた感じ3年生で一番最初に僕に絡んできた人たちだ、、はあ

「はっはー、すみません。もうアリーナのシャワー使用許可ももらっちゃってます。」



『つえ、こっちは織斑一夏の貸し出し許可もらっちゃってるけど?』

「誰からですか!？」

『もちろん、織斑先生から』

「……」

つぶ、そんな見え透いた嘘、騙されるとも思っているのかね。姉さんが僕の貸し出し許可なんて出すわけがない。

『ほら、織斑一夏及び入浴する者全員が水着を着用している場合、織斑一夏が女子風呂に入ることを許可するってところに直筆でサインしてもらったから』

姉さんの威を借りてビビってもらおう。

「嘘だったら、姉さんに言いつけますよ」

『うん、いいよ』

む……、IS学園の3年ともなれば姉さんの恐ろしさはわかっているはず。にもかかわらずこの反応、まさか本当に僕の貸し出し許可が?

『こつちに実物あるから見てみ。』

確かこの人、演劇部の部長だったような気がする。その何気ない言い回しに騙されたのだ

アホな僕は”筆跡鑑定でもしちやる”とか思いながら、ドアの鍵を

カチヤ

「開いた！開いたぞー！」

「かこめー！逃がすなー！！」

「ぐっへっへー、まんまと騙されやがってー」

「口をふさげー！手足を縛れー！」

すぐにドアを閉めようと思った、でももう体は動かなかった。

腕とか脚とか全部、女の子特有のやわらかい手足で拘束されてた。

いろんな部分で女の子と触れ合ってた。鼻血出さなかった僕はえらい

「連れてけ！連れてけー！！」

「ダメです隊長！織斑千冬が異変に気づきました！！」

「馬鹿な！！早すぎる！！」

「奴は自宅にいるはずでは！？」

「慌てるな！迎撃の陣を敷く！！総員配置に着け！！」

「「「「「おおー！！！！」」」」」

何やら僕の知らないところすごい闘争が起こっているようです

「早く！！織斑一夏を浴場へ！！入れてしまえばこっちのモノだ！

！！！！」

「でもっ！それじゃ先輩たちが！！」

あ、僕を拘束している人たちは1年生なのね

というか既に動き回れるレベルに拘束とかされてないけど・・・

「後輩っていうのはな、先輩の言うことを聞くもんなんだよ！早く！」

「は、は、はいっ！！」

聞く場面によっては後輩いじめみたいにも聞こえるけど。

「織斑君走って！」

「あ、うん」

僕は走った、どこに向かっているのか、これからどうなるのかとか忘れちゃったけど、とにかく雰囲気ですってしまっただ。

そして僕たちは無事目的地にたどり着くことが出来た。

しかしそこには多くの犠牲があったこと、絶対に忘れてはならない。

「もう、、、お婿に、、、いけ、ない、、、」

30分後、妙にツヤツヤしたお肌といつにもましてサラサラな髪を手に入れた僕は自室のベッドへよろよろと倒れこんだ。

それと女子用スクール水着も手に入れた・・・どうしてそんなものゲットしたかは、、、察してほしい。

『わー、肌白いなー織斑君』

『しかも、つるつるっ！』

『わたしより細いよこれ、体重何キロ？』

『あとで髪洗わせてね！』

『っあ！ずるーい！髪は私が担当するんだよ！』

『じゃ私、上半身ね！』

『えへへー、アタシが下半身を洗っちゃる〜』

『か、体は自分で洗いますっ!!!』

『も、もう我慢できないわ、お、織斑君のスク水姿ハアハア、ハアハア』

『ひいいいいい!そんな手をワキワキさせて寄ってこないでください!!!』

『嫌がる織斑君を無理矢理ノノノノノ』

『むしろこのまま放置するのもいいかもしれない』

『口ではいやと言いなながらも全く抵抗の力が入らない織斑君であった』

『入ってます!抵抗の力入りますから!!放置しないでっ!!!』

結局、体も洗われてしまった。前の下半身だけは死守しましたが・

その後、湯船にまで連れて行かれそうになったけど、そこで逃げた。多分湯船に浸かっていたら、ここに帰ってくる時間がもう1時間ほど遅れていたと思う。。。

その帰りし、姉さんに正座で説教されている3年生約15名と遭遇した。姉さんは僕を見るなり『大丈夫か!?怪我はないか?何もさねなかったか?!』と、すごい剣幕。どうやらその15名にはグラウンド(400mトラック)250周の刑が決まっていたようだけど、なんとか刑の執行を取りやめにしてもらった。

『一夏!どうしてそんなことを言っただ!』

学校であるにもかかわらず名前でも呼んでくる姉さん。

『結局、女風呂に入っちゃたのは僕の責任だから。先輩たちは悪くないよ』

僕のせいで先輩方がつらい思いをするなんて少し後味が悪い。

『こいつらのせいでお前は』

『あーあ、こっちの生活も落ち着いてきたし、姉さんのお弁当作り再開しようって思ったたのになー』

『ぬ、ぬ』

『なんだか、やる気失せてきたなー』

『・・・』

3年生の方々から散々お礼を言われた。隊長って呼ばれてた人なんて泣いてたからね。

束さんといい、僕のお弁当ってそんなに嬉しいのかな

それにしても女子の統率力、情報伝達力はすごい。お風呂場に入ってくる人も、出ていく人もみんな水着を着ていた。

一体いつから、僕を女子風呂に入れることが計画されていたのだろ  
う？

ああ、もうどうでもいいや、このまま眠ってしまおう、この柔らかなベッドの感覚に身をうずめて、

目を閉じると、少しさみしい気持ちになった。

ずっと、あんな自分を演じ続けなければならないのだろうか

何をされようと笑って受け流して

常に相手のことを優先して

言いたいことを喉の奥で抑え込み、

マスクットみたいに扱われ、されるがままに女子風呂まで連れて行かれてしまう

今日だってほとんどジャグリングなんて出来なかった。寮の裏の広



場で入れ替わり立ち代わりやってくる女の人に話を合わせていただけ……

これが友達を作るっていうことなのかな？

二人目の幼馴染が僕に与えた課題は予想以上の難題だった

……正直、面倒くさいし、しんどい

明日には織斑先生との決闘も控えてる、その後のオルコットさんとの付き合いも控えてる。

この先、上手いことやっていけるか不安、、、、いつそ中学の頃みたいに

『なにかあったら電話してくださいね』

瞼の裏に焼付いたその笑顔で、不意に後輩の言葉を思い出した。

電話、後輩に、電話

ひょっとして『なにかあった時』ってというのは「こういう時のことを言うのではないだろうか？

『一夏さん、溜め込みやすいんだから』

今まさに、僕は『溜め込んで』いるのではないか

、電話、蘭ちゃんに？

そんな言葉の解釈よりも、僕はその後輩に電話をかけるという行為に自然と頬が緩む。

よしっ！蘭ちゃんに電話しよう！

名案だ！どうして最初から電話しなかったんだろう！！

むっふふー、

思えば蘭ちゃんは僕の唯一無二の親友ではないか！！電話しない方がおかしいっかたのだ！！！！

いつもの左ポケットからケータイを取り出し、数少ない電話帳の中からその名前をCrick!Crick!

早く出ないかな、出ないかな？

ふとんを抱きしめて、ベッドの上でごろごろと転がる。

やばい顔のニヤニヤが止まらない、どうして蘭ちゃんに電話するだけなのにこんな心が弾むのだろう

ごろごろ、ごろごろ、にやにや、にやにや

早く、早く出て！

『もしもし、一夏さん？』

そうだ、これだ、この声が聞きたかったのだ。

僕を変わらせた張本人、五反田蘭。

この人がいなければ幼馴染に『変わった変わった』と言われることもなく、ISの世界チャンピオンとも戦うことはなかったであろう。

中一の冬からずっと支えられてきた、そうでなければ僕は未だにありえない理想を追い続けていた。

ついこの間だって、蘭ちゃんがいなければ一人で博覧会に行っただろうし、あの暗闇からも抜け出せなかったかもしれない。

改めて気づいた、五反田蘭が占める僕の心の面積は、、、あまりにも大きい

僕は五反田蘭が好きなのかもし

『すみません、今アマトークがいいところなんで、終わったらかけ直しますね。』

ツーツーツー

アマトークに負けた、、、アマトークに、、、負けた、、、

『もしもし、一夏さん。さっきはすみません。』

あれから1時間、待ち続けた1時間、ベッドの上で泣き続けた1時間  
ようやく僕の携帯が声を出した。

「・・・」

『一夏さん？おーい』

謝ったって許してあげないんだから！僕が味わったこの1時間の気  
持ちを！！

「ふんっ、今後30秒間、蘭ちゃんとは一切口きかないから!!」

『あははー、30秒ですかー。また随分と弱気にできましたねー。』

「.....」

ホントは30年間と言おうとしたのだけれど、全身からの拒否反応で口が30秒と開いてしまった

.....30秒がいかに長いか思いしめちやる。

『実は今回のアマトークスペシャルではジャグリング芸人さんが集まり』

「何それっ!?!詳しく!?!」

『あれ、まだ30秒経ってませんよ?』

「もうそのことはいいの!蘭ちゃんがジャグリング動画見てたつて言うなら、たとえ砂漠を3日間彷徨って喉がカラッカラの状態の僕が五反田家に訪ねても、蘭ちゃんの事情を優先してもいいから!!」

『ジャグリング動画じゃなくてアマトークですけどね。』

もう、僕が1時間泣き続けたとかどうでもいいや！

「っで！？どんなだった！！」

『え〜っと、一夏さんが持ってる道具がいつぱい出てました。』

「うんうん！！」

『ゲストに黄色いドラゴンの着ぐる』

「ひよ が君が！？ひよ が君が出たの！？」

「他には！！他には！？」

『録画しておきましたから、そんなに慌てないでください。』

「じゃ、明日行くー！」

『平日ですけど』

「じゃ明後日！！」

『まだ火曜日ですよ、どんだけ楽しみなんですかー！』

「今度の土曜日ね！！」

『はい、待ってます』

「絶対だから！」

むふふふふー、土曜日は久々に蘭ちゃんの家近くの公園でジャグ  
るかなー

僕にとつての『いつもの場所』は到底そこだからね！ホームグラウ  
ンドと言っても差し支えないよ！！

『ほいで、ホントは何の用事だったんですか？』

「絶対だから！！」

『わかってますって！』

「っあ、ジャグリング芸人のところだけでいいから。他のところは  
Cut!Cut!」

『ー夏さんもアマトークという番組システムは理解してるんですね、  
大丈夫ですよもう処理済みですから』

さすが蘭ちゃん、わかってらっしゃる

「それで僕が何故蘭ちゃんに電話を掛けたかと言つと・・・」

『いきなり本題に戻りますか』

「うん、っ」と

『どつしたんですか？言いにくいことでも？』



変にカッコつけるよりも、素直に言った方がいいかもしれない

「蘭ちゃんの声が聞きたかったら！」

『ええ！？一夏さんされてどういう！？』

「僕明日死ぬかもしれないけど、ひよ　が君のためなら頑張れる！」

『そこはわたしのためじゃないんだ・・・』

「ん？なにか言った？」

ちよつと聞き取れなかった。

『い、いえ！なんでもっ！！』

「そう、、、なんか蘭ちゃんにいろいろ話したら元気になった！！」

『まだいろいろの”い”の字も聞いてない気がします』

「っえ、言ったでしょ。明日僕が姉さんと戦うこととか、今日女子風呂に入ったこととか、最近放課後はいつもボカスカにされてるこ

ととか」

『聞いてませんよっ！どれ一つ聞いてませんよっ！そして2つ目！  
！2つ目犯罪です！！』

ん？2つ目？そっかよく考えれば僕、女子風呂に入ったんだよね、  
そりゃ犯罪もいいところだ

「しょうがないなー順番に説明してくよ、どれからがいい？」

『女子風呂！！女・子・風・呂！！』

「女子風呂だあ〜？まったく蘭ちゃんも思春期だな〜」

『一夏さん、私の手が滑って削除ボタンを押してしまう可能性もな  
くはないんですよ』

何の削除ボタン？と聞きなおそうとしたけど、即座に思い出した

「やめて！消さないで！！話すから、ちゃんと話すからっ！！」

『そうですか、なら話してください。もっとも、話したとして私が  
削除決定ボタンに圧力をかけるかどうかは別の話ですが』

「違うの！不可抗力だったのっ！！」

これから先、1時間くらい話してました。篝が帰ってこなかったら  
もう2時間は電話してたと思う。

蘭ちゃんと話するのは、他の人と話すのとは何か違う。何も考えずに話せるというか安心するというか、ううむ何故だろうか？

まあいいか、今日は幸せな気分で寝られそう。幕に『なにニヤニヤしてるんだ気持ち悪いぞ』と言われても全然気にならない。

今日は久々にいい夢が見れそうな気がする。。。。

### 13話ですよね(後書き)

投稿が遅くなりまして、遅くなりまして

最近、忙しいでござす

作中、一夏氏が黄色のドラゴンのぬいぐるみをひよ　が君と言って  
います

ジャグリング界ですごくすごく有名な人です

作者をジャグリングの世界に更に深くおとしいれてくれたかたでも  
あります

次回いよいよ、VS千冬さんです

投稿はなんとか1週間以内にと考えております

もう3回くらいでオルコット城陥落でございます

ではノシ

## 14話なはず

月曜日の放課後、もうすぐ僕とオルコットさんのどちらがクラス代表となるかが決まる時。

山田先生に連れられて、三人分の両脚がコツコツと音を立て廊下を進んでいく。言うまでもなく第三アリーナのピットに向かっていた。

道中、いろんな人が応援の言葉をくださった。学年、国籍、生徒教師問わず『死んでも骨は拾ってやる』とか『負けたら私と結婚だからー!』とかとか。中には『ダメーっ!行かないでー!』と泣いてくれる人もいた。そりゃあ、背中を流し合った仲ですよ!友情だつて芽生えるつてもんです!思い出したくないけど。

そんないろいろな激励のお言葉をいただく度に・・・

現在、前方を歩いているイギリス人がすごく怒っていますオーラで、イラつきを含んだ表情で僕を睨んで来るのだ。

「随分と軽薄なお付き合いをしていらっしやるそつで」

ただ連続する足音に亀裂が入った。この瞬間、三人分の足音が僕とオルコットさんの間に流れるBGMに切り替わる。

皮肉と嘲笑を含んだ声、その表情はこちらからでは伺えない。

「先日、女子風呂に同席されたとか」

この季節まだまだ需要のありそうな黒のベンチコートを身に纏うオルコットさん。ちらっと見たかんじ中はもふもふしててすごく温かそうだった。だがISスーツを着ている限りそんな需要はなくなる。

空調調節システム搭載、常に安定した暖かさが着用者に纏うのだ。外気が寒くても暑くてもスーツを着ているときは関係ない。

ISスーツは昨日僕が着用した水着同然の露出度、周囲からの目を気にして上着を着る人も少なくない。しかしオルコットさんはそういうタイプではない、堂々として、周りなんて気にしない。

それにオルコットさんが何らかの事情であの上着を羽織らなければならぬとしても、あのベンチコートは、、何故。

よく見れば、いやよく見なくてもわかる。それがホントの色であるかのように大半の部分が煤汚れて、縫い直された箇所がほとんど、大きすぎてもう少して裾が床にすりそう。

とてもイギリス名貴族が好き好んで着る服には見えない。

どうしてそんなものを                    という疑問をよそに

「いいように扱われて、、仮にも男としてのプライドはありませんの？」

バシュッと圧縮空気の抜ける音で自動ドアが開く、ピットに着いたのだ。

同時にそのベンチコートが初めて振り返り、ようやくオルコットさんとご対面。想像の通り僕を見下すような目をしていた。

険悪な雰囲気を感じ取ったのか、山田先生はおろおろとしている。

「そんなに見たかったの？僕の女子用スクール水着姿」

「っな?!スクール水着!?!」

あ、あなた!!と詰め寄ってくるオルコットさんを、すっと鼻で笑って躲した。

「山田先生、ここがピットですか」

極めていつもの声で硬直状態の副担任を呼び覚ます。イギリス人は苛立たしげに舌打ちをかました。

「お、おお、織斑君はここに入るのは初めてですか!？」

どんだけ慌ててるんですか山田先生。このピットには普段、生徒は立ち入れない。入れる時は今みたいなIS同士の戦闘を行う時なんだけど・・・入学して1週間でここに来た生徒は僕がIS学園史上最速らしいです。

「すごい機械の数ですね、山田先生これ全部わかるんですか？」

あからさまに山田先生が”よくぞ聞いてくれました!”と言う顔になる。ご機嫌取り成功。

「わかりますよー、ぜんつぶわかりますよー!研修期間中はいやほどこに通ったんですから!！」

えっへんと胸を張る。

手を引いて、ピット前方の僕が指した『すごい機械』の方へと連れられる。イギリス人は付いてこなかった。

ちなみに山田先生の相方、織斑先生は、、、、これから無謀にも僕が特攻を仕掛ける相手は、向こうのBピットで待機中だそうです。ISの装着にはいろいろと時間がかかるそうで・・・IS装備するのか・・・?



「あつちのモニターが操縦者の安全状態を・・・」

篤は先生方から『織斑君の指導をしていたのだろう、君にもピットへ立ち入る権利がある』とピットへの同室を勧められていたが、丁重にお断りしていた。『いえ、一般生徒がやすやすと入れる場所ではありません。織斑君の成長は観覧席から見守ります』と。

「このレバーは非常時、アリーナの遮断シールドを強制的に・・・」

篤が僕のことを『織斑君』と言ったのは先生の前だったからで、決して決して僕と篤の仲が悪くなったというわけではない。今日の朝あたりで『女子風呂入ったよー』って言ったたら僕をゴミでも見るかのような目で見てきたけど、、、『織斑君』とまで言われるほどではないはず、、、ないはず

「このつまみについている出っ張りは設計ミスかと思いきや・・・」

(篤、来てほしかったな・・・) 深層心理の声

いや、全然思っていないから。篤に付き添ってほしかったとか全然思っていないから!!

「織斑君、聞いてます?」

によきつと顔を覗き込まれる。ちよつとびっくりした。

「え、ええ聞いてますよ。ある特定のキーを押さえながら、出っ張りに触ると外部と連絡が取れるんですよ。テロ対策で『操作しろ！』って言われた時の」

「ど、どうしてそんなこと知ってるんですか!？」

マリアン又学園で全部習いました。学年首席の名は伊達じゃない。

「本で読んだんですよ、それしか覚えてないですけど」

はっはーと笑って、説明の続きを催促する。

「向かって左側にある埋め込み式のモニターは」

「アリーナとかじゃなくてこの部屋が映し出されるんですよ」

客観的に見て内部に異常はないかと確認するための

「足元に注目し」

「高性能なセンサーが埋め込まれてて靴ひもがほどけてたりするとブザーが鳴るんです、それでも倒れそうになったら床からのPICで無理やり体制を立て直してくれる、初期の床のピットでドジってえらいことしてくれた人がいたそうですよ、ですよね山田先生、ですよね当時日本代表候補生山田麻耶さん」

「は、はっ」

耳を押さえて縮こまる山田先生、、、IS界じゃ結構有名な話。

いかんいかん、目的を見失いそうになった。

これだけは言っておかないと

「山田先生、このマイクどうやって使うんですか？」

「え、え、マイクですか？横にあるスイッチを押しながらだとアリアナ全体に放送を……」

試合が始まるまであと10分くらい、山田先生のピット講座を受けていた。

S i d e   c h a n n e l

ピット中央に突っ立つ金髪人、もふもふとした黒の中身からは、ちらちらとISスーツが覗いている。

前方には副担任の山田と織斑一夏、さつきからずっと『こっちの』は『ああそれ知ってます……ですよね』『どうして知ってるんですか!?』というやり取りを繰り返している。無論、そんなくだらないものに参加する気は毛頭もない。

目前に迫る巨大なモニター、本来ならIS同士の戦闘を一番よく見える位置から映し出すためのモニター、だがISも出ないうちにその役割を発揮できるはずがない。ということ超満員の観客席を順々に映し出していた。

どこを映しても人、人、人、空いている席など一つもない。ざわざわとした雰囲気モニター越しでも伝わってくる。

一番安全で最も観戦しやすい場所、そこには政府関係者、研究所員、企業のエンジニア、その他もろもろ顔ぶれが一同に会していた。中でもイギリス人が多い、自国の代表候補とIS世界一が戦うのだ、来ない方がおかしい。

モニターは巡る、名前も知らない人の群れを映し回る。ただ人の群れを映してまわるそのモニターはまだ本来の仕事に就けそうにない。

その中に一つ見知った顔があった。喋ったこともないけれど、顔だけは知っている。

篠ノ之箒、IS開発者の妹

この一週間、織斑一夏を指導していたとか。なにせあの篠ノ之束の妹、ISに関する知恵も多いのだろうか。

「っあ！今、箒映った！！」

「え、ええ！どこですかどこですかあ！？」

「ほら、あそこ！左下の仏頂面！！」

「ど、どこっ！？」

「あー！消えちゃったじゃない！もーっ！山田先生がとろいから！！」

「うう、私、とろい、とろい、とろ」

「ああ！生徒会長だ！！会長が映ってる！！」

「今度は更識さんですか！！どとどど、どこですか！？」

どうやら、あの繰り返しからは抜き出せたらしい、今はモニターの中のとって人探しに夢中だ。とても生徒と教師の間柄とは思えないやり取り。

馬鹿馬鹿しくなつてモニターを見るのは止めた。

視線は自身の着るベンチコートへと落ちていく。

飾りっ気がなく、十五歳女が着るにしては大きすぎるサイズ。

本当なら袖の先からは指先しか見えないだろうけど、腕まくりをしてかろつじて手全体が出るようにしている。

黒いものがさらに黒く煤汚れて、目立たないようにと縫われていたのだろうがもう隠しようもない縫い目。

元の品をみてもB級品、いやBにすら達していない、Cだろうか、Dと言われても文句は言わない。

好き好んで着るはずがない

誰がこんなものを着るものかと

何故これを着ている自分がいるのかと

誰があんな男の着ていたものをわたくしがと

！！

その度に思い出すのは幸せそうな母の笑顔

まだ5歳にも満たない時の、唯一の記憶。

寒い夜のあの日

その時、アリーナが沸いた。

文字通り『ざわざわ』という音でアリーナが支配される。

何事かと顔を上げる間もなく理解した。

その巨大なモニターには打鉄を装備する織斑千冬が映っていた。

既にアリーナの中央まで移動したその操縦者は、何をするわけでもなく、腕を組んで目を閉じている。

アリーナにいる全員が息を呑んだ。

あれがブリュンヒルデかと。

わかる、あの人は強い。

地球上に存在するどんな生物よりも優れた運動能力を保持している。

こんなに離れているというのに、モニターをはさんでいるというのに

あれほど自身があつたというのに

『動物』という種族が潜在的に持つ能力が、”自分では勝てない”と戦いの拒否を訴えかけてくる。

全身がすくみあがつた。

全ての分野において自分が劣っていると  
同じ動物種としてセシリア・オルコットがああ  
の操縦者に勝る箇所はないと

ああ、本当に龍のようだ。織斑一夏の言ったことと何一つ違わない。



あの操縦者は『人』というカテゴリーを超越している。

背筋が一気に縮こまる。バクバクと心音が大きくなっていく

こわい

これからあの龍と戦わなければならないなどと考えたくない。

うさぎだ、自分はうさぎだ。

圧倒的な強さを前にして、ただ体を抱くことしかできない。

指先からの小さな震えが、段々大きくなって

絶対にセシリア・オルコットでは織斑千冬に勝てるわけがないと

「オルコットさん」

声がする。その声が一国の代表候補として絶対に考えてはならないことを止めてくれた。

「予想以上に強そう、頑張ってる」

モニターを見つめるその日本人の横顔は、モニターの中にある別の日本人とよく似ている。

体の震えが、、、治まった。

ISスーツの上からベンチコートのありえない筈のあたたかみが伝わってくる。

落ち着くと、沸々とさきほどまでの自分の弱気に苛立ちを覚えだした。

「わかってますわよ！そんなことっ！！」

羽織っていた物を一気にくるみあげその男へと勢いよく投げつける。

「ふげっ！」

いかり肩で織斑一夏に背を向けた。

行かないと

声をかけられなければ、すくみあがったままブリュンヒルデに向かつていたかもしれない。

負けたくない

声をかけられなければ、想像の時点で負けていた。

劣ってなどいない

多くの人が見ている。

急ピッチにもかかわらず機体を最高のコンディションまで仕立てた  
研究員たち

大嫌いだった父がへこへこと頭を下げた相手

自国の代表候補がやらかしたとヒヤヒヤの政府関係者

追い続けた母の背中、また一步近づけただろうか

少しだけ強く地面を蹴って、流れる動作で青の機体を展開する。

このブルー・ティアーズを持ってして、わたくしが負けるはずかない  
……！！

ピット・ゲートが空の光を呼び入れると同時に、機体を全速力で発進させる。

アリーナへと飛び出る直前、ISのハイパーセンサーで織斑一夏を確認した

『わあ、やっぱりこのベンチコートもふもふだあ』  
『私もっ！私も、もふもふしたいですっ！』

教師山田とじゃれていた。

(ふんっ、冷静になりましたわ)

アリーナに出たブルー・ティアーズを迎えたのは

目をつむりたくなるような太陽光と、今まで受けたことのないほどの大きな歓声だった。

14話なはず(後書き)

ちょっと短いかもです。

予想に反して、千冬さんがIS装備してきちゃいました。

ー夏君死にませんよね

次回いよいよ決戦です。

## 15話

眼前に迫るモニターには、苦しげな表情のオルコットさんが映っていた。

S i d e o u t

試合が始まって何分が経っただろうか。

長かったかのように思える彼女の時間も、まだ時計の秒針は5回と回っていない。

両者の距離は50メートル

かたやイギリス代表候補生、かたやISS学園教師

一見、拮抗に見えるその戦いは

あまりにも一方的過ぎた。

宙に浮く満身創痍の代表候補に、足をつけた1の攻撃も受けていない教師

誰が見ても勝敗はあきらか。軍配は教師にある。

こうして、50メートルという間で見つめ合っているのは少女の気おくれなのか、策なのか。  
おそらく前者しかでしかありえない

瞬間、教師が爆せた。

爆せたように飛んだ。

セシリア・オルコットは後悔した、避けられるとわかっていても打ち続けるべきだったと。攻撃は最大の防御、後手に回った時点で防御も攻撃も出来るはずがない。



打鉄は疾風の如く駆ける

狙われた機体より先に残り二機となったビットが反応した。

その風を捕らえようと

間合いには入れまいと

世界トップクラスのコンピューターが割り出した最適となる軌道で

わずかでも時間が稼げればと

疾風を迎え撃つ

だが無意味。

龍の疾風を自立機動兵器で食い止めようとする方が間違っている。

ビットから放たれるレーザーは、その風を止めることはおろか、触

れることさえ許されなかった。

時間稼ぎなど出来るはずもなく

疾風はさらに加速する。

無論、セシリア・オルコットは既に回避行動をとっている。

自らのピットが反応した0.1秒後には動き出していた。

その眼光を スターライトmkr に宿したままで。

だがそれも今までと同じ

逃げながら、照準には定まらぬ打鉄を当たる道理なく撃ち続ける、  
もちろん当たらないまま間合いを詰められ、一基ウン千万円とする  
大型ミサイルで無理やり距離を取る。

さっきもそうして生きながらえたところだった。

否、『今までと同じ』などではない。

現在、織斑千冬は照準はおろか、自らの視界にすら治まってい  
ないではないか。

『さっき『さ』のようにはいかない。』

「っな?!」

セシリアの表情が驚愕に染まる

サーッと顔から血が引いていく、その血管に新しく流されたのは冷  
水。

上から下に、つむじからかかとに掛けて全て冷えていく。

どこに消えたのか

何故見えないのか

どんな魔法を使ったのか

何故、背後に織斑千冬がいるというのか

免れることのできぬ運命に背骨がざわつく

消えてなどいなかった、自らの視界の網を潜り抜けられただけ

これから受ける痛みを想像、背中の筋肉が異常な収縮を繰り返す

見えていた、ISは全方向に視界がある、間に合わぬと判断し時から気付きたくなかっただけ

背中が熱い、受けたくない、あの剣には触れたくない、骨盤から鎖骨にかけて上半身の全てが脳に訴えかける

織斑千冬の操縦技術が魔法の域に達しているというだけ

！！

振り下げられた近接ブレードがスローモーションに見える。

全身全霊で体を捻ろうとするが、当然それもスローモーションになる。

間に合わない

ならばと、自らの武器　スターライトmkr　を盾にしようとするも、当然それは

間に合わない。

セシリア・オルコットは次の瞬間、確実にあの剣によって敗北が決まる。

あの剣に触れば、体が吹き飛ぶ。

叩き落される、ただ落ちる、制御など出来るはずもなく、受け身など取れる道理なく

みっともなく無様に滑稽に織斑千冬に負ける。

でも、そんなのは嫌だ。

痛いからとか、恥ずかしいからとかではない。

ただ純粹に、いろんな人に迷惑をかけたと思っている。

連日連夜、ブルーティアーズの調整を続けてくれた研究員

突然のブリュンヒルデとの決闘に冷や汗をかかせたイギリス政府関係者

入学初日の口論に驚いたクラスメイト、慌てふためいた教師

勿論                   あの男にも

多くの人を振り回して、その時間を奪っただろう。

だからこのままでは終われない。

胸を張って、その人たちの前で『織斑千冬と戦った』と言えるように

せめて

ゴオン！

その近接ブレードが振り下ろされる

横腹からすさまじい衝撃。

防御など出来ようもなく致命傷。

筋肉を伝って骨をつたって血管を伝って、その衝撃が体中細部に渡りこえました。

熱い、熱い、体中が熱い。

思い出したかのように体のいたるところが痛み出す。

開幕直後の左腿、その次に受けた左肘、自らの銃を盾にした時の右の掌。

腹がえぐれる、横腹から順に体がゴムのように固まりだす

ゴムは動かない、痛い、体が乗っ取られていく、痛みと麻痺の狭間にある気持ちの悪い肉の中。

気持ち悪い、熱い、熱い、気持ちの悪い、喉の奥まで酸っぱいものが込み上げてくる。

揺れる、体の中のありとあらゆるものが揺れる

胃が

内臓が

脳が

肝臓が

肺が

心臓が

本来の機能を破棄して、ただその保有者を苦しめることだけに機能する。

気持ちが悪い、気持ちが悪い、気持ちが悪い、ぐるぐるする気持ち悪い

瞬間的な加速度に耐えられなくなった体は

ゴムのように麻痺したこの体は

全ての箇所においてガタが生じたこの体は

もう目を開くことさえ拒否しようとする。



全身が意識の放棄を推進する。

このまま眠ってしまおうと、筋肉が脳からの命令を抵抗なく受け入れようとした。

ただ、そんなへこたれた自分より

貴族オルコットの方が断然強かったというだけの話

！！

バチバチっと脳の回線がはじけた。

ここで狙わずして、誰が貴族か

！

ここで撃たずして、誰がオルコットか  
！

弱い自分を認めして、誰が代表候補か  
！

試合の途中で諦めして、誰が

たとえ相手が織斑千冬であったとしても

ただ一太刀も浴びせずして

誰があの子の娘か  
！！！！

体中に電撃を走らせた。

ゴムになりかけた体を一息で溶かし

まさしく電撃、生半可な痛みではない、体は息を吸うたびにゴムに戻りたがる。

ぐちゃぐちゃになった体の内部に構わず

気持ちが悪いのは百も承知、それでもなお成し遂げたいことがある。

折れかけた心に喝を入れ

まだ戦える、まだ負けていないと心を奮起させた。

尽きようとするシールドエネルギーに虚勢を張らせ

もう少しだけ、あとちょっとでいいから猶予がほしい。

すさまじく落下するこの加速度で

眼前に迫る地面の中で

頭から土に向かうこの態勢で

銃口だけを『的』に向ける

!!!

当たる、この射撃は『当たる』

『的』であるあの打鉄に間違いなく『命中』する。  
態勢など関係ない、新幹線のような速さでの落下中でも関係ない

シンツと体とISの中で何かが繋がる音を聴いて

ありえないことを成そうと、無意識のうちにイメージしていた。

撃ち放つレーザーを強烈な意志で染め上げる

『青』ではなく『蒼』に

撃ち放つレーザーを完膚なきまでに自らの支配下に置く

自らを『動物』というカテゴリーから切り離して

撃ち放つレーザーに『的』という概念をインプット

『自然の理』からレーザーを解放

撃ち放つレーザーは『的』に『命中』することを義務とする

レーザーに残される権利はただ一つ

『撃ち放つレーザー』とはすなわち、いかなる状況においてもセシリア・オルコットに忠実なレーザーを言う。

「あとは撃ち放たれるだけ」

自然に口から零れ落ちた。これ彼女の射撃に因果の逆転を携える最後の呪文

的を見る必要などはない。

照準に合わせることなど無意味。

この射撃はセシリア・オルコットが『命中させた』という事実のもとに軌道するのだから

！！！

シューン！

いつもとは違うように聞こえたレーザーの発射音の後に、ドサツ！という自らが地面に転がり落ちる音。

肩口から背中を回って一回転、そしてまた肩が来て背中を回り一回転。

それを5回くらい繰り返したところでシールドエネルギーが尽きて、予定通り自身の敗北が決まった。

終わったという脱力感と同時に、醒めた心に付け入る身体の痛み  
そんなことをも忘れるくらいに気になったのは、最後の攻撃の行方。  
手に土の感触を確かめながら、首だけを傾ける。それ以外の箇所は  
動きそうになかった。

ISのハイパーセンサーによる視覚補助が消えた今、辺りは砂が舞  
い上がって何も見えない。

『試合終了。勝者、織斑千冬。』

自らの敗北をあまりにも平坦に告げられる。

そのアナウンスは用意されていたものだろうか、それとも今この試  
合を見終えた誰かが言っているのだろうか。

その疑問よりも遙かに大切に確証が持てるのは

砂煙の隙間から見えるブリュンヒルデには、塵芥の傷もついでいな  
いとらうこと。

S i d e o u t

『試合終了。勝者、織斑千冬。』

そのアナウンスは試合の始まる前から準備されていたものらしく、  
ピットに座る山田先生がそのディスプレイを操作しただけで流れた。  
6分32秒、それがブリュンヒルデを相手にしてイギリス代表  
候補生が持ち堪えた時間。



僕は専門家じゃないからそれが長いのか短いのかわからないけど  
オルコットさんからしてそれは本当にあつという間の時間で、一生  
記憶に残り続ける時間になるだろう。

一方的という言葉が優しく感じられるほどの、ワンサイドゲーム。

敵かに抵抗をするまな板の上の鯛、包丁を構えて慣れた手つきで調  
理する料理人。

そこには覆らない壁がある、覆してはいけない理がある。

まな板の上からでは、絶対に運命を変えられない。

表情を歪め続けたオルコットさんに、眉ひとつ動かさなかった織斑  
先生。

その実力差は天と地、織斑千冬の力を世界に知らしめるという意味  
では文句のない試合だったと思う。

ただ、オルコットさんが見せた最後の射撃、当たるはずもない態勢  
から放ったそれは当然の如く外れたのだが・・・

そこには、ブリュンヒルデとの間にある絶対的な壁以上に厚い、遵  
守しなければならぬ絶対覆せない何かを犯そうとする意志が混  
じっていたように見えた。

気のせいだろうか、また変なものを見ていただけなのだろうか。  
思考にふけようとした僕を呼び止めたのは

『山田先生。』

さっきまでオルコットさんとの戦闘を映していたモニターの向こう側、姉さんの乗る打鉄と繋いだプライベートチャンネルの声だった。

というか別に僕を呼び止めた訳じゃない・・・

「は、はいっ、どうしますかっ？このまま織斑君との試合を始めますか！？」

山田先生慌てすぎ。おおかた、さっきのオルコットさんとの試合に見入っててまだその余韻が抜けただけなのだろうけど。

『ええ、そちらの準備が出来次第始めましょう、、、ですが、、山田先生？』

こ、こわい。怒ってる、姉さんは今怒っている。何故、何故？！

「な、なななんですか？」

姉さんの怒気を感じ取って山田先生は震えだした。

よかった、怒りの矛先は僕じゃないのね。

はて、どうして織斑先生はお怒りになられているのか？

『織斑が専用機のフォーマットを行っていないことはおるか、百式がピットへ搬入すらされていないように見えるのですが……！』

「あ、あ、あ、ああああああつ……忘れてた……！……！……！……！」

『朝方には格納庫に到着して、オルコットとの試合を始めるまでの間に時間があるから、山田先生の指示でピットへ搬入するようにと  
言いましたよね』

「あつ、あつ、あああ、そ、その時、織斑君がピットの設備について説明してほしいと……」

『そのようなことが言い訳になるとお思いで!』

ビキビキと額の血管を浮かび上がらせる僕の姉

「ひい!、すすすみ

「あー、その時山田先生なら僕と一緒に『モニターに映る知ってる人探し』して遊んでましたよ」

『山田先生?や・ま・だ先生?』

有無を言わせぬ鬼の形相、否、有無を言うことを強制する龍の形相。

「す、すぐに準備しますー!ー!ー!ー!」

「っあ、山田先生いいです。僕は打鉄で戦いますから」

非常口のマークになって駆けだそうとする山田先生を止める。

「はい?」

うわっ、ホントに非常口のマークで止まった。

「ですから専用機は使わないと」

『何故だ？時間なら気にしなくて構わないぞ』

姉さんが怪訝そうな顔つきで言ってくる。

「専用機の話は今日の朝から知っていましたけど、お断りしました。いつも訓練してる打鉄の方がいいと思ひまして」

「い、いいんですか？」

「いいんですかって、朝言ってくれたのは山田先生じゃないですか。その時にきつちりと『専用機は使わない』と言いましたよ」

「え、え？」 勿論、そんなことは言っていないし、聞いてない

「だからピットへの搬入をしなかったんですよね。ですよね、山田先生。ほらちゃんと打鉄は用意してあるし」

指した方向にはどっしりと腰を据えるIS。

僕は本当に専用機が今日の朝到着するということを知っていた。同室の人から聞いたんだけど……

だから専用機ではなく打鉄で戦いたいというのは本心だ。

「そそ、そうです！思い出しました！織斑君は打鉄を使うんですね！！そうですよっ！だから私は百式をピットに搬入していませんですよ！！」 人として大事なものを失う教師山田

「もう山田先生は忘れっぱいんだから！。織斑先生に怒られて本気で焦ってたじゃないですか！」

あははーと二人で笑いあう。山田先生は冷や汗でダラダラだ。

それを見つめるモニターの向こうにある瞳

『一夏・・・人の弱みを握るのはいいが使いどころには気をつける

』よ

ギロリ！という効果音の似合う眼光に据えられる。

僕ではなく山田先生が縮こまった。

『一夏』と呼んだあたり、その言葉は教師と生徒という間柄としてではなく一姉弟としての忠告なのだろう。

『いいでしょう山田先生、今回は弟に免じてその過失を見逃します。

』

ほっと胸をなで下ろす山田先生。この瞬間、山田先生は僕に借りが出来た。ジャグリング部の顧問にでも……

トントン、トントンと弱々しげな足音が僕の意識を切り替えた。

「オ、オルコットさん！？ダメですよ！医務室へ行かなきゃっ！！」

一目散に駆け寄る山田先生。

「いえ、大丈夫ですわ。この程度でダウンするわたくしではありません」

首だけを動かして横目に見たそつちには、ピット中央の壁と一体化した椅子に痛そうに腰を据えたオルコットさんの姿。

左手で横腹を抱いて、右手はくずれ落ちようとする上半身を支えている。

色の良い健康的だった両脚は、動かないのか動かさないのか、今はバランスを維持するだけのつつかえ棒と化していた。

座っているというより、立てていないと言った方が適切。

その様子だけでさっきの試合がいかにか何々だったのか容易に想像できる。

『早く来い、織斑』

モニターの中には必要最低限の言葉で『試合を始めよう』と言った。

「わかりました、行きます。」

僕も飾り気のない言葉を返す。

それを合図にモニターは元の仕事に戻った。

コツコツとピットゲートへ歩みを進める。



と、忘れ物。

Uの字ターン

「ごめんね、置く場所がなかったからずっと着てた。」

オルコットさんに近づいて、まだかすかに息が大きいことに気付いた。

そのもふもふ感を手放す。

もふもふとした面がなるべく彼女の体にあたるように丁寧に返した。

「構いませんわ、別に」

もぞもぞと右手から徐々にその大きな服にくるまっていく。

その様子はにんじんを頬張るうさぎのように愛らしい。

「ありがと、じゃあね」

くるりと背中。

大きなモニターが打鉄を映していることを確認して、今度こそ戦場に向かう。

途中、僕の名を呼ぼうとした小さな声に気付いたけど、僕はそれを聞こえなかったことにした・・・

15話

(後書き)

そんなに簡単に因果は逆転しません

(どこのゲイボルクだよ！)

セシリアさんとランサーさんは相性がよさそうです

第四次の方とは別の意味で・・・

ネタが分からない方、すみません

次回、一夏君はどうなるのでしょうか？

16話(前書き)

あとがきあります

## 16話

当然の結末を迎えるのは嫌だった。

脚がもげそうになって、腕が生えているのか生えていないのかわからなくなつて

お腹がえぐれて、体の中身がバラバラになつた錯覚さえした。

ここで手放せば負ける、ここでその意識を手放せばもう帰つてこれなくなる、それだけを思つて戦つてた。

果たして、僕はその先で何を得たのだろうか？

試合の途中で何度も思い出した後輩の涙を掻き消して

『もういい』と誰かがアリーナに反響させたその声をも無視し

ただ只管、当然の結末を迎えないために足掻いた。

得た物は『当然の結末』。

自分と同じ状況に誰かがいれば、誰もが迎えるであろう『敗北』。

すなわち普遍。

あの時間、僕が姉さんと戦っている時、

どこにでもいる凡人。

一般人となんら変わらず、どこにでもいるような人間と化していた  
織斑一夏。

それは僕が最も嫌っていたこと。

織斑一夏という人間の中で在りえてはいけなかったこと。

他人と『同じ』であるということに激しく嫌った僕が

在り得ない、嫌だ

『同じ』でなくなるための馬鹿げた努力を積んだ僕が

アリエナイアリエないムカつくアリエないやだムカツク

でも、それは、、その感情は、、過去形になった、、はずなのに

誰かが、、僕の、、ために、教えてくれた、、はずなのに

だから、、に、、なろうとす、、るのは、やめた、、はずなのに

なのに、どうしてまたこの暗闇の中にいるのだろう

体は鉛のように重たく、瞼は開いているはずなのに何も見えない。

気を抜けば、ナニかに襲われるような不安感。

それなのに、まるで目が覚めているかのような冷静な思考。

この夢を見るのは、、久しぶりなんかじゃない

IS学園に入ってから、蘭ちゃんの涙を見たときからも、この夢を見ない時の方が、それこそ稀だった。

どうして？

好きでもないのに格闘技を習うことは止めた

興味もないのに専門書を読むことは止めた

目に見えるもの全てにつつかかろうとするのも止めた

起きている間で脅迫概念に襲われることもなくなった

時間がある時は、自分の好きな事をするようにした

なのに、、、どう、、して、、、？

出ないはずの涙で、黒い視界がにじんだ。



「、、、かさん」

ゆっさゆっさ、僕の体が揺すられてる。

「、ちかさん！」

ゆっさゆっさ、段々と意識が覚醒してきた。

どっちら僕はどこかで眠っていたらしい、さっきまで夢見てたから当然なんだけど。

「一夏さん！」

ゆっさゆっさ、今度ははっきりと聞こえた。

まだ瞼は開かないけど、もう一回ゆっさゆっさしてくれれば確実に起きれる

ゆっさゆっさ

はて、目を開ける前に考えてみよう。

僕を『一夏さん』と呼ぶ人間、思いつく限り一人しかいない。

微妙にイントネーションが違う気がするけど・・・

聞きなれてるのは『いちかさん』、今は『いちかさん』

つま、いつか。

なんで蘭ちゃんがこんなところに？

「ん〜、どしたの蘭ちゃん〜？」

ビキッ！と視覚よりも先に聴覚が反応した。

何の音かは分からないけど、それ以上に視界が悪い、というか暗い、見えない。

学園の医務室、ベッドで寝ている僕の隣に蘭ちゃんが立っていると

いうことはわか

「あ、ああなた！うなされていたと思ったら開口一番に他の女性の  
名を……！！」

蘭ちゃん……じゃ、ない。

おぼろげな視界に目を凝らせば、金髪。さらに見上げればそのこめ  
かみがヒクヒクとしている。

あ、さっきの音はこめかみが鳴ったのかな。

「……オルコットさん？」

「ええ！そうですわよ！オルコットさんですわよ！」

「え、オルコットさん？」

「だから！そのオルコットさんですわよ！」

「もしかして、オルコットさん？」

「人を検索エンジンの候補機能のように言わないでくださいます！  
」？

……。……！？

「な、ななななんでもオルコットさんが!？」

「べべべべべ、別に好きで来たわけじゃありませんわっ!」

上半身が飛び起こし、二人して焦り合う。

・・・、というか暗いな。

明かりといえば、この部屋の豆電球と廊下から差し込む蛍光灯のちよろつとした光だけ。

僕が姉さんとの試合を終えたのが4時半くらい。

意識を取り戻したのが医務室のベッドで6時過ぎ、その時は箒がいたんだけど、オルコットさんとなりの病室で寝ていると聞いた。

それからもう一回寝て・・・今起きた、何時？

「明るいのがいいな。」

目が覚めて暗いと、夢の続きみたいで嫌だ。

「電気を点けてもよろしくて?」

「うん、お願い」

てくてくと部屋のドア付近へと歩いていく金髪。

その様子を見て、つつかえ棒になっていたオルコットさんを思い出した。

「怪我！」

言った瞬間には部屋に人工的な明るさが灯り

まぶしい、とっている間にはオルコットさんはベッド横の椅子へと移動している。

「怪我、大丈夫なの？」

まだチカチカとする視界の中はつきりとその姿を見据える。

オルコットさんが着ているのも僕と同じような色の薄い病人服。

外見上悪そうなところは見当たらない

「あなたに心配されるほどじゃありませんわ」

ちよつと棘のある言葉で返された。

「心配されるのはあなたの方ですわ。ご自分の体を確認なさって」

「ん？僕は別に・・・」

と体を動かそうとして、

妙に重たいぞ、全く動かないという訳ではないけど。例えるなら着衣水泳しているような感じ、何かが体に纏わりついているとか、とにかく重たい。いや、それでもさっき起きた時よりはマシになっているのだけれど。

「ほら御覧なさい、動かないのでしょうか。まったく、あんな無茶をするから」

横目でこちらを見つめてくる。

「むー、無茶つて何さ、シールドエネルギーが尽きるまで戦い続けるのはIS操縦者として当然のことですよ」

ちよつとだけ嘘をついた、シールドエネルギーが尽きなかったから戦い続けたんじゃない、何かを成そうとしたが故にシールドエネルギーが尽きなかったのだ。

「ど・こ・の世界に織斑千冬と戦って二十分以上も保つIS搭乗歴一週間の人間がいますの！！わたくしのせいであなたが死んでしまふと思いましたがよ！！真剣に後悔しましたのよ！！」

「え、ご、ごめん」

その剣幕に思わず謝ってしまう僕。

しかし、それだけでは終わらない。

「大体あなたという人は！入学初日でいきなりブリュンヒルデに勝てるのか！！わたくしが弱いのか！！無茶苦茶ですわ！！」

「あ、あの」

弱々しい僕の声では制止など出来ようもなく

「前日に女子風呂に入るだとか！！ベンチコートがもふもふだとか！！山田教諭にじゃれているところとか！！」

「なのに！！試合前になると妙なオーラで！！声をかけても無視するし！！織斑教諭に何回斬られても起き上がるし！！試合が終わってISを降りた瞬間に倒れるし！！」

「さっきだって！！このわたくしが直々に様子を見に来たというのに！！あなたは他の女性の名を」

「

そこで剣幕は治まった。治まったというより、消えた。

ずいすいと寄せてきた体がしょぼしょぼと縮こまって、背中を丸め三角座りに顔を埋めてしまった。

椅子に座ったまま三角座りとは足が疲れないだろうか

「おーい、どしたのー?」

ともあれ、いきなり激しくなったり三角になったりのオルコットさんに疑念を抱かないわけがない。

まだ重たい右手を動かしてつんつんとオルコットさんをつつく。

つんつん、ふにふに、つんつん、ふに

「だあああああ! ! やっぱりあなたという人はあああ! ! !」

「え、えええ?」



どっかーん！と再び噴火するオルコットさん。

どうしよう、ますますわからん。

「ど・う・し・て怒りませんのよ！！わたくしはまた、自らの権威に驕るような発言をいたしましたのに！！」

？自らの権威に驕る発言？

「あ、さっきの『このわたくしが直々に』ってやつ？」

言っとオルコットさんはまた思い出したかのように、ちまちまと縮んでいく。

・・・縮まりきった。今度は三角まではいかなかったものの、手を膝に付き首を頂垂らすという姿勢に。

それを見て真摯な態度で臨まなければいけないと感じた

消え入りそうな声で話し出します。

「篠ノ之さんから聞きましたわ、一夏さんが織斑教諭と決闘すると  
言い出した理由。わたくしに気付いてほしかったんですってね」

「・・・」

口止めしていたわけではないけど、篝がオルコットさんに話すとい  
うのは意外だ。

「ええ、気付きましたわ。わたくしの愚かさに、セシリア・オルコ  
ットという人間性の在り方に。ひどく歪んでいましてよ」

声をはさむ余地はない。

「、一国の代表候補としての自覚が無く、他人の気持ちなんて、考  
えようともしない、客観的に物事を量れない、オルコット家が、  
、代々受け継いできた誇りを、、吐き違える、、生まれ持っ  
た権力、、なのに、自らの力であると、、勘違いする、、」

・・・鮮やかな金髪に覆われてその顔は見えないけど、その声の震  
えでどんな表情をしているかは想像がつく。

「多くの、日本人がいる中で、その文化を侮辱する、、そも  
それが、正しいかのように、、男というだで、馬鹿にする、、  
、、こんなんじゃない、母にも、父にも、追いつけませんわ、、

わたくしは、」

「オルコットさん」

「だからもう絶対言わないって、、相手が誰であろうと、、卑下するようなことは言わないって、自分の方が、、偉いとか、、優れてるとかは、、止めにするって、、決めた、、のに、、わたくし、、また、、」

「そんな泣きそうな声で言わないで」

重かった体は自然に動いていた。

その声を聴くのは嫌、そう思うだけで体は軽くなったのだと思う。

「、、ひぐ、、ごめんなさい、、ごめんなさい、、」

「いいじゃない別に、ちよとくらい迷惑かけたって、全部子供の頃の話になるんだから」

気が付けば、彼女を抱きしめていた。

いつベッドから降りたかなんてわからない。彼女の涙を受け止めなければならぬと、何か僕を操作したのかもしれない。

「、、、、ゆるじて、、ひつぐ、、」

「誰もオルコットさんを責めようなんて思わないよ」

鮮やかな金髪がこんなにも近くで、僕の腕の中。

背中から伝わってくる小さな震えと、胸に感じる熱い液体、紛れもなく彼女は泣いていた。

「、、でも、、わだぐしは、、

「はいはい、もう何も言わなくていいから」

より一層強く抱きしめる。

震える背中を優しく撫でる。

僕が誰かにそうしてもらったように、ぼむぼむと頭をたたく。

「、、、、ひつぐ、、ひつぐ」

その思いが伝わったのか、彼女はただ泣くだけとなった。

「泣き止んだ？」

彼女の体温を失い、もとのポジションに戻って数分、ようやく顔を上げたオルコットさんに問いかけた。

「ふ、ふんっ！初めから泣いてなどいませんわ！」

「え、じゃあこの服のシミは全部オルコットさんのよだれだったの？」

「違いますわよっ！涙ですわよ！」

強がったり、ツッコんだり忙しい人だ。

・・・目が赤い。

彼女がさきほどまで泣いていたという証拠

、僕で良かったのだろうか？こんな僕に、彼女の涙を受け止める資格はあったのだろうか？

自分自身に整理がつかない人間が他人の

「それより、その、一夏さん？」

まだ目の赤い彼女が僕の思考を遮ってくれた。

「なんぞー？」

「わたくしは先ほどから『一夏さん』と呼んでいるのに、『オルコットさん』と返してくれるのはどうかと・・・」

なにモジモジしてるんだろ？らしくないなー

「ああ、さつきから訂正しようと思ってた。苗字と名前を間違えるんだよね。日本では先に苗字を持つてくるから『織斑』が苗字で『一夏』がなま」

「知ってますわよ！わかってて名前で呼んでいるのですわ！その理論で行けばわたくしは織斑教諭を『千冬教諭』と呼んでることになりますわよ！！」

「あははー、今度一回本当にそう読んでみてよー、姉さんがどんな反応するか楽しみだ」

「・・・」

無言の圧力、冷やかな視線

「つつ、つまり、名前で呼べと・・・」

「そうですね」

「に、ニックネームとかじゃだめ？」

「例えば？」

前から考えてたやつがあるのだ。

「オルコットのオルをとって、『オルさん』」

「却下」

そ、即答・・・

「名前」

さっきから単語しか話さない、こわいよう

「せ、セシリア、さん」

「『さん』？」

「呼び捨てなの!？」

「第」

ただ掃除用具の名称を口にしただけではなかった。その青い眼からは『あの人は呼び捨てなのにわたくしは”さん”づけ?』と訴えかけてくる。

ふう、腹を決めよう

「せ、せし、」

「」

・・・期待をよせたその瞳に、素直に答える僕ではなかった。



「せ、っ、っせ、っ、っせーのよいよいよ」

手を取って、せっせっせーのよいよいとする。

どうだっ！……！……！

この緊迫した場面での僕の渾身のボケはっっっ！……！……！

「ふ、ふふふふふふふふふふふふ！……」

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴオオオオ！……！

「夏さん、っ、っ、面白いジョークでしたわ　……！！……！！」

ひいひいひい！満面の笑みで怒ってるうつつ！……！

「じいじいめんなさいい！……セシリアって呼ぶから、許してええ  
……」

「では、早く呼んでください」

ストーンと構え直すおるこ、セシリア。

「え、えと、セシリ、ってどうしてボイスレコーダーを構えてるの！」

「いはいえー、お気になさらずー」

さあ早くー、と続きを促される。

レコーダーは気になるけど仕方ない。

「せ、セシリア」

くう、顔が熱い、女の子を名前で呼ぶっているのはそれだけで緊張する、こんな美少女を、恥ずかしい、うう、何が一番恥ずかしいって名前を呼ぶだけで顔を赤くしている自分が、う、は

「『朝だよ起きて』って言ってくださいまし」

「朝だよ、起きて」 あまりの恥ずかしさに頭が麻痺している一夏君

「次は『起きないとキスするかも』と」

「起きないと、、き、キスするかも」

「『セシリアのいろんな所触るよいいの?』と」

「セシリアの、、いろんなとこ触るよ、い、いいの?」 元演劇部  
としてのギアがかかってきてる

「最後ですわ『ひゃあ朝からはダメ』」

「ひゃあ!あ、朝からは、、って何を言わせてるんだ何を―――!  
!」

「最後ですわ、後生ですからお願い!」

「え、うん、ならいいけど・・・」 相変わらず押しに弱い

「ちとっ!早く早く」

「ひゃあっ!、、あ、朝からはダメ、なんだから、、」

ぐはあっ!気が付けば言っていた!

熱い、顔が熱い。リンゴのように染まっていく僕の顔、、恥ずかしい  
しい

どうせセシリアはリンゴな僕を見てにやにやしてるんでしょ

ちらっとだけ顔を上げて、盗み見る

で

「セシリア、鼻血、鼻血――！」

「え」

ツラーっと流れ出る赤色。

それに気づかないセシリアのマヌケ顔。

「ティツシユ、ティツシユ！」

「あ、あわわわわわわー！」

「鼻血は止まった？」

セシリアが鼻にティシユを詰めだしてから数分、僕はそう問いかけた。

ボイスレコーダーを構えるのに身を取り出していたためか、純白のベツトに彼女の血痕が、、、、、

「ふんっ！鼻血なんて出していませんわよっ！！」

「え、じゃあこのベットのシミは全部セシリアの血尿だったの？」

「違いますわよっ！鼻血ですわよ！血尿とかありえないでしょう！」

「まったく、よだれ垂らしたり血尿出したり、忙しい人だなセシリアは」

「だ・か・ら！よだれじゃなくて涙っ！血尿じゃなくて鼻血！！」

よだれから涙へのジヨブチエンジはいいけど、血尿から鼻血へのジヨブチエンジはどうかと・・・

「あなた、意外と愉快な人ですわね」

ジトーっ！と皮肉めいたことを言ってくる。

”セシリアほどじゃないよー”とか”なんかアンモニア臭がする”とか、どうやってボケようかなんて考えてた。

なのに

「ありがと、そう言ってくれると僕もちょっとは変わったかなって  
思えるよ」

何故かそんな言葉で返してしまった。

「僕だって中学の頃まではオルコットさんと似たようなもんだっ  
たよ」

「え」

キョトンと目を見開けたセシリア、眼も鼻も赤くないことを確認し  
て、彼女から顔を逸らした。

言ったからには最後まで言うしかない。

「自分以外の人間はクズだと思ってたし、自分が一番優れていよ  
うと努力した」

どこを見るわけでもなく、白い壁の方を向いた。

「さすがに、日本人を見て『この猿があああっ!』とまではいか  
なかつたけど」

「うう、、面目ないですわ、、」

・・・、ここで止めてしまおうかと考えたけど、口は止まってくれない。

「友達なんてほとんどいなかったし、寄ってくる人は全部無視してた。ただどうやって他人と差をつけるかだけを考えて生きてた」

「極度の負けず嫌いが更に行き過ぎたかんじだったのかな、どんな分野でも自分が一番じゃないと嫌で」

「結局、無理なんだよね『一番』になるのって。学校で『一番』になるのは簡単、世界で『一番』は無謀」

「相手は究極の一を1個持つてる、僕は究極の一を100個持とうとした」

「何を極めても上がいて、でもその『何か一つ』だけに時間を注ぐのは怖くて出来なかった、『世界一になれなかったらどうしよう』っていう不安で」

「だから、僕が手を出したものを全部、中途半端。僕の夢は途方に暮れた」

「それでも努力することに意味はあるーっとかアホなことを考えてた僕に喝を入れてくれた人がいたから、僕はこうして」

「っで、ああー、僕は何故こんな話をしているのか、忘れ  
今のナシ全部うっそさー」

流れ出る言葉を自分で停止させた。

ああ、ホントになにゆえこんな話をしているのか？

セシリアが引いてるかもしれない。。

「あれ、セシリア？」

視線を戻した先に彼女の姿はなかった。

僕の話に呆れて帰ってしまったのだろうか

もぞもぞ

・・・む、嫌な予感がするぞ

もぞもぞ



・・・まさか、まさか、脚の辺りで人の温かさを感じ  
もぞもぞ

・・・掛布団が、異常な膨らみ方を、

「寒いでしょうに、肩まで布団をかぶりなさい」

・・・えらい近くで女の子の声がした。

S i d e   c h a n g e

「寒いでしょうに、肩まで布団をかぶりなさい」

一夏さんのベッドに忍び込んで、上半身を起こす彼に枕元から囁いた。

誰かが傍にいてあげないと、、彼は壊れてしまつかもしれない。何度斬られても立ち上がって、まるで呪われているみたいだった、父のように、、

そう、彼は脆い。見た目以上に、みんなが思ってる以上に脆い。

語りだした内容はあまりに抽象的で、具体的に彼の身に何があったのか、彼が何を目指したのかは分からないけど。

このままでは消えてしまうのではないだろうか、と思うほど彼の口調は弱々しかった。

だからわたくしが傍にしようと思った。

「せせせせせ、セシリアさんっ！なななな何をしていらっしやるの  
でしょうか?!」

「むー」

未だ体を起こしたままの一夏さん。

わたくしが掛布団に入れと言っているというのにー

両手で彼の腰に手を回す。

ギュッと抱きしめる。

「ひゃうっ！」

可愛らしい声を上げてそのほそっこい体がビクンと跳ねた。

構わず、そのままズルズルと掛布団の中へと引きいれる。

ずるずる、ずるずる

「うう、魔女の根城へと引きずり込まれてしまった……」

とが言いつつベッドの端っこへ逃げる一夏さん。

ふふふ、逃がしませんわ

「あらあら、枕がないと首を痛めますわよー」

もぞもぞ、ずるずる、もぞもぞ、ずるずる

ベッドの中で鬼ごっこ。

といってもベッドの面積なんて知れているものですぐにわたくしが一夏さんをつまえた。

そのまま今度は横にずると一夏さんを運んでゆく。

その間『うう』とか『はう』とか『恥ずかしい』とか、顔を赤くして抵抗する一夏さんが可愛く見えないわけがない。

「さあ！始めますわよ！」

「ええっ?!何を!?!」

枕を二人で分け合つての背中合わせで、わたくしが切り出した。

さすがのわたくしもこの距離で向き合つのは恥ずかしいのだ。

「こんなのフェアじゃありませんわっ！」

「だから何がっ?!」

やはり一夏さんを振り回すのは楽しい。いちいち、可愛らしいリアクションを見せてくれるから

ためしに今、左手を強く握ってみると、

「ええっと、その前にセシリア、やっぱり手を繋ぐのは……」  
止めにしようと言っただ。

「ダメですね。一夏さんは逃げるではありませんか」

「うう、もう逃げないから」

その懇願に左手の握力で返事をした。

「はう」

彼が顔を赤くしているのが分かる、見なくてもわかる、こつも薄着で密着していると心臓の音が聞こえるのだ。

ドクン、ドクンと心拍数が上がっていることなどお見通し

ふふっ、そうやって一夏さんを苛めるのがすごく楽しい。

今度は頭を押し当ててみる。

首を上に向け一夏さんの首筋にぐりぐりと髪の毛を押し付ける。

「なーにーが目的なーのーセシリアはー」

まだ上がる鼓動の速さとその体温に満足を覚えたわたくしは、更に

ぐりぐりとする。

「お金なら家にはないいいー」

今度は一夏さんが体全体をもそもそし始めた。

「ふふっ、すみません少し遊びすぎましたわ」

手を放す、押し付けていた頭部を元に戻す。

「っえ」

名残惜しそうにわたくしの手を追いかけてくる一夏さんの手と声を、い・ま・は無視して今度こそ本題を切り出した。

「あの話をしたのは初めてなのでしょう」

「っう、あの話とは・・・？」

わかっているくせに

「さきほど一夏さんが『今のナシ全部っっそさー』と言われた話ですわ」

「もう、全部うつそさーなのー」

その答えになっていない返答は、蒸し返されると嫌な話であると同時に、初めてした話であることを意味していた。

「そこです！一夏さんだけ『初めての話』をして、わたくしが『初めての話』をしないのはフェアじゃありませんわっ！」

言うてから気付いてしまいました。初めての話というワードから何か卑猥なものを感じますわね・・・

まあ、純粋な一夏さんはそんなことには気づかな

「初めての話ってセシリアは思春期だなあ」

、、、わたくしの中で一夏さん像が少しひび割れた。

「ふ、ふふふふふふふふふふふふー！ー！ー！」

「え、え？」

「わたくしは真面目な話をしようと言いますがのに、一夏さんはそうやって茶化しますの　　！ー！ー！」

「熱いよ！セシリアの背中から異様な熱を発しているよ！！」

「一夏さんにはー、後でお仕置が必要ですね　　！！！！」

「、、す、すみません、ごめんなさい、青少年に不適と思われる発言をしてしまいました、ごめん」

しまった、真剣に謝らせてしまった。そんなつもりではなかったのに

「いえっ、そんなに謝らなくてもいいですわ！」

「え」

「わたくしも『初めての話』という言葉からは少し卑猥なイメージを持ってしまいましたから・・・」

「まったくー、セシリアはエロいなあ」

「・・・」

「ごめん、ごめん、冗談だから今のは口が滑って」

「後で覚えておきなさい・・・！！」

「ひいー！！」



それから少しだけ間を空けた。仮にも今までずっと誰にも話したことのない話をするのだから、相手には真剣に聞いてほしいし、自分も切り替えたい。

「一夏さんはわたくしの家庭についてどこまでご存じで？」

本当に唐突に聞いた。

「……両親の身分がとり合わなくてお父さんがへこへこしてたっていうのは知ってる、それが原因でっていうのも知ってる」

それが初めてする話だと分かってくれたのか、一夏さんは切り替わった。声も雰囲気も今までのように砕けてはいない。

「ええ、父ほど敬うべき相手はいませんわ」

「……、……敬つ』っていうのは敬意を払うって意味で、英語ではりすへ」

「知っていますよ！！何年日本語を学んだと思ってらっしゃるの！！」

思わずツツコミを入れてしまったけど、その雰囲気は壊れなかった。

「……、……」

背中越しの無言、聞く態勢に入ったのだろう

「父は小さな村の炭鉱夫でしてね、母は常に先頭に立つ人でしたから、その村の視察に訪れて村長の息子である父と出会った。」

「そこからはドラマのような身分違いの恋が始まる。父は現場での力仕事だけでなく頭もキレルようでしたから、上手くいったんでしょうね」

「小さな村の炭鉱夫と大企業の社長が結婚。反対の声しか上がりませんでしたわ、しかしそれを治めたのも父の力。その頃には父は母に匹敵する頭脳を持っていましたから」

「わたくしを産んで、忙しくも幸せな結婚生活。誰もが羨む天才同士で美男美女、、、当然そこには亀裂が入りますわ」

自分で声を発しておきながらも、さっきの一夏さんみただなと思っ。聞き手のことなど考えず、胸に溢れた感情をただただ垂れ流しているようなかんじ。

「父の故郷である炭鉱村の取り壊しが決まった時ですわ、おかしくなったのは」

「父は猛反対、知恵も策も用いず感情に任せた駄々をこねるだけの子供のような反対。」

「みんな驚愕、あの合理的で仕事のこととなれば感情を捨てる鬼のような父が、いざ自分のこととなると聞き分けのない子供に戻るんですから」

「村の取り壊しは中止、、、それをきっかけに父の中で何かが切り替わったんでしょね」

「父は世界の全てを救おうとしましてよ」

背後から、かすかに息を呑む音が聞こえた

「深刻な食糧不足に悩む地域、露頭を彷徨う失業者、地べたに座り込む家のない子供たち、冤罪を被せられた一人の男性、、、全てを救おうと会社を上げて」

「当然、企業に不利益しかもたらさない人間はクビを切られる」

「地位を失った父は狂ったように頭を下げ続けましたわ、『救ってくれ、救ってくれ』と。女社長の夫という身分を使っているんな偉いさんに会って」

「『救ってくれ、救ってくれ』母に対してそう言っている時も勿論」

「当時のわたくしには、それが他人の顔色をうかがってへこへこする男のようにしか映りませんでしたけど」

言い終わった、胸のモノを垂れ流し終えた。

「オルコット系の企業が一時期、すごい金額の寄付やら物資やら、したのは」

一夏さんが口を開いた。

「ええ、全て父の仕業ですわね、長くは続きませんでしたけど」

「・・・そっか」

「全部、両親が死んでから気付きましたよ、、馬鹿な人、それまでのように堂々と世界平和を謳えばついてくる人間もいたでしょう」

「でも、あのベンチコートは着るんだよね」

「うっ、あれは、その、」

気付かれていた。あの煤汚れた服は父愛用のものだ。

「あれは、幼い頃、父と一緒にあのベンチコートにくるまっていた母が幸せそうな顔をしてたからであって、」

「それだけ？」

「うぐっ」

「本当は？」

「ええ！父のことは少なからず尊敬していますわよっ！やり方はどうであれ父によって救われて人がいるのですから！！今でもそういう人達から感謝状が届くのですから！！」

言った。遂に言ってしまった。

おそらく自分はこれが言いたかっただけなのだと思う。

『初めてする話』と称して本当は父の偉業を誰かに認めたてもらいたかったのだ。

全てを救おうとした父に、そんなものは御伽話だと嘲笑った企業両親が死んでからもそれは続いた。

会う人、会う人に

『君の父親には笑わせてもらったよ、君はしっかりしていて良かった』

『あんなお父さんを持って辛かったねー』

『自分が頭を下げて救われる人がいれば、とか言ってたぜアイツ、ばっかじゃねーの!』

『正義の味方にもなりたかったのかい？君の父親は』

ぶん殴ってやりたい衝動をねじ伏せて、彼らと一緒に父を笑った。

喉の奥までせり上がった衝動を塞ぎ込んで、彼らと一緒に父を侮辱した。

何よりその衝動は自分自身を否定するものでもあったから

信じつづけたモノを、男は猿だと、父は下衆だと、信じつづけた自分に対する裏切りに他ならなかったから

でもそれは、今日でお終い。

これ以上、自分を騙し続けることに意味はない。

セシリア・オルコットが自身を変えたとすれば

己が父を認める以外ありえない

父が成し得た偉業を笑う者がいれば、ぶん殴る

父を侮辱する者がいれば、ぶん殴る

正義の味方気取りかと嘲笑する者がいれば、ぶん殴る

誰かと一緒に父を笑う自分は、ぶん殴る

わたくしは父を認める。

「心は固まりましたかねセシリアさんや、ふおっふおっふおっふお」

こちらの心情などお見通しだと言わんばかりの背中の方へ。

「・・・ええ、固まりましたわ、もう今までのセシリア・オルコック  
トではなくてよ」

父を敬うのに恥じることはない。

「それは結構なことじゃ、ふおっふおっふおっふお」

演技めいた口調のそいつ。

それが何故かたまらなく愛おしい。



「ではまずは、織斑一夏を手に入れることから始めますわ」

「ふえ？」

始めにさっきの右手首を掴んだ。

がばつと邪魔な掛布団を蹴り上げ

体を起こすと同時に、目をぱちぱちさせている無防備な体にまたがる。

最後に余った手で

「ちょいちょいちょい！セシリア?!」

その左手をベッドに押さえつけた

「何ですか？一夏さん？」

ニコニコとした笑顔で答えた。

「じ、ニコニコこれは一体どついつことかな?!」

体は完全に麻痺しているのか押さえつけた両腕からはなんの抵抗の力もない。

もっと暴れるかと思ったら、意外とすんなり行ってしまうそう。

抵抗する一夏さんをじんわりいたぶりたかったのに・・・

「どづいづことって説明しなければわかりませんか？」

「わわわわわ、わかるわけないでしょっ!?!?」

真っ赤に染まった一夏さんの顔、女であると錯覚するほど可愛らしい。

征服欲に沸きたてられる、両手の拘束はもう必要ない。

その顔に白い手を這わす。

「っひゃー!」

頬っぺたから、あごさき、首筋を這って、肩口を撫でる。

ぎゅっと閉ざされた目はまだ開きそうにない。

今度は逆に、肩口から、首筋、頬っぺたへと手を移動させる。

そして動かないようにと両手でその顔を固定した。

「せ、セシリア・・・？」

「わからないというなら教えて差し上げますわ」

ゆっくりと馬乗りになった上半身を下げてゆく。

彼の全てを奪うために

覚悟などどつくに決まっている。

織斑千冬に勝てると言い切ったその日から心は惹かれていた

ブリュンヒルデを前にして臆さない彼に強さを感じた

何度斬られても立ち上がった彼は大事なことを気付かせてくれた

弱々しく語った彼はあまりにも危うく、脆かった。

そして、背中を合わせたベッドで

わたくしがこの背中を支えると

鼻と鼻がすれあう距離、たがいの息遣いをも感じ取れるこの距離で

抵抗と言う抵抗もなく近づけたこの間合いで

最後に一度、彼の名前を呼んだ

「一夏さん」

「セシ・・・リア、、、」

控えめに開いたその瞳は、うるうる揺れていた。

しばらくそのまま見つめ合って

ようやく彼は目を閉じた。

それは許可の合図なのか

考える間もなく、わたくしは残り数センチの距離を詰める。

こっちも目を閉じて、初めて味わう感触を迎えに

……、……、……、キスってこんなに堅いものなのだろうか？

もっとこう、柔らかくて、甘酸っぱくて、舌を絡みつけて……

が、その感触がいつまで経っても来ない。

おそるおそる目を開ける

眼前に迫るのは黒色、どこかで見たことのある色

はは、はははー、もうわかってしまいましたわー、どんな状況か解ってしまいましたわー

ギシギシと軋む体を動かして視点を引いていく

二回目ですわー、この状況二回目ですわー、そして一回目の時とは比にならないほどの殺気ですわー

『出席簿』の三文字

背後の殺気で骨の潤滑油全てが一瞬で干からびた。

かわりと言わんばかりに、背筋に嫌な汗がたらたらと

わたくしは忘れていた、一夏さんを手に入れることなどちよちよい

のちよいだと鷹をくくっていた。

必要なのは自身の覚悟のみ、、、そう思っていた頃がわたくしにもありましたわー

ー夏さんを手に入れるにあたって、無視できない壁があつたではありませんかー、きつとその壁は大きすぎて見えなかつたんでしょねー

ははー、はははー

「オルコット、  
何をしているんだ  
?????????」

????????????????????????????????????

疑問符の暴力に全身が震えあがった。。。

Side change

「一夏さん」

最後に一度、名前を呼ばれた。

何故『最後』なのか？

それは、これから目の前の女性になにわされるのか、、、わかって  
いるからだ。

顔に添えられた手で全身が硬直し

腰に受ける確かな重みと、どこを見ようとしても彼女しか映せない  
瞳に

男としての機能を否応なく思い出させた。

熱い

血のまわる速度が速い、ドクン、ドクン、一回ごとに増すスピード



を止められない。

体なんて動くわけがなかった。

腰から下はセシリアの、い、いやらしいお尻の感触に全てを奪われ  
上半身は、妖艶なセシリアの笑みに・・・全ての機能をセシリアに預  
けてしまった・・・

そんなセシリアさんによる金縛りを、気持ちいいと感じてしまう  
僕が、、なすがままにされたいと思う自分が支持を出したのか

「セシ、、リア、、」

口が勝手に動いて

許可を出すかのように、、目を閉じてしまった。



「よおー、オルコットー元気そうだなによりだ  
!!!!!!!!!!!!」

その声だけでガラスが割れそう。

ん？なんで、姉さん怒ってるんだろう？

姉さんはただ僕の様子を見に来ただけだろうに

「ななななな、なんの、ぐぐぐようでしょうか?????」

だからなんでセシリアもそんなに慌てるの？

まだ、僕の上に乗つかてるくせに・・・

・・・・・・っ!?!?

「ああ、私も一人の弟を持つ姉の身でな、大事な大事な弟のお  
見舞いに来たところだが、!!!!!!!!!!お前は何をしていたん  
だ、!!!!!!!!????????????????」

まずい、まずい、まずいぞ!!!

こんな状況誰が見たって、僕とセシリア行為に及んでいたようにしか見えないじゃないか!!!??

いや、実際行為に及ぼうとしていたのか・・・

そんなこつたあ!どうえもいい!!

え、えつち直前シーンを担任に見られるなんてっ!!

停学処分もいいところだ!!

ななななり、なんとかしなければ!!!

「わわわ、わわわわわたくしは!!!」

「ちちち違つんです!!!織斑先生!!!」

僕が華麗な言い訳を見せちやる!!

「ほおー、何が違つんだ織斑、まだ私は何も言っていないのにな  
「!!!」

「せせせ、セシリ、オルコットさんとはぶぶ、プロレスごっこを  
していたんです!!!」

ぐはぁ！苦しい、苦しすぎる言い訳！！

「プロレスごっこだと・・・？」

「そそそそ、そうですね！！今が第二ラウンドの始まりです！！」

細かい設定を付けて現実味を帯びせようとしたセシリアだが

それは完璧な墓穴だった

「お、お前たち、、まさか　？」

震える姉さん。

まさか、なんだというのか？

予想外のリアクションだったため、未だ馬乗りのセシリアと一緒に首を傾げる。

姉さんの視線を追いかける。

「違いますわ織斑教諭つ！！！！」

「そうだよ！！勘違いしないで姉さん！！」

そこは純白のベット赤く濡れているポイントだった。

「お、お前たち、取り返しのつかないことを・・・」

「姉さん違うつて！！そ、そそそその赤いシミは鼻血なんかじゃないよ！！セシリアの血尿だよ！！」

「一夏さん逆！！逆ですわ！！！！」

「え、え？」

完璧に慌てる僕

「そうか、血尿か、血尿のように見えたか、」

「あああの、織斑教諭、誤解ですよ・・・？」

だらんと手をだれて、何も無い白い天井を見つめる姉さん

それは、嵐の後の静かさだろうか？、嵐の前だろうか

「ねねね、ね姉さん？」



夜の学園に龍の雄叫びが木霊する。

僕達は二人仲良く、寮謹慎処罰。

なんとか血尿、、じゃなくて鼻血の件は誤解を解きましたが・・・。

そんなことより本当に、セシリアが変わってくれて良かったと思う。

それだけでボコられ続けた放課後なんか、おつりが返ってくるくらいだ



16話(後書き)

出張版、番外編

一夏「さあ！終わったよ！オルコット城陥落、おめでと〜！！」

蘭「おめでと〜ございま〜す！」

一夏「ふう〜、長かったね、ここまで」

蘭「妄想だけで、よくここまで来れましたよねー」

一夏「さて！無駄話はおしまい！！次回予告するよ！！」

蘭「はい！なんと次回から番外編に入ります！！」

一夏「物語を1、2倍楽しむためのっ！！その注目のラインナップを発表しちゃってください！！」

蘭「え〜っつと

”もうこれが本編でしょうっ！”

『 If 13話、蘭「なんでアマトークなんてみたんだ私・・・」

”無数の触手がうなって襲っ！”

『 If 13話、「女風呂でもみくちやにされちやう織斑君はあはあ」

”あわわわわわ！千冬さん助けて！夜のアルプスいちまんじゃくつ！！！”

『 If 16話、セシリア』一夏さんはわたくしの軍門に下りましたわ』

”面識関係とか無視して一同が集う”

『 第一回キャラクター紹介』

・・・の4つです！！”

一夏「うゝむ、どれもエロそうですなあゝ」ジュルリ

蘭「もう、3つ目アウトでしょう、本編の時点でアウトですよ」

一夏「そして！！番外編終了後には！！何が待っているのかね！！  
蘭ちゃん！！”

蘭（無視、私の意見無視・・・？）

蘭「本編の続きが待ってマース、鈴さん出てきまーす」

一夏「うむ、よく言ってくれた」

@第「作者のブログにもSSありましてですね、原作設定の一夏君が部活作ったり、セシリアの奴隷になったりと・・・下からどうぞ  
<http://jaguringsyoukounn.blog.fc2.com/blog-category-7.html>  
1”

蘭「検索機能とか上手く使ってくださいね」

一夏「一応『自作』で検索すればすべてのSSが引っかかるはず」

蘭「ではでは、また更新の日まで」

一夏「さよーならー」

If 13話 蘭「もうこれが本編でしょう!」 (前書き)

あくまでifですので本編にこの話の影響はでません

If 13話 蘭「もうこれが本編でしょう!?!」

—夏君が電話するところから始まります

『なにかあったら電話してくださいね』

瞼に焼付いたその笑顔で、不意に後輩の言葉を思い出した。

電話、、、後輩に、電話

ひょっとして『なにかあった時』っていうのは「いついつ時」のことを言うのではないだろうか？

『—夏さん、溜め込みやすいんだから』

今まさに、僕は『溜め込んで』いるのではないか

、、、電話、蘭ちゃんに？

そんな言葉の解釈よりも、僕はその後輩に電話をかけるという行為に自然と頬が緩む。

よしっ！蘭ちゃんに電話しよう！

名案だ！どうして最初から電話しなかったんだろっ！！

むっふふー、

思えば蘭ちゃんは僕の唯一無二の親友ではないか！！電話しない方がおかしいっかたのだ！！！

いつもの左ポケットからケータイを取り出し、数少ない電話帳の中からその名前をCrick!Crick!

早く出ないかな、出ないかな？

ふとんを抱きしめて、ベッドの上でごろごろと転がる。

やばい顔のニヤニヤが止まらない、どうして蘭ちゃんに電話するだけなのにこんな心弾むのだろう

じろじろ、じろじろ、にやにや、にやにや

早く、早く出て！

『もしもし、一夏さん？』

そっ、これだ、この声が聞きたかったのだ。

僕を変わらせた張本人、五反田蘭。

この人がいなければ幼馴染に『変わった変わった』と言われることもなく、ISの世界チャンピオンとも戦うことはなかったであろう。

中一の冬からずっと支えられてきた、そうでなければ僕は未だに馬鹿げた理想を追い続けていただろう。

ついこの間だって、蘭ちゃんがいなければ一人で博覧会に行っただろうし、あの暗闇からも抜け出せなかったかもしれない。

改めて気づいた、五反田蘭が占める僕の心の面積は、、、あまりにも大きい

僕は五反田蘭が好きなのかもし

「え、あの、蘭ちゃん？」

その気持ちに気付かないふりをするかのように声を出した。

『？ええ、その蘭ちゃんですけど』

どうかしました？と続ける。

蘭ちゃんは普通だ、おかしいのは僕。

その声を聴くだけで胸がキュッと切なくなる

僕はナニかいいようなない感情を蘭ちゃんに対して抱いているといのに、蘭ちゃんは僕を全然意識していないじゃないか。

そんなのは、ただの友達みたいで嫌だ・・・

いつものように言葉が出てこない。

「えっと、そのね、何かあったら電話していいって言ったから・・・」

愚直に理由を述べる、本当に理由はそれだけだった。

『・・・一夏さん泣いてます？』



「え、泣いて、なんか、ないよ・・・」

声が震えていたのだろうか、突拍子のないことを言われて納得してしまっただ。

『泣いてますよっ！どうしたんですか！？何があったんですか?!』

「、、だつて、、、、うう、、、、だつて」

ますます涙が溢れ出る。頬をつたうこの熱さは久しぶりだ

今まで気付かなかった感情が一気に押し寄せてくるように。胸から締め上げられるものが涙に変わる

『あの、、今から家に来ますか？今日は誰もいませんから・・・』

「、、、、いいの?」

『一夏さんの都合が良かったらですけど、、、、っあ、寮ですよね、やっぱり無理な』

「うづん、無理じゃないよ、、、、行く」

『は、はい、待ってます』

「、、、じゃあ行くから、、、すぐに行くから」

そこで電話は切った。

受話器越しより、ちゃんと会って話したかったから。蘭ちゃんの姿を見て、この気持ちを確かめたかったから。

走った。

人生で初めてタクシーを呼んだ。

寮の規則なんて忘れた。

涙はやはり止まらなかったけど。

S i d e   c h a n g e

『、、、じゃあ行くから、、、すぐに行くから』

そこで電話は終わった。携帯を閉じて、ベッドに身を投げ出す。

「一夏さん、えらい重症だったなー」

”友達作るっ”とか意気込んでたから、マスコットのように扱われてストレスが溜まったというところか。

まったく慣れないことするから。

「ふふふー」

とはいえ一夏さんが家に来るということは非常に喜ばしいことだ。

しかも二人つきり、今日は家には私しかいないのだ！明日は月曜日だというのに何をしているのかね私の家族はっ！

むふふ、何かの手違いで一夏さんは私を

むふふ

でかしたぞっ私の家族！

実際、一夏さんは私の気持ちになんか気付かないんだろなー、と半分諦めている自分がある・・・

しかし！一夏さんは自分が弱っている時、すごく甘えてくることを私は知っている！！

極めてチャンス！！

服装とか髪型とか慎重に調整せなば・・・！！

勢いよくベッドから立ち上がった。

一夏さんをもてなす準備が整った。

服装は上下ジャージ、結局着替えていない。以前、あまりにも服を持っていないことが判明した一夏さんを連れ出し一緒にお買い物した時に買ったやつだ。曰くジャージ姿の女性は美しいとのこと。ちなみにそのお買い物もの以降、一夏さんは私と出かける時、私が見繕った服を着てくるようになった。偉大な功績である。

髪は降ろしてロングストレートに。いやこれも変わつたらんのですが……。一夏さんに出会って間もない頃、初めて髪型を変えた時、一夏さんが私を見て『髪降ろしてる方が可愛いな』と呟いたことは忘れない。当時ぶつきら棒だった一夏さんがそんなことを言ったのだ、私は感動で泣いた。

・・・何か忘れてる気がするけど、まあいいか

さて、後は精神統一で心を清めるだけ

『ピンポン』

でえー早いなー!!

「はい、今出ますー!!」

階段を駆け下りて、玄関を目指す。私の部屋は二階にあるのだ。

ガチャリ、店ではない方の入り口を開けた。

「いらっしやい、一夏さん」

「あ、こんばんは蘭ちゃん」

そこにいたのは、月明かりに照らされた、やっぱりジャージの一夏さん。

いつにもましてサラサラとした髪と、妙につるつるした肌。

そして、さっき泣き止んだと言わんばかりの赤い目。

「でええ!!どうしてまた泣き出すんですかっ?!!」

「うう、、ごめんなしやい、、」

いかなな、、こりゃホントに重症だ。

「さ、早く中に入りましょう」

手を取って、家の中へと案内した。

「何か飲み物持ってきてますね」

そう言って、部屋の主は出て行った。

・・・というわけで、蘭ちゃんの部屋でございます。

どどどどーしよう！年若い男女が夜のお部屋で二人きりなんてー！しかも蘭ちゃん以外に誰もいないよっ！あわわわわわ何かの手違いでででで！！なんで！？僕はどうしてこんなに慌てているの！？もう二十回以上はこの部屋に入ってるし今だっていつものポジションに座ってるし！！脚の短い丸いテーブルが部屋の中央にあつてててててその横のクッションの上にせせせせ正座してるだけだしししし！！今までだって何度も二人きりというシチュはあったのになに！！そうだよ！！いつもと一緒だよ！！蘭ちゃんだって普段着っぽい恰好だしというかジャージだったし！！髪型もいつもとおんなじだったし！！いや僕の目には異様にかかかか可愛く映ったのですが！！そう意識されていないのだよ！！ただ仲の良い先輩が電話してきていきなり泣き出しちゃったよコイツってなったから仕方なく家に呼んだだけで！！ステイクルstay cool 落ち着くんだ僕！そうこれはいつもとなんら変わらないこと、普遍的なのだよ！僕が慌てる道理などありはしないさ、、、さあ、部屋を眺めて優雅に蘭ちゃんの帰りを待つのだ・・・掛け時計、勉強机、電気スタンド、カレンダー、ダンス、ダンス、ダンス、ダンス、



・・・おでごとおでごとでピットタンコという素敵イベントが待っている  
！！！！

落ち着くな僕！！我が顔よ　赤くなれ！！

ぬーっつと両手を前に突き出して、赤くなれと念じる。

「何やってんですか一夏さん？パントマイムの練習？」

「へ？」

くはあ！いつの間にも！！見られていた！！食器トレイを持った蘭ちゃん  
がそこに立っているではないか！！

別の意味で顔が赤くなる・・・

「パントマイムじゃないよ、超能力の練習だよ、」

「あははー、なんかいつもの一夏さんに戻りましたね」

「むうー」

やはり僕は変だったらしい。

「あつたかいお茶でよかったですか？」



「うん、ありがとう」

その動作は慣れていた。さすがは定食屋の娘、安心できる動きで湯呑をテーブルに置いてゆく。

そして自身もそのクッションへと身を降ろした。

うん、いつもの位置だ。

「ほいで、どーしたんですか？いきなり泣いて電話してきちゃって」

「うっ」

言われて気付いた、僕はさっきまで泣いていたのだ。えたいの知れない感情に襲われて、情けない、そんな醜態を蘭ちゃんに晒してしまうなんて

「あててあげましょつか、一夏さんが電話してきた理由」

「ふ、ふん！できるものなら？」

わかるはずがないさ、僕があんなにへこたれた理由なんて

ずずずと優雅にお茶をすする蘭ちゃん

僕も負けじとお茶をすすろつと

「女風呂に入れられたからでしょ」

「ぶっはー!!」

何故、なにゆえわかったの?!

お茶飲んでなくてよかった、吐き出すところだった

「凶星ですかまったく」

「な、なにゆえ、お解りになられたのでしょうか?」

「香りが違うんですよ!!か・お・り・が!!」

「え、ええ?」

「ほら、もうこの香り!加えて髪の毛のサラサラ感!!」

ずいずいと身を乗り出して、髪を撫でられる、鼻でクンカクンカされる

うっ、恥ずかしい

「普段の一夏さんじゃありえませんが!この匂いは!!いえ普段の一夏さんも十分良い匂いなのですが」

こ、こんなことを言われておきながら、さらに、眼前に迫る前かがみの蘭ちゃん、む、胸が見えそつで

「ら、蘭ちゃん、恥ずかしい」

「え、ああすみません」

するすると元にもどる蘭ちゃん。

「それでね、スクール水着とか着させられて」

「あゝ、されそう、一夏さん可愛いですから、着せたくになります」

「みんなに見られるし、手つっこまれるしで大変だった」

「ちょ、ちょっと待ってください」

「？」

右手を額に当て、左手はパーで突き出す制止の合図

なんだろうか？

「見られるのはわかるとして、どうして一夏さんのスクール水着姿に手をつっこまれたりするのでしょうか？」

「え、だって女子風呂に入れられたから」

「女子風呂に入ったというだけで、女の子と一緒に入浴したという意味では」

「そういう意味だけど、、あはは？」

「っな！な、な、な！」

驚愕の顔が、蒼白になって、徐々にそれは憤慨えと変貌し

「何やってるんですかっ!!???一夏さん!!」

「だから超能力の練習だって」

「その話じゃないですっ!!」

「久しぶりに五反田家の伝統芸を見た」

「もう怒りましたよ!!ぜんつぶ話してもらいますからね!!IS学園に入ってからのこと!!!!」

「うむ、よからう。IS学園の何が知りたいのかね？」

「RPGの序盤に出てくる案内役みたいに言わないでくださいっ!!」

楽しい時間が始まった

「まったく、何回同じ技させんだよって感じで」

「仕方ないですってー、人が寄ってきてその相手をするっていうのはジャグラーとして必須スキルでしょう」

「むー、そうだけどー」

「その調子でいくとギターも弾かされてるんじゃないですか、あとヴァイオリン」

「いや、まだ楽器は寮に持ち込んでないんだよね」

「そなんですか?」

「元々、初日から寮に入る予定はなくて」

#### 話し込む僕達

「でもその隊長さんは中々すごい人なんじゃ?」

「そうだね冷静に考えれば、姉さんの進軍を防いだわけだし・・・」

「何者なんでしょうね?その隊長さんは」

「また機会があれば聞いてみよう」

「っあ!思い出しましたー夏さんに言おうと思ってたこと!」

「なにになに？」

「織斑一夏を見守る会のことなんですけどっ！」

「げえ！まだそれ存続してたの！？」

「次期会長にですね」

更に話し込む僕達

「はあ、話し込んだね。今何時だろ」

「10時30分です」

「うぐっ、もうこんな時間か・・・」

そろそろ帰らなければやばい、寮の規則にもひっかかってくるし、  
なによりこんな時間まで若い男女が一緒にいるわけにはいかない。

「そろそろ、ドロンしようかな」

にんにんと人差し指を立てるポーズ。

「はい、またいつでも来てください」

にこにこ笑顔で答えてくれた。

「じゃあ、明日来る」

「明日は平日ですけど・・・」

「そいじゃ明後日」

「まだ火曜日ですよっ、どんだけ来たいんですか!」

「むぐう、だって蘭ちゃんは唯一の心の癒し」

「そ、それは嬉しいです」

よっこらせと立ち上がった。

「今日はありがと、蘭ちゃんに話したらスッキリした」

「いえいえ、どういたしまして」

ドアの方へと歩く。

「見送りますよ」

いつものように、本当にいつものように蘭ちゃんもついてきてくれた。

部屋を出て階段に差し掛かる。

違う

ここで帰ってはいけない。

まだ目的を果たしていないじゃないか。

止まって

わかっている、そんなことは、わかっている

だというのに、何かに背中を押されるように降りてしまっ

一段、また一段と

素直に

また繰り返すのか

ようやく気付けた気持ちに気付かないフリをするのか

お願い

不安で不安で、断られたらどうしよう

この心地の良い関係が崩れてしまったら

出会ってすぐ言うつもりだった、でも怖くて、その優しさに甘えてしまった

思い返して



もし、彼女が男ばかりの学校に行ってしまったら  
考えられない

もし、彼女が異性に囲まれて入浴したというのなら  
嫉妬で狂い死ぬ

もし、あの写真立てに僕以外の男の写真が入っていたら

そうだ、あんな物はなかった。

IS博覧会に言ってから何回かあの部屋に入ったことがある。  
しかしそんな物はなかったではないか。

いつもは隠していたのだろう・・・

今日はいきなりだったから、準備しきれていなかっただけ

よほどの思い入れがない限り、異性の写真なんて、枕元にはおかない

枕元の男が、、、自分以外の女ばかり見て、自分以外の女と  
入浴して、、、

仮にその男が僕で、女が蘭ちゃんなら

「じゅめん、忘れ物したかも」

これ以上、彼女につらい思いわせるわけにはいかない。

脚は止まった。あと一步で床というところで

「へ、忘れ物？」

「うん、、、戻って」

あれだけ長かった階段を一瞬で逆戻り、再び蘭ちゃんの部屋へと入った。

今度は確かな決意を抱いて、彼女の手によって開かれたドアをくぐる。

「一夏さん何か持ってきましたっけ？」

真面目にキョロキョロと部屋を見渡す蘭ちゃんを

「違うよ、、、忘れ物は、、、」

後ろから抱きしめた。

「へ？」

「蘭ちゃんだよ、、僕は蘭ちゃんのことを、、好きだから、、このまま置いておきたく、、ない」

「いいいいー夏さん?!」

硬直した彼女の体を優しくほぐすように、抱きしめる  
その背中はとても細く、繊細だ。

「僕は、蘭ちゃんのことを、好き、大好き」

「そそそそそれはどういう意味で!？」

likeなんかじゃない、友達としてなんかじゃない

「異性として蘭ちゃんが好き」

「、、、ちゃ、、、ちゃんと顔を見て言ってください」

しゅるりと僕の腕の中で回った。

至近距離で体のほとんどがくっついたまま向き合う。

かすかに彼女の目も震えているのが分かった

「好きだよ、蘭ちゃんのこと以外考えられない」

「、、、もう、遅いですよー夏さん」

顔を僕の胸につずめて、ようやく互いの気持ちが伝わった。

「もっと早くに言ってくれたって、いいじゃないですか」

本当にその通りだ、ずっと嘘を吐き続けていたのだから

「ごめんね、つらい思いさせて」

「、私、不安だったんですからね、一夏さんが、IS学園行つちゃうから他の、女の子と、くっついたらどうしようって・・」

蘭ちゃんが泣いているのは僕のせいだ、責任をとらないと

「もう、つらい思いはさせないから、蘭ちゃんを幸せにするから」

「い、ちかさん」

顔を上げて、彼女は目を閉じた。

何をするかなんてわかってる

「ん」

キスをした。

ただ唇を合わせるだけの、小鳥キス。

味なんてしないはずなのに、とてもとても甘酸っぱい。

「もっと、もっとちゃんと私を、一夏さんの物にしてほしいです」

僕の手を引いて、彼女はベッドへと倒れこむ。

うう、体がほぼ勝手に彼女に覆いかぶさるように・・・

「い、いいの？」

最後の理性が働いてくれた。

彼女は声を出さず、ただ顔を赤くしてコクンと頷いた

あ・や・ま・ちっ

後日談っ！！

「いらっしやいま、ってなんだよお前からかよ」

「む、『なんだよ』とは何かね、お義兄さん」

「お前の義兄になった覚えはないっ！」

「え？もうプロポーズしちゃったけど？」

「は、早すぎるー！同い年とは思えないー！」

「お兄、今は本当にお客さんとして来てるんだからちゃんと接客して」

「・・・何名様ですか？」

「蘭ちゃん、あそこのテーブル座ろー」

「えー、カウンターがいいですよー」

「・・・では、二名様カウンター席へとご案内します」

「やっぱ御座で、日本人なら畳でしょ」

「靴が脱げるってというのが楽なんですよね」

「てめえら！接客される気ねえだろっ！？」

「メニュー何にしようかー？」

「私、一夏さんと一緒なら何食べてもおいしく感じますー」

「この野郎・・・！」

「僕だって蘭ちゃんと一緒になら何食べてもおいしいよ」

「夜は一夏さんを食べたいなー」

「い、いつも食べてるじゃないっー！」

「今日はどんな味付けがいいですか？ふふふ」

「え、えつと、縛ってくれと、、、、、いいかな」

「それっばかりです一夏さん」

「うう、ごめん・・・」

「今夜は言葉責めに決定で」

「あの、、縛ってね」

「どうでしょ、一夏さんの誠意次第ですかね」

「そ、そんな〜」

「は・や・く・決・め・ろや！このバカカップルども！！」

「ああ、すみません店員さん、僕達ここ来るの初めてなので・・・」

「毎週来てるだろうがよ！！なに急に芝居がかった演技してんだよ  
！！！！」

「あなた、店員さんを怒らせちゃダメよ」

「蘭もか！？お前も乗るのか！？」

「ふむ、では聞こう」

弾君、あなたのお勧めのメニューは何かね？」

「ん？俺のお勧めか？そうだな、生姜やk」

「蔵さーん！から揚げ定食一つー！！」

「おじいちゃーん！私は野菜炒めー！！」

「聞けよ！せめて俺のお勧めを聞いてからにしろよ！！」

蘭ちゃんが僕の彼女となってから、数か月。

僕の日常は変わったようっていて、あんまり変わっていなかった。

変わったと言えば、それは気持ちとか選択基準とかで・・・もつ常に、蘭ちゃんのこと考えてます

厨房からは蔵さんの声

「がっはっは！それでこそ蘭の選んだ男だ！」

すぐそこからは弾君の



「はあ、いつかこうなるとは思ってたけど、はあ」

テーブルを拭いているのはお義母さん

「若いっていいわよねー」

カウンターには常連客

「ちくしょう、ちきしょう、蘭ちゃんがワシらの蘭ちゃんが一  
ー」

そして隣には

僕の愛する人がいる

「ねえ、蘭ちゃん？」

今がチャンス、誰もこっちを見ていない

不意打ちじゃ、不意打ちじゃー！

「なんですかー？」

「っ?!」

チュ

つと僕が顔を近づけるより遙かに早く、キスされていた・・・

「ふ、不意打ちは卑怯っ」

「夏さんだって、しよつと思っただくせにー」

f i n

「If 13話 蘭」もつこれが本編でしょう!」 (後書き)

次はお風呂です

隊長さんとの絡みになると思われ

そしてその次はセシリアさんの、、むふふ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1982w/>

---

【IS】一夏を男の娘にし、かつ中学まで蘭と同じ学校に通わせるところになった

2011年10月28日03時45分発行